

松平文庫本『光源氏一部謡』翻刻（中）（明石～槇柱）

今井，源衛

<https://doi.org/10.15017/2332811>

出版情報：文學研究. 64, pp.123-202, 1967-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

松平文庫本『光源氏一部調』翻刻 (中) 明石 榎柱

今 井 源 衛

光源氏一部調第四 (外題)

(表紙)

(目次)

十 明石

十一 躬尽

井 関屋

井 蓬生

十二 絵合

┌ (扉裏)

1ウ

(本文)

十 明石

なを雨風やまず神なりしづまらで日ころへぬ いと物わひしき事かずしらずけんし いかにせましみやこに帰らん事もまだ世にゆるされなくては人わらはれなる事こそまさらめ猶これよりふかき山もとべてめやあとたえなましとおほすも波風にさは

かれてなどのちの世まで人のいひつたへん事いとかるくしき名をやながしはてんとおほしみたる 御夢にもたうおなしりう王のたくい也来 さまざまなる物のみきつゝまつはしきこゆとみたまふ 雲まもなくあけてあけるゝ日かすにそへて京の事もおほつかなくかくなから身をはぶらかしつるにやとおほすはふらかすとはもちうしなふ心也 かしらさしいづべうもあらぬ空のみだれに京よりもいでたちまいる人もなし

一 二条の院よりぞむらさきのおもとより也 あながちにあやしきすがたにてそぼちまいれるぬれしほ たれたり みちかひにてもみちのゆき 人の

なにぞと見わくべうもあらずまづをひはらひつべきしづのおのむつましうおほさるゝも 我なからくつしにける心のほとおもひしられたまふ 御まへにめしてとはせ給 かたくなにかたりなせど京の事をおほせはいふかしくていかゝなとき京にはこしめす。たゝ雨のおやみなくふりて風は時く吹いでゝ

日比になり侍りぬるをれいならぬ事申侍る也　うちにまいり給ふかんだちめもみちたえてまつりこともとちてなんさはぎ侍る　京はいとかくまで地のそこをるばかりのひふり氷ふ　いかづちのしづまらぬ事は侍らざりきと　こゝをはいみしきさまに「おちおそれてをるかほのからきにも心ほそきそまさりたまふ　御ふみにはあさましくおやみなぎ比のけしきにいとゞ空さへとつる心ちしてなかもやるかたなくなん紫　うら風やいかに吹らむおもひやる袖うちぬらし波間なきこ

3オ

ろ　あはれに心ほそき事ともかきあつめ給へり　ひきあくる
一説みきは三さうはい也(ママ)
よりいとゞみきはまさりぬへくかきくらす心ちし給ふなみたのみ(傍記「水」)ぎ　その又の日の夕暮より風いかめしうふきしは中略なり

3ウ

ほたかふみちて浪のをと」あらましき事岩をも山ものころましきけしき也　雨のあしあたる所とをりぬへくはらめきおつわれはいかなるつみををかしてかくかなしきめをみるらんちゝはゝにもあひみすかなしきめこのかほをも見てしぬへき事となけく　君は御心をしづめてなばかりのあやまちにてかこのなぎさにいのちをはきはめんとつよおほしなせどいとさはかしければ色てのみ。くらをさゞげさせて住吉の神ちかきさかびをしづめまほりたまふまこと」にあとをたれ給神ならはたすけ給へと大願をたてさせ給ふ　又うみの中のりう王よろつの神たちに願をたて給ふにいよゝなりとゞろきておほしますに　つゞきたるらうに落かゝりてらうはやけぬうしろのかたなるおほい殿とおほしきやにうつしたてまつり

4オ

て　上下となくたちこみてなきどよむこゑいかつちにもおとらず　空はずみをすりたるやうにて日もくれぬ　かゝる御身のまだなきれいにしづみ給べきを思にをのゝ」のいのちをはさる物にてこの御身ひとつをすくひたてまつらんとどよみ

4ウ

てもろごゑに仏を念じたてまつる　帝王ていのふかき宮にやしなはれて色ゝのたのしみにほこり給しかど御いつくしみにおほやしまにあまねくしづめるともがらをこそうかべ給しかいまなにのむくひにてかこゝらよこさまなる浪風にはおほれ給はん天地ことほり給へつみなくしてつみにあたりつかさ位をうばはれいへをは」なれさかひをさりあけくれやすきそらなくなき給ふにかゝるめをさへ見いのちつきなんとしたまふはさきの世のむくひかこの世のおかしかと神ほとけあきらかにましまさはたしかにこのうれへをやすめ給へと住吉のみやしろにむきておほくの願をたてけり　やうゝ風なをり雨のあししめりてほしの光みゆおほくたてつる願のちからなるへし　この風いますこしやまさらましかはしほの」ほりてのこる所あるまじかりけり　神のたすけのおろかならすといふをさゞ給ふに心ほそしともいへはおろかななり

5ウ

源氏　うみにます神のたすけにかららずはしほのやをあひにさすらひなまし　海士ともなどのたかき人おほする所とてあつまりまいりつゞきゝもしり給はぬ事さへづりあへるもめつらしかなれとえをひもはらはす

一　月さしいてたり　しほのちかくみちきける跡もあらはにな

こりなをよせかへる浪あらきを「柴の戸をしあけてなかめた
まふひねもすにிரりもみつる神のさはぎにさこそいへいたふ
ごうし給て心にもあらざうちねふられたまふ かつしけなき

おまし所なればこゝより居給へるに故院すまの夢のつけ言也この世に

おはしましゝさまなからたゝせ給てなとかうあやしき所には
ものするぞとて御手をとりに引たて給ふ 住吉の神のみちひ
きの給ふにまかせてはやくこのうらをさり」ねとのたまふ
けんし

いとうれしくてかしこき御願にをくれたてまつりしのかかな
しき事のみ侍れはいまはこのなきさにやいのちをきはめ侍ら
ましと申給へは故院いとあるまじき事なりこれはたゝいさゝかな
る物のむくひ也われは位にありしときあやまつ事なかりしか
どをのつからおかしありければそのつみをほふるほといとま
なくてこの世をかへり見ざりしかといみしきうれへにしづむ

をみるにたへかたく「てうみにいりなきさにあがりいたうこ
うしにたれどかゝるつゐてにだいにそうすへき事あるによ
りなんいそぎのほりめるとてたちざり給ぬ あかざかなしく
て御ともにまいりなんとなきいりてうち見あげ給へれば人も
なし月のかほのみきらくとして夢の心ちもせず御けはひと
まれる心ちす ゆめにてもいますこし御いらへをきこえざり
ける事といふせきに又や見え給とことさらにねいり」給へど

御めもあはであかつき方に成にけり

すまの夢のつけ是也 源氏須磨にすみうくおほしめすおりか
らこの御夢ありければあかしよりの夢のつけの御むかへをも
もちぬ給し也 ゆめのなこりたのもしうおほさる

64

69

70

77

一 なぎさにちいさやかなる船よせて人二三にんこの旅の御や
とりをささてく なに人ぞととふにあかしのうちよりさぎの

播磨の守ししんほちとよむへしあかしのにうたうの事也ほちの御ねよそひてまられるなり

よしきよの事也 源氏をあかしへよびたてまつる御むかへの舟也
源少納言さふらひ給はゝ事の心とり申さんといふ とり申さん
ととる よしきよあかしのにうたうは」かのくにのとくいて

としころあひかたらひ侍をわたくしにいさゝかうらむる事あ
りて とはとし比入道のむすめをいひか ちかごろのせうそを
けられたるをもちぬ事也
たにかよはさぬに波のまきれにいかなる事かあらんとおぼめ
く おほめくはあ けんしこよひの御ゆめなともおもほしあは
せて舟に行てはやあへとのたまふ よしきよ使にたいめんし
たり

一 あかしよりの御むかへの人申やういぬるついたちの夜の夢
にあかしのにうたうすみ さまことなるものゝつげしらする
によしの神をみたる事也
事侍りしかどしんじかた」き事とおもひ侍りに又かさねてし
めす事侍り たしかにこのなみ風やまばふねをよそいまうけ
すまの事ち

てこのうちへよせよ十三日にあらたなるしるしみせんとかさ
ねてしめし侍り しろこしにも夢をしんじて国をたすくるた
ぐひ侍るをもちいさせ給はぬまでも夢にいましめし日をたが
へずこのよしを上げ申さんとて舟をいだし侍りしにあやしき
風ほそう吹てこのうらにつき侍る事まことに神のしるべたが

三月一日の

84

89

90

97

はぬ事となんざしとゞめ侍るもしこゝに「もしろしめす事や

94

侍らんかたしけなけれとこのよし申給へと云 よしきよしの
ひやかにこのよし申たり けんし見給し御ゆめなどをおほし
あはするにまことに神のたすけにもあらんをそむくものなら

ほんぶの事也

はこれよりまさりたるめをやみんうつゝの人の心だになをく
るしわれよりよはひまさりもしはくらあたかくなとあらん人
にはなびきしたがひてそのおもむきをとるへきものなりしり
そきてとかなしとこそむかしのさかしき人もいひをきけれ

97

くはかり「いみしきめのかきりはみつくしつさらのちの名
をつゝむともさかしき事あらし夢のうちにもちゝ御門の御を
しへにすみよしの神のみちびき給まゝにこのうらをさりねと
の給しかは又なに事をかほうたがはんとおほして御かへりの
たまふ しらぬせかいにていみしきめのかぎりみつれともみ
やこのかたよりとて事とひおこする人もなし たゞ行ふなき
空の月日の光ばかりをふる郷の友とながめ侍るを うれしき

あかしの事

107

つり舟となんかのうらにしづやかにかくるふ」べきくまあり
やとのたまふ 引哥浪にのみぬれつる物を吹風のたよりうれ
しき海士のつり舟と云哥の心也 かくろふへきとくまとはあ
かしに御すみかあるへきか也

一 御むかへの人くよろこひかしくまりて とまれかうまれ

ともあれか 夜のあけぬさきに御舟にたてまつれとてれいのし

たしきかぎりしてたてまつりぬ 御下の又の年の三 月十三日の朝也

れいの
かた時風い
ヒヒヒ

てきてとふやうにあかしくつき給ぬ たゞはいわたるほどは

すまとあかしのあいたちかき事をいへり
かた時のまといへどなをあやしきまでみゆる風の心也

巻はうつりぬれとこ
れまてはすまの事也

一 はまのさまげに心こと也 人ししくみゆるのみなん御心に
そむきける 入道のりやうじたる所くうみのおもてにもふ

イマスヘキ

かき岩がくれにもおりく所につけてけうをさかすへきなき
さのとまやおこなひをしてのちの世を思すますへき山水の

けんみつ也

つらにいかめしきみだうをたてゝ三まいおこなふこの世のた
くはへに秋のこのみをかりおさめのこりのよはひつむへきい

ねのくらまちともなと見所ありてしあつめたり 船より御車
にたてまつりうつすほと日やうく「さしあがりてほのかに

117

見たてまつるより老わすれよはひのふる心ちして住吉の神を
にうたうはかつくおがみたてまつる 月日の光を手にえた

てまつりたらん心ちしていとなみつかふまつるもことほりな
り 高しほにおちてむすめなどはこの比はをかべのやとにわ

たしてすませければこのはまのたちに心やすくおはしまさず
入道は物へたよりたるしもやにさふらふ さるはあけくれみ
たてまつらまほしうあかすおもひきこゆ はつかしけなる御

ありさま」なればさこそいひしか なたはらいたくてむすめ

の事すがくともきこえてぬをあかしのあまの事はく君にもいひあはせてな

けく 君は御心すこしのどめ給て京の御女の御返りきこえ給

ふ まいれりし御使はいまはいみしき道にいでたちてかゝる

うれへをみる事となげきしづみてあのすまにとまりたるをめ

あかしへ 紫

しよせて身にあまる物とも給てつかはす二条の院のあはれな

117

りしほと御返りはかきもやり給はずくらされたまふ返々
いみしきめのかきりを見はて」つる身なれはいまはとおもひ
たつ事侍れとかみみみてとの給しおも影のはなるよとき
なきをかくおほつかかなながらやとこゝろかなしきうれへをば
さしをきて

巨々等

12
才

源氏 はるかにも思やるかなしらさりしうらよりをちにうらづ
たひして 夢のうちなる心のみしてさめはてぬほどいかにひ
が事おほからんとかきみたりたまへるしもぞいと見まほし
きそはめなる 御前なる人くこよなき御心さしのほどよみ
たてまつる」

12
ウ

一 京よりもうちしきり御とふらひともしけし 卯月になれは
ころもかへの御しやうそく御木帳なとよりはしめいみしうき
よらにしてよろつにいとなみ仕をそゝろなる事かなとはおほ
されなからにうたうのあくまでおもひあがりたるありさまに
つみゆるして御らんす おとゞのつくりさまみやこのやんこ
となき所くにもおとらず 前さいの木だちえもいはぬいり
えの水なと絵にかゝんにも心のいたりすくならん絵しはか
きおぶまじうみゆ」 月比の御すまゐよりはこよなうあき
らかに入道のつとめおこないたるさまあはれにとしは六十は
かりにておこないさらばいたれとよしつきていにしへの物を
も見しりて物きたなからねはむかし物かたりなとせさせてき
こしめすもこよなく御なくさめなり

13
才

一 めのまへにみやらるゝはあはちし成けり あはとはるか
にとうちしゆし給ふ心は

引哥 あはちにてあはとはるかにみし月のちかきこよひは所か
らかもと云哥の心」

13
ウ

源氏 あはとみるあは路の嶋のあはれさへのこるくまなくすめ
る夜の月 ひさしくてふれ給はぬきんをふくろよりとりいて
ゝはかなくかきならし給へる御さまを御まへなる人くあは
れにかなしとみたまつる くわうれうといふ手あるかぎ
りひきすまし給へるにかのをかへの家へも松の風なみのをと
にひびきあひてきこえたるを 心はせあるわかき人は身にし
みておもふべかめり さらぬ物のねだにおりから所からこそ
まさるものなるを」はるくともものよとごほりなきうみつ
らなるに そこはかとなくしけれるかけともなまめかしくく
ひなのうちなきたるはたが門さしてとあはれに 引哥まだよ
ひにうちきてたくくひなかなたか門さしてあけぬなるらん
と云 きこゆ このもかものしはふる人さへそごろはしく
てはま風をひきありく 入道もえたへでくやうぼうゆみで
いそぎまいれり さらにすて侍りし世もたち婦思出られ侍り
後の世にねがふ所のさまもとをからぬ心ちし侍る」夜のさま
かなとなくくめできこゆ 我か御心ちにもそのおりかのお
り琴笛に付ても世にめてられ給し御ありさま人のうへもあは
れにおほえ給ふまゝかきならしたまへるしらべもすごうきこ
ゆ 楽の名広陵けいしく也 れいじんを夢にみる 廣陵さんを
しうと云心也

14
才

一 をかへ琵琶しやうの琴とりにやりて入道はひはのほうし
に成てめつらしき手一つ二つ引出たり しやうの御琴まいり

たれはずこしかきならし給へるもさま／＼めてたうきこゆ」 15オ

さい 伊勢のうみならねどきよなきにかひやひろはん

とこゑある人にうたはせてわれも時／＼ひやうしとりてこゑ

さいはら也

うちそへ給へるを琴引きしつゝ入道はめてきこゆ 御くだ物

まんかひやひろはん

よしあるさまにてまいり人／＼にもさけしいぞしてをのつか

ら物わすれしぬへき夜のさま也 ふけ行まゝに御ものかたり

のこりなくきこえてこのうらに住はしめし事のちの世をねが

ふ心さしなとかたりきこゆ をかへよりの琴ともをねもいと

よくいつるをなつかしうひきならしたる」うつりかに御心と

けんし

まりてこれは女のしどけなきさまにて引たるこそおかしけれ

となに心なくおほせらるゝに入道あいなく也 無愛 うちぞみて

(7)

あそはずよりなつかしきはいつこのか侍らんにかしゑんぎ

の御門也 入道か事 延喜

の御手よりひきつたへ侍りし事三代になんなり侍るをかうつ

たなき山ふしの身にてなに事もすてわすれ侍れどもゝせち

にいふせきおり／＼かきならし侍るをまねふものゝ侍るこそ

あかしのうへ 御心と

あやししくじねんにかのせん王の御手にかよひて侍れ」山おし

のひがみゝに松風をきゝわたり侍るにやいかてこれきこしめ

こゑふるう也 16オ

りしやうの琴は女の引うる物也 嵯峨の御門の御つたへにて

女五の宮ぞさる世の上すにものし給ふ すべてよの中にかひ

をしててにひくをかひなて也

なで心のやりはかりにのみあるをこゝにひきこゝめられたる

はけうある事かないかて。もなにのはかりか侍らんあき

人の中にてたにふることきゝはやす人もこそ侍れと申心は

ちやうあんしやうかのむすめあき人のつまとなりてしんやうの

江のほとりにてひきたりし事也 あかしのとはすがたりこよひ也

一 一

ふけ行まゝはま風すゝしうしづかなるにとし月このむすめ

をもてわつらふ事たかきさいわひあらせ給へと神仏にもねが

ふ事むまれし時よりとしに二たひ春と秋とすみよしへまうで

させてかぐらをまいらせ事十八年なるよし」なとはすかた

りにうれへきこゆ あはれにきこしめすふし／＼もあり 入道

たしけなけれと我が君かくおほえぬせかひにうつろひおはし

ます事としころおいぼうしか夜るひるの六時のつとめにも身

つからのちすのうへの露のねかひをはさしをきてたゝ此む

すめをみやこのたかき人にたてまつるほいかなへ給へといの

りきこえし神仏のあはれみおはしましてけんしをしはしのほ

と御心をもなやまし給にやとなんおもひ侍るなどすべてまね

ぶへくもなき事」ともうちなきつゝきこゆ 君もなみたくみて

きゝおほす あやしきつみにおほえずあたりてしらぬくにゝ

御 17オ

りの事なくあかしくらずに心もみなくづれおれにけりさら
はみちひき給へ心ほそきひとりねのなくさめにもとのたまふ
をかきりなくうれしと思へり」

入道 入道 ひとりねは君もしりぬやつれ／＼と思あかしのうらさひ

しさを うちわなゝきたれともよしなからず申なしたり 哥この
へ巻を明 石と也

源氏 たひ衣うらかなしさにあかしかね草の枕は夢もむすばず

とうちみたれ給さまいふよしなくみえたまふ 夏也

一 又の日をかべへ御文つかはす 中／＼かゝる物のくまにお

もひの外なる事はこもるべかめると心づかひし給てこまのく
み也

源氏 をちこちもしらぬ雲井になかめわひ」かすめしやどの木

すゑをそとふ 入道もまちきこゆとてかの家にきみたるほと
もしるければ御使まばゆきまでゑはしてなへてならぬ玉もか
づけたり むすめははつかしけなる御文のさまにさしいてん
手つきもいかにうる／＼しからんとて御返り申さねはいひわ

むすめの事

ひて入道そかく いながびて侍るたもにつゝみあまり侍る
にやと見侍るとて 引哥うれしさをなにつゝまんから衣た

もとゆたかにたてといはましを云哥の心也

入道 せんじかきとはおほせかきの事也
御返 なかむらんおなし雲井をなかむるは」おもひもおなし
思なるらん 又のあしたせんじ書は見しらぬ心ちしてとてこ
のたひはなよびたるうすやうにうつくしけに書給ふ

18 4

18 7

源氏 いふせくも心に物をなやむかなやよいかにととふ人も

なみ わかき人のめでざらんもあまりむもれいたからんめて
たしと見れどなずらひならぬ身のほとくちをしけれはれい

動

のとうなきをせめていはれてあさからすしめる紫のかみに
あかしの

上 おもふらん心のほとよやよいかにまたみぬ」人のき
ゝかなやまむ 手のさまかきたるさま都のやんことなき人に

おとるまじう上ずめきたり そのゝちはものあはれなる明ほ
の心すこき夕暮などに人もおなし心に見はやすへきおり／＼

をしはかりて書かはしてみ給ふににけなきらす思あがれるさ
まみではやまじと御心とまる 夏より御文はかよひけり

一 れいの秋はひとりねもまめやかに心ほそくおほしわひて入
道にもおり／＼かたらはせ給ければをかへのやとをたち居か

ゝやくはかりしつ」らひてしてしにもしら。すあま君のと
かくいふをもきゝいれず八月十二三日の月はなやかにさしい

てたるにたゝあたら夜のとほかり入道より申たる 心は引歌
あたら夜の月と花とおなしきはあはれしれらん人にみせは

やと云哥の心也 けんしすきのさまやとおほせど御なをした
てまつりかへて御車はよくつくれりになく作をきたれど所せしとて御馬に

てそいて給ふ やゝとをくいる所なりけり 道の程よものう
ら／＼みわし給ふにおもふどちまほしき入江の月影に

も」みやこの恋しき人／＼をおほししてゝやかてこま引過て
おもむきぬへくおほさる 引哥おもふどちいさみにゆかん玉

19 4

20 4

津嶋入江のさにはうつる月影と云哥の心也 道にて

源氏 秋の夜の月げのこまよ我こふる雲井をかけれ時のまもみ
んとひとりこちたまふ をかへの家のさまやうかはりてこ
れはうみつらよりもすみたるさまして三昧たうちかくてかね
のこ糸松風にひゞきあひて物かましう岩においたる松のねざ
しも心あるさまにて前さいに。むし^は「声をつくしたり こゝ
かしこ御らんす むすめすへたるかたことにみかきしつらひ
て月いるへさまきの戸口けしきことをしあけたり

引哥 まきの戸をやすらひにこそさゝざらめいかにあけける秋
の夜ならんと云哥の心也

そなたにやすらひとかくのたまふにも女はかうまでちかやか
にみたてまつる事くちをしくおもひてうちとけぬけしきこよ
なく人めきたり

源氏 むつことをかたりなくさむ人もかなうき世の夢もなかば
さむやと 御返^一

女 あけぬ夜にやかてまとへる心にはいつれを夢とわきてかた
らん ほんのかなるけはひ伊勢のみやす所にいとよくにたり
ものこしはかりはいかてかあらん うちにいり給にけり か
くあなかなりける契をおほすにもあさからすあはれなり
人のさまあてにそびえて心にくきけはひぞしたる 御心ざし
^{けたかし}
のちかまさりするなるへし つねはいとはしき夜のながさも
とく明ぬる心ちして人にしられしとおほせはこまやかにかた
らひをきていて給 御心のおにゝ^{人のおもはぬ事をおもふ也}「むらさきのもりきゝ給は
ん事をはゝはかり給ほとにものいひさがなき海士の子もやた

ちまじらんとつゝみたまふをおやたちは心をつくしたり む
らさきの御かたへこの人の人の事をかすめて御文にかきての
ほせ給へり せきへたよりてはいとゝおほつかなく恋しお

もひきこえ給ふとあるはずまの関の事也 ^{あかしの上の事けん}
源氏 しほくゝとまづそなかるゝかりそめのみるめは海士のす
まひなれとも 御返りな心なくらうたけにかきてしのひか
ねたる御夢^一かたりにつけても思あはせらるゝ事おほかるを
とあり

紫 うらなくもおもひけるかな契しを松より波はこえし物そと
おいらかなる物からたゝならずかすめたまへるをあはれに見
給てなこりひさしく忍の旅ねもし給はず^{おいらかとはおとなし}
くたゝありなる軀也

一 やよひついたちのみの日のはらへより十二日のくれまてい
かめしうふりあれてそのうちにすまあかしに夢のつけともあ
り やかてその夜みやこにも御門の御ゆめに故院おまへの
御^{しゆしゃく}はしのもとにたち給て御門をにらみきこえ給てけんしの

御事をたまはせけり ^{しゆしやく}このよし大后に申給へはつみにおち
て都をさりし人を三とせをたにすぐさではいかにめしかへさ
ん世のもどきもかろくしき事といさめきこえ給ほとに御門
おほしやすらふににらみ給しに見あはせ給しより御めにわつ
らひ給てたへかたくおほさる おほちみきの^{二条}大殿かくれ給ぬ
ことはりの御よはひとは申なからものさはかしき事おほし

大后も春よりなやませ^{二条大政大臣}「給ふ ^{かくれ給事也}としもかへりぬ
あかしの人は六月よりたゝならぬ心ちになやみけり 月日に

21ウ

22ウ

21ウ

22ウ

23ウ

23ウ

そへて御心ざしはまさるへしあかしの中宮は
らまれ給へり

一 御門御くすりの事わたらせ給ふと朱雀院なやませ給事なり
り せうきやうてんの御はらのみこいまた二歳にましませは今上

いとけなし春宮にこそ御くらみをゆつりきこえ給はめときた
めたまふには二さいのわかみや
はきん上の御事也 この源氏のしつみ給へる事いと
あたらし あめか下の御うしろみし給へき人をおほしめくら
して大后の御さいめを「はそむきてけんしをめししかへし申さ24オ

るゝ事七月廿日宣旨下たり つるの事とは思なからつねなき
世に付ても心ほそくおほしけるにはかなれはうれしきにそ
へても又このうらをたちはなれん事をあはれにみすてかたく
おほされけり

一 入道はうちきくよりもむねふたがりて覚ゆ あかしのうへ
しやうしみは

ましておもひしつみたり この比はあやにくに夜がれなくか
たらひ給しを中々人の心つくしにとさゝめく あさつては
かりにみや「こへたち給はんとての夜はいたふもふかさでわ24ウ

たり給へり あかしのうへ
またよくもみわたまはぬかたちよはくしくけ

たかきさましていとみすてかたくおほさるれば京へむかへ
とらん事をぞたのめ給ふ されど女はわかれんほとこのわりな
きをおもひむせたるもことほり也 しほやくけふりかすかに
たなひきてとりあつめたる夕のけしきなり

源氏 このたひはたちわかるゝとももしほやくけふりはおなし
かたになひかん 御返し

女 かきつめて海士のたくものおもひにも「いまはかひなきう25オ
らみたにせし あはれにうちなきてことすくななる物からさ
るへきふしの御いらへあさからすきこゆ

一 かのものゝ音をかたみにもしのふはかりの一事をたにと
せちにのたまひてけんしのもたせられし京よりのきんをとり
よせて心ことなるしらへをひき給てそゝのかしたまふ事すゝむ
けんし

入道はしやうの琴をとりて身つからおはします所へさしいれ
たり あかしの上なみたさへとゞめんかたなき心ちしてかき
あはせたるほといと「上すめきたり あくまで心にくくひき25ウ

すましてねたきねなり きんの琴をは又かきあはするまでの
かたみにとてとゞめ給ふをめたまふ又あかしのほときもちて上
明石 なをさりにたのめをくなる一ことをつきせぬねにやか
の上

源氏 あふまてのかたみにちきる中のをのしらへはことには
らさらなん この音たかはぬほとにかならずあひみんとちき
らせ給ふ かきりなき御かたちありさまにて心ふかうちな
みたぐみつゝななき契をたのめ給ふさまかはかりをさいは26オ

ひにしてもなとかやまざらんとみゆ たちたまふあかつきは
とくいて給て御むかへの人ゝなときはかしけれと人まにつ
かはす

源氏 うちすてゝたつもかなしきうら波のなこりいかにとおも
ひやるかな 御返し

女 としへつるとまやもあれてうき浪のかへるかたにや身をた
ぐへまし とうちおもひけるまゝ申たるを見たまふにしのひ

給へとほろ／＼とこほれぬ 人／＼おろかにはおほされぬ」
なめりれいの御くせあなにくとさゝめきあへり

一 入道たひの御しやうそくかみしもの人／＼のれうまていつ
のまにか」しあへけんとみゆ けふたてまつるへきかりの御
ぞに

あかし 上の よる波にたちかさねたるたひ衣しほとけじとや人の

いとほん とあるを御らんし付てわざと心さしある御しやう
そくをとてけふのをたてまつりてもとより御身になれたるを
はつかはず けにいまひとへしのはれぬへき事をそふるかた
み也」

御返 かゆる也

源氏 かたみにとかふべかりけるあふ事の日数へたてん中の
衣を 入道さかいてまいりておほしいてさせ給へと御けし
き給てかひをつくるもわかき人はわらひぬへし

入道 世をうみにこゝらしほしむ身となりてなをこのきしをえ
こそはなれね けんし御かほ所／＼うちあかみていま見なを
し給てんたゝこのなきさこそわすれかたかりけれとて

源氏 みやこいてし春のわかれとおとらめや年ふるうらをわか

れぬる秋 とてをしのごひ給へる」御袖のほひにいとゝ入
道はほれまどゐて月夜にぎやうだうするとてやり水にたうれ

入でけり よしある岩のかたそばにこしをつきそこなひやみ
ふしたるそ物まきれける

一 八月はしめにありしをたちたまふ なにはにて御はらへあ
り 住よしへは御つかひにてやかてまいり給へきよし申させ

26ウ

27オ

給へり ことなる事なくていそぎ都にいり給ふ 二条の院に

おはしつきて御ともの人也都の人も行あひ悦なきもゆゝしき
またちさはきたり 紫 たいのうへ」かひなき物におほしすて

つるいのちうれしくおほすらんかし けんしいまはかくてみ
るへきぞと御心おちいるに付ては又かのうらに思しつみたり
し人をおほしやる

一 ほとなくもとの御位にあらたまりかすの外の権大納言にな

り給ぬ めしありてうちへまいり給ふ 御門の御めも昨日今
日おこたり給へる 引つくるひて出おほします 八月十五

夜なりけり のとやかにむかしいまの御ものかたりありてむ
かしきゝしものゝ音をさかでほとへにけり」との給へはうち

かしこまり。て

源氏 わたづうみにしつみうらふれひるの子があしたゝさりし

としもへにけり 心はつかしくおほしめして御返し

御門 宮ばしらめくりあひける時しあれはわかれし春にうらみ

のこすな

一 あかしへは帰る波につけて御文こまやかなり 引そばみて

そかきたまひける

源氏 なけきつゝあかしのうらのあさ霧にたつやと人をおもひ

やるかな おもほしいてたる」さまあさからぬをむらさきの
うへはわれは又なくかなしいみじとこそおもひしつみしかか
りそめにも心をわけ給けんよとおほして身をおもはずと
ほのめかし給心は 引哥わすらるゝ身をばおもはずちかひて
し人のいのちのおしくもあるかなと云哥の心也

28オ

28ウ

一 かのつくしよりのほりし大武のむすめ五節の君は人しれぬ
物おもひにてまくなぎつくらせてさしをかせたり

五節 すまのうらに心をよせしふな人のや」かてくたせる袖を
みせはや 御返 口伝 29ウ

源氏 かへりてはかことやせましよせたりしなこりの袖のひが
たかりしを あかずおほされし人なればおとろかさされていと

ふほと花ちるさとなへとも御文はかりにて中くうらめしげ
なりとぞ
以上卅首

十一 躬 尽

一 さやかにみえ給し夢のうち故院の御事をおほしわすれず

いかて御つみかろみ給へきわざ」せんといかめしうみ八かう
おこなはせ給 世の人なひきてつかふまつる事むかしのこと
し 御のほりのとしの神無月におこなはる すまにてにての夢の
あるよしの給し事をさ 御八講 30オ
やかにみえ給しとあり

一 としかへりぬ きさらきに春宮御かうぶりの事あり 御門 けんふく也

世の中の事ゆつきこえさせ給へき御心あり 十一におはし
ませどほどおほきにおとなしくまします 同廿日余ひに
朱雀の御位をとうくうへゆつり申給ふ 源氏の大納言」内大 冷泉
臣にあかり給ふ けんしは事しけしよくはむ。かしてて天 つ
下のせつしやうをはあふひの御ちゝ右大臣を又よひ出して太 30ウ

政大臣になして世のまつり事したまふ 御とし六十三 かれ

たる木の春にあへるかことし 御子中納言になり給 こしうとの事

一 三月十六日あかしの中宮あかして生給事也 けんしの御 あかしへ人つかはし給ふにとく帰まいりて御よるこひつげきこゆとは

むすめなればかならずきさきにたつへき人なるをあやしきせ あかして(にてミセケチ)のひめ君あかしてむまるゝ也

かかしてむまれ給へる事くちをしようかたしけなしとおほさ 宿曜

らひにおはしますへしなかのをとりは太政大臣にてくらゐを れせい

事あらはに人のしる事ならねど御門にてましますへしわか あふいの御はら

君の御事もさるへき御事なりさるによりてはいまむまれ給へ あふいの御はら

るひめ君かならず国の母となるへき人也かゝる契にてあかし 御さんの事

の入道もひがしくたかきねがひをしけるとおほししるに に

なごて京にむかへてかゝる事をもせさ」せざりけんとおほす に

いなか。ははかしくしき人もあらじとおほしやりて故院にさ 宣旨

ふらひしせんじの君といひし女房のむすめなりしがはかなき を

さまにて人の子うみたりけるをたよりありてけんしきこしめ を

していまの姫君の御めのとにあかしへ下つかはす 人のほと を

いとをししくおほしめしてけんし身つからたちより給て身 を

からのあやしきすまひにむすほれしをおもひてあかしにす を

まるせよとのたまふ わかやかなる人なればいれいのはふれ を

事のためてとり」かへしつへき心ちこそすれとて を

源氏 かねてよりへたてぬ中とならねどわかればおしき物に を

そありける したひやせましとの給へはうちわらひて

あかしの うちつけのわかれをおしむかごとにておもはぬかた

にしたひやはせぬ みちのほとさるへき人へそへて人にも
らすなと口かためていたしたて給ふ のちにこの姫君をみや
こにてむまれたるやうにもてなさんとてあかし。の事はかく
し給ふ也

一 あかしの御かたへの御文にはおろかにもてなすまじ」き事
と返々いましめ給へりもまいる

源氏 いつしかや袖うちかけんおとめこが世をへてなづる岩の
おいさき あかしの入道まちよろこひかたしけなき御心さし
のいたらぬくまなくこまやかなるをそなたにむきておがみつ
ゝいとゝおさなき御事もいたはしくおそろしくおほゆ 御はか
はかせの事也女
もたちを持給ふ

一 こもちの君は たれにても子をうみ 日ごろの物をのみおもひ
しづみていきたらんともおもはざりしにこの御心むけのこま
やかにありかたきをみてぞ」すこしかしらももたげらるゝ
めのとあやしきみちにいでたちてゆめの心ちせしをおんな
君の心はへかたちのおもふやうなるをあけ暮のかたらひ人に
てよろづおもひなくさめたり

一 ちこの御ありさまおろかならんや けにかしこき御心にか
うまでかしつきぎこえんとおほしたるもことほりとみたてま
つればらうたくおほえてあつかひきこゆ みやこへの御返し

ひめきみの事
けんし
33オ

明石上 ひとりしてなづるは袖のほとなきにおもふはかりの影

をしぞまつ けんしあやしき」まで御心にかよりゆかしく御
心もあくかるゝやうにおほさるゝとほんにあり

一 むらさきのうへのきゝあはせ給ふ事もやとてこのよしきた
りきこえ給ふ ざもおはせかしくおもふあたりには心もとな
くてねちけたる事にもあるかなおんなにてさへあるをよひ
にやりてみせたてまらんにくみ給ふなよとの給へはむらさ
き御かほうちあかめて物にくみなどとはいつならふへき事にか
つねにかゝる事のためひつくる心のほとこそわれなからうと
ましけれ」とのたまふ 源氏うちわらひてそよたがならはし
にかつなしにくゝぞみえ給や人もおもはぬ事物ゑんじなどし
たまふよとてあかしの上のおかしげなりしも所からはめつら
しかりしなり琴の音のなまめいたりし事あはれなりしゆふへ
くけふりよみし事
おなし心ならぬ事也

紫 おもふどちなびくかたにはあらずともわれぞけふりにさき
たちなまし との給」けんしなにかあな心うとて
御返 たれにより世をうみ山と行めくりたえぬ涙にうきしづ
む身そ

一 五月五日ぞいかにあたるらん人しれすかそへ給て
のまいるぞめといふ事百日をはも」か あかしへ人くたしつかは
五十日にてまいるぞむるをいかと也

ひめ君生たる事
子のなき事
34オ

34ウ

す その日たかえすいきつけとの給へは五日にまいりたり
源氏 うみ松や時ぞともなきかけにゐてなにあやめいかに
わくらん 入道れいの悦なきしてかゝる時はいけるかひつゝ
りいてたりとみゆ 御返りにおもふ事すこしつゝけて「数な
明石の上 らでみしまがくれになくたつを今日もいかにとふ人

35オ

そなき たまさかの御をとつれにかけ侍るいのちのほともは
かなくなんけにうしろやすく見をくわさもかなときこえたる
御文をけんしみ給てあはれとながやかにひとりごち給をむら
さきしりぬに見をこせてうらよりをちにこく舟のとしのひや
かにうち誦し給ふ 引哥みくまのうらよりをちにこく舟の
われをはよそにへたてけるかなと云哥の心也 けんし所のさ
まなと思ひいて「らるゝおりゝのひとりことをよくもきゝ
すくし給はぬ物かなこはたゝはかりのあはれそやとてふみの
うはづゝみはかりをみせたてまつり給ふ あかしの手などの
やんことなき人くるしげにみゆるをかゝればなめりと御覽す
一 かやうにむらさきの御心とり給ふほとに花ちる里などはむ
げにかればはて給ぬるこそいとをしけれ 五月雨の比おほした
ちてわたり給へり よそなからもたゝこのとの御はくゝみ
にてすくし給所なればうちそむきくせゝしくなしと心や
すし くないなのいとちかくなくに」
花散里 くひなたにおとろかさすはいかにしてあれたるやとに
月をいれましとほのかにのたまへるもとりゝにすてがたく
かかこそ。身もくるしけれとおほす

36オ

源氏 をしなへてたゞく水鶏におとろかはうはの空なる月もこ

そいれ うたかいの心也
うしろめたくとはなをことにけんしのたまへどさや
うにかろゝしき女にはおほしまさす 年比のほとをおなし
さまにて待すくし給へるをもおろかならすおもひきこえ給へ
し 直 なをごととは詞こと葉にこそおほせらるれ也 是は
げずしき」こと葉也 さがりめ人をはなほ人と云也 なをこ
と直人同
すまへくたり給しとき花ちるさにてけんししはしくもらん
空ななかめそとの給し事をもこよひ女きみひいたし給へり
うき身からの物なげかしきはいつれもおなし事にこそとは
いまけんしのたまきかにおはするも
すまのあひたと同事とうらみ給也

36ウ

一 この秋源氏住吉へまうてたまふ すまにてたてをき給し御
願はたし給へきためなり 御とものかんたちめてん上人はみ
なあを色の。ゑびぞめのしたがさね也 ゑびぞめと云に二説あり
なをしに
日本海老のいりゑびの色にたるゆへ「名付たるとも又わらはへのす
ゑびかつらと云物の実にて物をそめつればはすわう色のこき躰也
これをゑびぞめと云とも あをにびあを色にたり すすく
てすみぞめのうづすきにたり すすくにびうすみににたる也
一 たゝはしきかんだからをもちつゝげ楽にんとをつらしやう
そくかたちをとゝのへて御とも也
かくらのにん数也
一 かゝるおりにしもあかしのうへまうであひたり たゝなら
ぬほととしに二度のかぐらのまうてをのべたりしかはそのか
しこまりとりそへて舟にてなりけり きしにさしつくるほと

37オ

みれは人のけしきなきさにみちていかめしうのゝしるた
か「まうで給ふぞ」とふめれはうちのおとゞ 内大臣になり給
と へはうちの給 37

と の願はたしにまうで給へるをしらぬ人もありけりとほか

なきほとなるげすも心ちよけにうちわらふ けんし けにあさましく

月日こそおほかれかかる御いそぎのけふあすをたにしらてた

ちいてつらんとおもふにいとくちをし さすかにかげはなれ

たてまつらぬ契にてまいりあひなからなにもしられたてま

つるましき身のほとよとかなしくてそゝろにしほたれぬ 御

くるまをはるかにみやるも中々心やまし 恋しき「御影を

もえみず御すたれおろされたり かはらの大臣のれいをまな

ひて大やけよりわらはすいしんの給へり ちこ隨身 十人おな

しやうにしやうそくたけだちをとゝのへてむらさきのすそこ

のもとゆひなまめかしうみなみづら也 びんづらゆいたる事

一 大殿はらのわか君ことしよりうち春宮のわらはてんしやう

し給をくそくしたま給へり (マ) その御ともの人はむまもくらも

ちいさくへちにしやうぞききわけていかめしうかしづきたて

ゝ雲井はるかにみゆるにもちご君のかすならぬさまにて「か

のうらに給事をおもふにかなしくていよいよみやしろうのか

たを舟の門よりおかみたてまつる 津のかみ也 御もてなし也

しれいの大官などの御まいりよりはよそをししく仕けんかし

あかしの舟はなにはへこぎわたる いさゝかなる事は神だ

にめをみいれ給へきにもあらねはけふはなにかにてはらへを

たにせんと也 源氏はゆめにもしり給はす夜もすから神のよ

ろこひ給へき事をつくしてあそひあかし給ふ これみつやう

の人は神の御めくみをめてたくおもへはけんしのあから」さ

まにたち出給へるところにさふらひて申たり

惟光 住吉の松は物こそうれしけれ神代の事をかけておもへは

けにとおほして

源氏 あらかりし波のひまにも住吉の神をはかけてわすれやは

せし しるしありとのたまふもめてたし

一 あかしの舟のこの御いきをるにをさされてこぎ過ぬる事をこ

れみつ申たり けんししらざりける事をよとおほせられてい

さゝかのせうそくをもして心をもなくさめはやと中々にお

もふらんかしとおほさる けんし みやしるたち給て御心に「はあか

しの事のみかゝりたり なにはの御はらへよそをしく申たり

ほり江のわたりを御らんして御心にもあらすいまはたおな

しなにはなると口すさみ給ふ心は 引哥わひぬれは今はたおな

これみつ御車のもとちかくてうけたまはりやしけんかゝる御

ようもやとふところまうけたり よういし(一字補入)たる也 付合心へ給へし

源氏 身をつくしこふるしにこゝまてもめくりあひけるえ

にはふかしなりこの哥ゆへ巻を名付たり 惟みつに給へはなに

はにおはするあかしの所しりたるしも人してつかはしたり
あかし
女はこまなへてうち過給ぬるにも心のみさはきつるに露はと

なれどあはれにかたしけなくてうちなぎけり 御返

明上の 数ならでなにはの事もかひなきになどみをつくしおも

ひそめけん とあり たみの、島にても御はらへあり なたはとた

うで人はみ みのはすみよしのまつしやにてましませはま

そぎあり」人めいかめしければこの御返しをはたみの、嶋の

みそぎのはらへの物に取ぐしてけんしへはまいらせたりし也

一 すみよしのわたりを見給にも源氏あかしのうらの事おほし

いづ 夕しほみちてあしべのたづも声おしまぬほとのははれ

さなれは人めもつゝみあへすあかしの上にあひ見まほしくお

ほしてひとりごちたまふ

源氏 露けさのむかしににたるたひ衣たみの、嶋のなにはかく

れず」
ゆらくん

一 あそひともまいりつどあてをのが心をやりてぎれよしめく

をけんしはうとましくおほしけり いまの江口の長者の

一 いまやみやこにおはしつくらんとおもふほともへずあかし

へは御文ありけり いとたのもしくかずまへ給てみやこへむ

かへん事をたまふ

一 摂政太政大臣は老のひがみそひてはか／＼しき事あらじと

天か下の事うけびぎ申給はざりしかと人の御門にも世の中し

づまりがたき時はふかき山に跡をたえたる人もしらがみを」

はちずいでつかうるをこそまことのひじりにはしたれとさ

たむ 商山 四皓 しゃうざんのしらが事引たり

一 御まこのひめきみ十二になり給を入たい也 これはこしう

との中納言の四の君ばらの御むすめ也 とうきてんときこゆ大

おはすれはそのこうきてんに この御めいの姫君すみ給けり

一 しゆしやくるんはおり居給て中／＼花やかにめてたくてお

はします おほろ月よのないしのかみもるんにそひ申給へり

けんしおりふしにはれいのきこえうごかし給へど女うき名に

こり給て」あひしらひ給はず

一 かの伊勢のさい宮この巻に齋宮おりさせ給にしかはみやす

所もぐしてみやこにのほり給てもとのことく六条にすみ給ふ

けんしよりとりもち給ふ事むかしのことし けちかき御契を

はかたみにおほしたえたり にはかにわつらひ給て御息所は

あまになり給 けんしいとあへなしとおほしなきてわたり

給へはさい宮の御事をゆいこんし給へり 又みゆ。る人なき

御さまなれはなさげの道をはなれておほしうしろみ給へと

ゆいこんし給ふ けんしもたがへきこえじと心やすく申給へと

てそのうち七八日ありてみやす所はかくれ給へり 御あとの

事けんしよりとりもち給へは人かずおほく時の人の御あとの

やうにぞありける ますおろしこめてけんしは御しやうじん

にておこない給 雪みぞれかきたれてふる日齋宮のひめみや

へ御文ありむすめのことし

源氏 ぶりみたれひまなき空をなき人のあまがけるらん宿それか
なしきよふをあまがけると也 御返

齋宮 きえがてにふるぞかなしきかきくらし「我身かそれともお
もほえぬ世に つましげなる御かきさまいとよし 43才

以上十七首

十一の并関屋せきやよもきふとも

一 いよのすけといひしはひたちのかみになりてくたり
しぞかし 故院の御時の人なり けんし中川の御かたかへのいへ
あるし紀伊の守はこのいよのかみがちやくし也 はゞき
木ともうつせみともいひて源氏わすれぬ物におほしめしたりし女
はこのいよのかみがいまの女房なればひたちへぐしてくたりてこ
の巻に引つ
れてのほる

かのはゞきもいさなはれてにしかはけんしの須磨の御たび
居をもよそなからうけ給て人しれす女は心つくしなりけれど
つくばねの山を吹こす風もうきたる心ちしてすまへ御せう
そこ申へきたよりもなくて御たびもかされる事もなかりしか
はけんし都に帰給て又のとしの秋ぞひたちよりはのほりける
あふさか也 けんし

関入日しもこの殿いし山へ御願はたしにまいらせ給にせき
山にて行あひ申たり きのかみといひし中川の御家あるじは
この比はかうちの守なり 二君とて御ふみ使せし童もかうふ
りなとはけんしの御殿人にてえたりしがすまへの御ともをは
のがれてはゞき木にぐしてひたちへ「下ていまのほるときさ
へもんのすけとそいひける 京よりひたちのぼりのちかむか
へにあふさかの関のほとりまできたる人」この大殿かくい
けんし

44才

43才

し山へまうで給ふとつげたり 道のほときはかしからんもの
ぞとてあかつきよりいてたちけれど女がちに車ともゆるきく
るに日たけぬ この人「はうちいでのほまぐるほと殿はあ
はた山こえ給ぬとて御さきの人「みちもさりあへぬまでき
こえぬれば関山におり居てすぐしたてまつる 御ともの人
「のいてたち心「さま」にてぬい物」くよりぞめなと
色「のたひしやうそくともせき山よりざとくづれ出たるけ
しきはいみしき見物にてぞありける ひたちの車かたへはお
くらかし少「を」はさきだて又杉のものと居かくれなとして
とをしたてまつる 車十はかり袖口色あひひなかびずしてみ
ゆ かずもなき御せんともみなめとゝめたり 御車はすたれ
おろし給へり むかしの二君まいれるをめしよせてけふの関
むかへはえおほしすてじなとのたまふ うつせみも人しれす
いにしへのわすられね」は心の中に思つゝけけり

45才

空蟬 行来 ゆくとくとせきとめがたき泪をやたえぬし水と人はみる
らんと心の中なればえしり給はじかしとおもふもかひなし
又の日石山よりいで給 御むかへにゑもんの佐まいりたるを
めして女のかたへ御せうそこあり いまはおほしめしもわす
るへき事を心ながくもおほしますすかなとおもひるなり 御文

には昨日は契しられしをさはおほししりけるやせせきもりの
さもうらやましかりしかなとあり 44才

源氏 わくらはにゆきあふみちをたのみしも「なをかひなしや
しほならぬうみ 女は年月のつもりもうあしけけれどめつ
らしきにやしのはれさりけん御返り申たり 45才

空蟬 あふさかの関やいかなるせきなればしげきなけきの中を
わくらん

一 かくしつゝこの伊よ介おいのつもりにや心ちくるしくわつ

らひてうせなんとするに この北うつせみのかたのためにのこしをく

たましるもがな子どもの心もしらぬにおもひて たゞあり

しまゝこのおんな君のまゝになとゆいこんしてつるに「うせ

にけり 女はこの人にさへわかれていかさまになりゆくへき

となけく しはしこそ子どももさのたまひし物となさけつ

くれどなをうくつらき事おほかり とあるもかゝるも身ひと

つのうきにてなけきあかしくらす かうちのかみといふは

むかしの つかしよりこのまゝはゝのかたちをあたらし物に

おもひければいつしかついでせうしよりてあさましき心はべの

見えければ 女心うしとおもひて人にかくして厄になりけり

あまになりてのちけんしをたのみ申てまいりて二条のひんかしの

院のあまたの数に入てつほね」すみにおこなふよし玉かつらの巻

にみえ たり

以上三首

同并蓬生よもぎふの君と申もす
ふつむはなの御事也

けんし もしほたれつゝわび給しころおいみやこにもおほしなけく

人々おほかりしかど 御身のより所あるはむらさきぎの御

かたなともひとかたの御おもひこそかなしかりしか くらゐ

をさり給しかりの御よそいをも竹の子の世のうきふしをも時

々々に付てあつかひきこえ給ふになくさめ給けん 中々々に

そのかずと人にもしられずたちわかれ給し御ありさまをもよ
その「事にきゝなし給ふ人のしたに心くたき給ふぞおほかり
ける

一 ひたちのみやのひめ君はちの宮のおはしまさで後たつき

なき御ありさまなりしにおもひのほかにはとけ神のあらはれ

よひ給し事 給ふやうなりし御事いできて世にはかゝるよすかもいてき給

物なりけりとめてたくみたてまつりしを 大かたの事とはい

ひなから又たのむかたなき御身はかなしきわざなりけり し

はしはなくもそのなこりにすぐし給しをすまに三とせ又

みやこにかへりても一とせはおほし」いでざりければもとよ

りあれたりしみやのうちいとゝきつねのすみかとなりてけう

とくさひしき木だちにくろうの声をあさ夕にみゝならし給

ふ 人げにこそさやうの物も影かくしけれこたまなといふけ

しからぬものともやう々かたちをあらはし物わひしき事か

ずしらす 一とせ野分あらかりしとしもやともものわつかな

るいたぶきなりしも吹ちらしてほねのみわつかにのこりたり

よ。きは軒をあらそひておいのほりむくらはにしひんかしの

門をとち」かためたのもしげなれどづれがちなるめぐり

のかきをむまうしのふみならしたる道にて春夏なればはなち

かふあげまきの心さへぞめさましきや ねなきかちにてすく

し給ふ御ありさまはたゝ山人のあかきこのみ一つをかほには

なたぬとみえたたまふ 冬に成行まゝにいとゝかきつかんかた

なくあはれなる御ありさま也 あさ日夕日をふせくよもきむ
くらの影にとぢられて外にはきゆるまもある雪もこしのしら
山おもひやらるゝ雪のうちたちち」とまるしも人たになし
あさ夕のけふりたえてあさましきにまれにとふ人もなし

48 ヲ

一 しゅうの君といひし女はうこそ御めのとこにてたちざりぬ
人なりしを かよひ参りし齋院なともうせ給てこのおんな君
の御をばにたさいの大武の北のかたになりたる人あり 心も
なをくしき御をばにてありけるといふはしなさがりたる心
也 その所へこの侍従かふほとにその大にのにおいにぐした
り みな引ぐしてつくしへくたればこの侍従をもつて行
をば
北のかた「ひめ君をもさそひ。てまつりてすゑの世なればわ
かむすめどものつかひ人にしなさんとおもへり されともお
んな君はうごきなき御心也 けんしのあはれにちきり給しを
わか身のうくてこそわすられたてまつりたれかせのつてにも
わかかかたつきなきありさまをきゝ付給はゝきりとともたつね
給てんとふかくたのみ給へは 御いへも物ごのみするものゝ
はなちたまはれとあんないすれともかゝるすまゐなれどおや
の御影とまりぬる心ちすれはこそなつかしけれい」ける世に
さるいみしき事やあるへきとてきこしめしも入ず 又御でう
どどものふりにたれどもろこし物なとにてのこりたればなま
ものゝゆへしらんとおもへるいなか人などはその人かの人
の御ゆくゑとたつねきゝてかひとらんと申をおんなはらはいか
ゝはせんそこそはつねの事なれととりまきらかしてもけふあ

それこそは也

49 ヲ

49 オ

すのみくるしきをつくらはんとするをいみしくなき給てみ
よとてこそしをかせ給けるをなどてか人の家のかざりとはな
さんとせいし給ふ かりそ「めの事もをとれきこゆる人は
なきまゝにいはんかたなき御ありさまなり 御をばの北のか
たにはかに来て門あけさするより人わろくさひしき事かきり
なし ひたりみきりのとびらもたうれまろびたり いづれか
此やとりをふみわけたる跡もあるや三の道とたどる

くてん

一 この北のかたは女君をさそひたためよき御しやうそく
なとでうしてきたり されとつくくとなきてうごきなき御
ありさまなれば 北のかたあな事くしやけんしもよにおほ
しいてゝたつね「給はじほとけひじりもつみかろきをこそみ
ちびぎよくし給へかゝるやぶ原におはする人をはよもなんと
かつはいひうとめてさらは侍従の君をたといふ 侍従も思
ひたちてとむむへきもなければなき給より外の事なし とし
へたるしるしみせ給へき身なれころももしほたれたればかた
みにそへ給へき物なくて 我か御ぐしのおちたりけるをとり
あつめてかづらにしたるが九しやくはかりなるをこるはしき
はこに入て又むかしのくゑかうのつほ一つぐし」て給ふと

薰衣香

51 オ

蓬生の 君 たゆましきすちをたのみし玉かつらおもひのほかにか

けはなれぬる　みすて給ふもことはりなれはたれに見ゆつり
てかとうらめしうなんとていみしくなき給へは　侍従もなく
くく年比のしのひがたさをすくしきていまさらにいざなはる
ゝ事とて

侍従　玉かつらたえてもやまじゆく道のたむけの神もかけてち
かはん　かへりみかちにて引いづればおんな君はわびつゝも
行はなれざりしものうちすてたるを心ほそくて夜るもち
りがましき御帳のうちにかたはらさひしくひとり御殿ごもる
ぬす人なといふひたふる心ある物もこの宮をはふようの物に
思ひすてゝよりこざりければ　木帳もすゝけたれどいにしへ
よりのたちどかはらでなかもおはします　おんなどちの中に
もふみかよはしにてもし給はさりけり　この玉かつら十七の玉か
くしへ下ゆく道のたむけの神と云　又まことのかづら也　十七の
はこと葉にすぢよせんとの玉かつら也　又つくしへのほりあり
ふたつをよくくゝあん
しふせて付合あるへし

一　御おとうとにせんじの君とてだいごのほうしにてましま
すも世になきふるめき人にしてしきよもきをもかきはらはん
物ともおほさず　さるほとにけんしみやこに帰給とてひゞき
のゝしる　たびしかはらまでもわれさきに心さしをみてま
つらんとさはきたり　かやうなれ共おもひいで給へるけしき
なくて月日かさなれはいまはかきりなりけり　さりとともえ
いつる春にあひ給はんとねんじつるもかひなき世なり
引哥　いはそゝくたるひのうへの早蕨のもえいつる春にあひに

けるかなと云心

このせんじの君けんしのおこない給し八講にはおこない
にしみてたうとき人をめしければ是もまいり給へり　かへさ
に御いもうとのよもきふの御かたへたちより給てけんしの御
ありさま御八講のたうとかりしいかなる仏菩薩のへんげの身
にてかおはしますらん五のにぎりふかき世になどてむまれ給
けんとはかりの給て帰給けり　かひなきの世物かたりをたに
し給はず　おんな君さてもつてにきくは心うのぶつぼさつや
とつらく寛給けり　としも返ぬ

一　卯月はかりに源氏花ちる里をおもひいてきこえ給てたい
のうへに御いとまきこえ給て夕月夜おかしきほとにおはしま
す　道のほとよるつの事おほしつゝくるにかたもなくあれた
る所の木たち物ふりて森のやうなるをすぎ給ふ　みし心ちす
るいへぬかなとおほしてみいれ給ふ　大なる松に藤さきかゝ
りて月影にうちなひきたるかほりたちはなにはかはりておか
しきはかのよもきふの御すみかかなりけり　あはれにて御車を
しとゝめさせ給てこれみつにこゝはこひたちの宮ぞなしか侍
ると申す　こゝにありし人のまだやなかむらんとふらふへ
きをわさともせんも事くしきを入てせうそこせよよくた
つてをうち出よ人たがへしてはおこならんとたまふ　こ
れみついでめぐるく人やあるとおもへと人影もなし　さ
ればこそ行きにみるにすむ人のけしきもみえぬ物をとおも
ひて帰り参るにかうし二まはかりあげたるすたれうごくけし
きあり　わつかに人影を見つけたるはおろしうさへおもふう

ちにも かやうの人をひさしく見ぬ比なりけるに」しなやか

54オ

なるこゑして物申さんといふ かりきぬすかたをもしきつね
のへんげにやとおおもひける これみつ侍従の君にたいめん
給はらんといへはこゑをきゝしりてしもうがをばの少将の君
といふおい人こたへたり それは外になん侍従にもおとらぬ
ふる人こそ侍れといふ これみついにしへにかはらぬ御あり
さまならば源氏もたつねきこえまほしき御心也たしかにうけ
たまはらんと申せば おい人うちわらひてかはり給へき御あ
りさまならはいまゝてかゝる御すまゐを」うつろひ給はでは
侍りなんやよの中にたくひなき御ありさまをこそみたてまつ
りなげき侍れとしはふきをさきにたてゝやゝくづしいでゝと
はずかたりもしつへければまつさらはそのよし申さんとてま
いりぬ 源氏いかにぞいにしへの跡ともみえぬよもきのしけ
りかなとのたまふすこしうちらはせて。申

54ウ

一 よもぎふの宮にはその日ひるねし給へるに故ひたちのみや
のゆめにみえ給しかはさめていとかなしくあはれにてもりぬ
れたるはしつかた」をしのごはせおまし引つくろひなとれい
ならずし給て

55オ

女君 なき人をこふるたもとのひまなきにあれたるやどのしつ
くさへそふもいと物くるしきほどにぞおほしける たいめん
し給はんはつかしきまておとろへ給へとおもひしもしるく
まちつけ給へれはうれしくもあはれにもおほしてすゝけたる
木帳引よせて大武の北のかたのたてまつりをきし御しやうそ
くを御心にあはぬかたの御ぞなればとりもあげ給はてありけ

るを人／＼かうの御からひつにうち入てをき」しがいとかう

55ウ

え給 ばしきを今日はいかゝはせんにてたてまつりかへてまちきこ

車より

一 おとゝなをより給へはこれみつ御さきなるよもきの露を馬
のぶちにてはらひていたてまつる よもきのふちをものゝゑや
うなどにあるはこれなり

松に藤も

御

あまぞゝきも秋の時雨めきてみかささふらふ け
に木の下露は雨にまさりて 引哥みさふらひみかさと申せば
みやきのゝ木の下露は雨にまされりと云哥の心也

源氏 たつねてもわれこそとはめ道もなくふかきよもきのもと

此哥

ゆへ巻をよもきふと也

けんし

56オ

の心をとひとりこちて」猶おり給とほんにあり うちに入給
てとし比の春秋のくらしがたきもたれにかうれへ給へきいま
ゝてさしもおとろかし給はぬつらきにねんしつるを心くらへ
にまけきこえてなん杉ならぬ木たちのしるしにとのたまふ心
は松に藤のさきかゝりたるをみておもひいたし給へるゆへな
り 引哥恋しくはたつねてもこよ我がやとはみわの山もと杉
たてる門と云哥の心也

むかひのらうはかへもなければさしいらりたる月影にみいれら
るゝ御すまゐのさすかにけた」かくみえてひやうふ木帳もた
ちどかはらぬを心にくゝありかたしとみたまふ むかし物か
たりにたうこぼちたりけん女をおほしいつるに同さまにてな
かめすくし給けるをいとをしくさるかたにてもわすれじとお
もひたりしを事しげさにまぎれてとふらはざりし我が御心の

56ウ

なまきけなまきおほしるへし 引事そのかみおとこの他行の
ほとうたがひのためにたうのかべをこほちてよもすからとも
しあかしてゐたりし女ありし引事也

源氏 藤なみのうち過かたくみえつるはまつこそ「宿のしるし 57オ

なりけれ 御返

おんな 年をへてまつしるしなき我がやとを花のたよりにすぎ

君

ぬはかりかとうちみじろけたまへる袖のほひも心にくきけ
しきにあてにきこゆればさすかに人の御ほとある心ちし給ふ
かしくはたまへとたちとまり給はん事はまばゆければ心うつ
くしくのたまひすべして花ちるさとへおはしましぬ こゝの
御すまゐもあざやかにいまめきたる事なきにぞとがおほくか
くれける かやうにたつね」いで給ふを人のもりきかんもか
たはらいたければわたり給ふ事などはなし めくりのついで
なければいたがきといふ物うちつけさせて水のみくさかきは
らはせ前さいのもとだちもざざしくしなしたり 木草の色も
たゞすごうのみ見なされしをうちつけに心ちよけなり まつり
御襖などのれうとて人のおほくたてまつりたるしやうわき
ともをかなたこなたへたてまつり給ふにこの宮へはとくつ也
御心に入てかみしものためおほく」たてまつり給ふくつした
りつるおんなばらは空をあふぎてそなたにむきておかみたて
まつりてなんよろこひける ちりくにきほひちりし人く
心みえにいそきまいりつどひてけんしの御かたにこと葉つか

58オ

ふまつる 事なきけいしともはこれへまいりてついでし御
けしきたまはりけり 世のつねの所をはかりそめにも御心と
ぬめ給はぬか事と人のおもひたるにかはかりなのめならぬふ
るめかしさをものめかしいで給はいかなるむかしの御ちぎ
り」にかとれいの世人はめてあさみけり けんしを申うとめ
し御をばの大式の北のかたつくしよりのほりておもひをとつ
れきたるけしき侍従がいますこしおもひしのばざりし心みじ
かさはつかしきなといますこしとはずかたりしもせまほしけ
れとかしらいたくむつかしくてなん今又つてにきこゆへき
とそ

58ウ

以上六首

十二 絵 合

一 齋宮御まいりの事入道のみや也 藤つは也 中宮御心に入てもよほしきこえさせたま

ふ」この比は冷泉院の御代也 いぜんみほつくしの巻に齋宮は かはり給ていせよりみやこに帰のほり給しがほとなく御母六
条の御息所はかくれ給しは源氏とりもちて御やしなむすめに
していまの御門へ女御にだて。またふ事也 大との、中納言の御
むすめまいり給へれど御あそひがたきにうたてひいなあそひの
心ちすれはすこしおとなしき人を御うしろみにときため給なりけ
り。みかたとよりは御としばくたいにまさり給へれど人さまみひら
かにしめやかにおはしませはにげなからす 御つほねはむつほ
の女御とそきこゆる

のちに秋このむ中宮也

一 朱雀院は御位におはしましとき此さい宮の御くたりに大

こくてんにてわかれのくし」たてまつり給し時のさいくうの

御かたちをしゆしやく院はめてたき事におもほししみてさい

くうおりさせ給てみやこに帰給へれば女御まいりあるへきよ

したひく御せうそこありしを故みやす所もてはなれきこえ

給てすくし給しのちかやうにけんしの御はからひにていまの

内へまいり給へはしゆしやく院は世の中もうらめしく心やま

しくおほされて御まいりけふになりたる日えならぬ御しやう

ぞく御くしのはこくのゑかうの又なきさまにひやくぶの外を

おほく「過にほふなんとたてまつり給へり けんしのおとよ

もこよにおはしまして事ともきためたまふ日なりければかく

なんとによへつたう御らんぜさす たゞ御くしのはこのかた

つかたをみたまふにつきせすなまめかしくめつらしきさま也

さしくしのはこの心葉に

朱雀院 わかれちにそへしをぐしをかことにてはるけき中と神

やいさめし とあるを御らんし付ておほしめくらすにいと

くをしくかはかり御心にとゞめてふかうおほしめしける

事」をうちはいまたおさなきさまにおはしますにかくとりた

てゝ引たがへきこゆれはいづかたにも物しくやおほしめすら

んとむねつふれてとばかりものもおほせられず 御返しはい

かよとの給へど心はつかしければえひきいでざりけり 御返

齋宮 わかるとてはるかにいひし一こともかへりて物はけふぞ

かなしき この御返しを御覽するに付ても院は御心はなれか

59 ッ

たかりけり けんしは

しうおほさるゝしゆりの宰相をおほせ付て「おとよはうちに

まいり給ぬ

御門はめつらしき人まいり給うときこしめしていとうつく

しく御心づかひし給 さいくうの御かたちはこめかしくおほ

たゞあり也 とかにましますはいたふ夜ふかしてまうのほり給へり ころ

きてんは御覽しつきにければむつまじくてうちとけたるわら

はあそひなどはそなたがちにおはしけり むめつほはおとよ

の御もてなしもあなづりにくおはすれば御とのゐなとはお

なしほとなり 中納言はおもふ心ありてこうきてんをはい

らせたてまつり「給しをむめつほのまいり給てきしろふさま

におはするを心やましくおほしけり

冷泉院 この御門はよろつの事にすぐれて絵をこのませ給けり

れの月なみのゑもいみしくとよのへこのみてたてまつり給け

り 御門の御前へ月次に絵まいるとみゆ このませ給へはにや二なくかゝせたまふ

殿上の人くもこの事まねぶを御心とゞめ給けり むめつ

ほおかしけにゑをかき給ふ おかしけなる御かたちにてとか

く思めぐらしまほならずそびふしてふてうちすさみ給ふさま

に御心とまりて「しゆくむめつほへみかとおはしましてかき

かよはし給ふ 中納言このよしきゝ給てわれおとらめやとて

いみしきゑしともめしあつめてけうある絵ともかきあつめ給

61 ッ

へりこうきてんにて又これをみかとおはらんとすむめつほの御
かたへもたせておはしまさんとするにこうきてんおしめ給て
心やすくもとうで給はず 源氏の大臣このよしきこしめして
この中納言の民心のわかしくしきこそふりがたけれさやうに
おしめきこえはこゝにもさるへき絵とも侍りたてまつらん」

62 ヅ

とてゑともいりたるみづしあけさせ給てめつらしきはそれ

紫の事也

／＼とたいのうへもろともにえり出させ給ふ ちやうごんか

わうぜう君などこのいみあるをはこのたひはとりいてさせ
給はず ねうこまいりのはしめなればやうき王照くんをいまひ給し

事也

心葉の事物によりてあるとみゆ よろつものゝかん

ようをこゝろはと云とみゆ この櫛の箱の心葉はくりかた也
めかえの巻にたきものゝつばにこゝろ葉ありそれはつほのふたと
みえたり かふりにも心葉あり それはうちえだ也 あさいみの
ときかふりにさし給 梅とつはき松柴をうち枝にだみてさゝるゝ

とあり 又むすひ花を人のかたへたむけにつかはすとてあさから

すちきり一むすべるこゝろ葉はたむけの神ぞしるへかりけるとよ

みたりと記したり ものによりてあるとみえたり なをとふへし

一 ゑをととり出給ふつゐてにかの旅の御日記のはこもとうで給

へり すまあかしのたひなり かき給し絵にけんしの御ありさまをも

日記のやうによみ給し哥なども書付られたればたひの日記の

入たる なに心なからん人たにこのゑをみてはなみたおしむ

はこ也

まじきをましてその世に恋しかなしとおほししよりもおほし

けんありさましまゝのかくれなくかきあらはしたるを見給

ふにむらさきさきうへはいまゝて見せ給はぬうらみをぞのたま

ふ

紫

ひとりゐてなげきしよりもあまのすむかたをかくてぞみる

べかりける

63 ヅ

源氏 うきめみしそのおりよりもいまは又すきにしかたにかへ

藤

るなみたか 中宮はかりにはみせたてまつるへき物なりとの

たまふ このすまあかしの絵をはきてまづのこりの絵をた
てまつり給へり かくいふほどに大内の女ばうわれも／＼と
左右へかたよりていひ口をは女房ぞ申たる

一 左むめつほの御かたへよりたる女房は平内侍の介 侍従の

内侍 少将の命婦也」

一 右こうきてんの御かたへよりたる女房は大江の内侍の介

中将の命婦 兵衛の命婦也 たゞいまのいうそくともにて心

／＼にあらそふ口つきともおかし 中宮も 藤つほの御事也

心にいりたる事にて御おこないもけだひしてかなたこなたと

御らんす

一 まづ物かたりのいてきはしめのおやなる竹とりのおきなに

左 右 としかげをあはせてやゝあらそふ 宇津保と書

ともうつをとよむへしこの物かたりいまほとたえて

みえたり 王代記に宇津保の物語廿一卷とあるはかり也

一 へいなしのこと葉になよ竹のよゝにふりにける事なれと

かくや姫ののほりけん雲井はしりかたしといふは帝わうの

きさきになり

たりし事也

一 右のいひ口大江のななしのこと葉にかくや姫はこの世の契

竹の中にむすひたればくたりたる事とこそおほゆれつるにも

しきのかしこき光にはならばす成にけりとは天智天皇の御も

事也竹の中とは

うつほのとしかげはあらし波風をしのぎて人

驚のかいご也

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

64 ヅ

の国にまかりける心さしきして行ける心もかなひてつゝるに人

の御門にも我が国にもさへ」のほとをあらはしすゑの世にも 65オ

ほどこしたりととしかけをほめたり 右のいひくちなるゆへ

なり うつほのとしかげといひし物はきんのひきよくを日本へひろめ

んとてもちしへわたるとてあくふうにはなたれてしらぬくに

ゆく されと心さしのしるしにやせんたんの木のもとにきんをた

んじてその国の人へある所へ吹付られてともなひて。きよくをさ

うてんしてわかつてうに帰てきんのふをつたへしなりこのことはりを

いひたてたり

一 つぎに伊勢物かたりに正三位をあはせてあらそふ 左 ひたり

もみきもことほりおほく「一まきに」こと葉をつくしたり 右 い 65ウ

せ物かたりをほめて正三みのゑをおとしめたり

左の平 いせの海のふかき心をたどらずてふりにし跡と浪やけ

内侍 つへき 正三位をほめてなりひらをおとしめたり

右大江 雲の上におもひのほれる心にはちいろのそこをはるか

の大内侍 にぞみる 中宮も。かたびぎ給ふ御こと葉にてよのつねのあ

だ事のかされるにひかれて ひだりを さい五中な しやうの名をはくたさ

じとて 入道 みるめこそうらふりぬらめ年へにし「伊勢をの海士の名 66オ

の宮 をやしつめん かやうにあらそひあるを源氏のおとゞきこし

めしておなしくは御覽し所あるやうにしなして御門の御前に

てこのかちまけさだむへしとのたまひなりぬ

一 この比世の中にはゑのさためをするを世人のやくにしたたり

しゆしやくるんにもこのよしきこしめしてむめつほの御かた

へ御絵ともたてまつられたまふ ゑんきの御手づから事的心

かゝせ給へるに又我が御代の事かゝさせ給ふ そのなかに齋

宮伊勢へくたり給ふぎしきをしゆしやくの御心に「しみたれ

はきんもちがつかふまつれり その比の 絵し也 大極殿へさいくうの

御こしよせたる所をかきて

朱雀院 身こそかくしめの外なれそのかみの心の中をわすれし

もせず むめつほはつゝましくおほせどかたしけなければさ

いくうにての御かんざしのはしをいさゝか折てはなたのから

のかゝみにつゝみて御返しにそへ給ふ 天冠の事也

梅霊の 女御 しめのうちはむかしにあらぬ心ちして神代の事もいま

そ恋しき とあり 以上九首

一 中納言は名たかき絵師ともめしこめていみしう「ひめて 67オ

ひした わりなきまどをあけてかゝさせ給けり 人しらぬひかり

事也 にて書たる事也

一 中納言の女御こうきてんの御かたへは御をばの大ききお

ほろ月夜のないしなどの御かたより太政天皇の御絵ともま 故院の御事

いたりたり

一 やよひ十日なればうちわたりものとやかにせちゑなともな

きころにてせいりやうてんにおましをも女房よそひたるとあ り

るは 御さしきのかぎ りなとの事也 左右の女房まゑしりへとしやうそき分

たりとはて 命婦は後也

一 殿上人はこうりやうでんのすのこにをのく心よせわきて

さふらふとは左右の御かたうと也 うへ童六人つゝ色くの
しやうそくかざみあこめにてかたちもとゝのへて絵ともいり
たるはこを御前にかきたてたり しき物とはつくゑより下にしか
るゝをり物色くのあや也

うちしきはよのつねつくゑの上也 からの物とも也 けそくとは
花足つくゑのわらび手也 あしゆいのくみとはわらひてよりな
く色くのいとくみをむすひてつくゑの四方へはへらる
ゝとものに記したり 此外に説ありともいへんあるへからず

けんし也 左右の女御の父なるゆへ也

一 めしにてうちのおとゝ中納言御前へ参り給」その日そつ
の宮のちには てん上にさふらひ給けるをわさとあるめしには

あらてけんしのしたにすゝめ給て御前へまいり給へり 絵の
はんしたまふ よろつの事にゆへある御子にてひはんともい
とめてたし

一 入道の中宮はあさがれるものゝみしやうじをあけてお
はします 御門のあしたのぐこきこしめすときの御庄子の内也せいりやうてん也 日もう

らゝかに鳥の声も物おもしろくいまひとまきつゝのこりたる

はてにすまあかしのふた

「巻の絵出たり 中納言の御心さは

63 ヲ

ぐへし みきにもさる心しておもしろきまきをえりをかれた

りけれともなへての事はおよふへき事にあらず 物しつかに けんし

おもひすましてさる上ずのかきすまし給へはしらぬさかひ
をもめのまへにみる心ちしてあはれなり みこをはしめたて

まつりてなみたとゝめかね給ふ 御子の御こと葉に故院の御
前にてみこたち内親王みなみちく師の才をならひ給し中にと

りわき源氏をはをしへきこえ給ふもすくれ給ふさいかくか
ら也 第一の御のうにきんの琴つきに琵琶しやうの琴よこふ

えとりくにならひとり給てゑはそのすさびわざとこそみえ あまりの

給しをいとかうまさなき御筆にていにしへの上ずどもあとを くてん

くらふなすはあまりけしからぬ御事なりときこえ給ふ 両は
うをしゆづりてひたりかつになりぬ すまあかしの事をみや
すまあかしの絵なるへし

一 源氏の内大臣後の世をも心しつかにとて嗟嘆にいかめしき

御たうをたてさせ給へり 大覚寺のみなみにあたりて滝との 殿

ゝ心ばえおとらす」おもしろき所也 一説滝と野の心ばえお
とらずおもしろしとあり 秘すへし この絵合にきたある絵

師こせのあふみつねのり筆也 手に道風あり みちかせとや
はらぐへし」

69 ヲ

70 ヲ

(目次)

十三 松風

十四 薄雲

十五 權

十六 乙女

(本文)

十三 松風

「(扉裏)

」

一 明石へハ御せうそこたえすいまはなをのほるへき事をぞも

よをし給へき 故院の御ゆつりの所也 二条のひんかしの院といふつくりはてゝ花散

りときこえしうつろはしたてまつり給 この院にはかなた
こなたに行すゑかけてたのめをさし人々をねがひにしたが
ひてつどへすませんとおほせハすまるもいとこまやかにへた

てくうつくしくしつらひをかせ給へり よもきふの事也 かのすゑつむ花も

ここに住給」

2

一 あかしにはみやこにのほりて人なかにすまん事うるくし
からんこのひめ君の御ためにもかすならぬさまを人にみえん
事は行すゑくるしければたくしのすみかをおもひめぐらす
にあかしのあま君のおうちにかつらの中づかさの宮といふ人
ありけり かくれ給てとしひさしくなるをその御すみか大井

川のほとりにあり ひさしくつたはりて院もりのやうにてす
みけるおとこをあかしへよびくたしてかたらふやうみやこは
なれしのち世の」中の事をおもひすてたるやうになりぬるを

世のすゑにさらがへりて都のすみかともむる也 いるへき物
をはあかしよりあげわたさんかたのことく人すみぬへきしゆ

りしなしてんやといへはこのおとこあたりの田などの事をあ
やうくおもひてつなしにくきかほひげがちにてはちぶきいふ

とは はちをばらふやう あかし にものをいひたり その田はたけなどの事はこゝにするま

したしはしほしほとやどらんといへはけんしの御かたさまの
事ときけはわつらはしくてそのうちもの」なとうけとりて大

井をしゆりしたり つくりはてゝけんしの御かたへかゝる所
をなんおもひいてたると申たり けんし人なかにすまん事を

くるしけにおもひたるはかゝる心なりけりとおほすもくちを
しからぬ心のようなかとおほす しひてあかしへむかへ

をくたし給へり のがれかたくてのほらん事おもひたつに
うたうのひとりとまらんをあはれにおもふ きたのかたをも

あまになしてへちのいほりにすますればなにゝつけてあかし
にもとまるへきむすめにそひ」て京へのほる心の中もいとかなし

一 をさなきひめ君はいとうつくしく夜る光けん玉の心ちして

の事也 十和か玉 あかしの入道は袖よりほかににははなちきこえざりしをみなれ

てまつはし給へる心ばへなと時のまもみたてまつらではいか

3

3

たまへるよと心つきなくおほしたり きのゝえさへあらため
給はんほとやまちとをならんとの給けり たそかれ時に大井

へけんしおほしつきぬ あかしにてかりの御ぞにやつれ給し
時たにる物なかりし御かたちをさる心してひきづくろひ」

たまへるはめもおとろきて心もはるゝやうなり ひめきみの事
わが君いと

うつくしきを見給ふにおろかにおもふましき人のすくせかな しゆくせとよむへ
あふひの御はらのちに夕きり

とあかしの上をおほす 大殿のわか君を世人もめてたしとい

ふはなを時にしたがふ人のおもひなしなりかくこそかきり さききの事
なき人の山ぐちはしるかりけれとうちまほり給ふ はしめは
すこしけんしにはちらひ給しか 三歳の
秋也 やうくみなれてもの

いひわらひなとむつれ給 みるまゝにほひまさりらうたく けんし

てかきいだきて居給へるさまみるかひありてしゆくせ」こよ 7オ

なしとみえたり あま君のぞきてみたてまつりてゑみさかへ

たり けんしひめきみを ときころをへたてつるもくやしきまでおほさるればよ

ろつにかたらひのたまひあかす 日たかくおほとこのもりお

きてやり水なとつころはさせ給とてうちぎすがたのなめげな ふれい也

なんめけとよむへし 仏具也 にうちとけ給御もてなしをあま君はめてたしとみる あか

の具などのあるを見つけ給てあま君はこなたにやとて御なを

しめしよせてたてまつり木帳のもとにより給てつみかろくお あかしの事

ほしたて給へる」人ゆへは御おこないのほとありかたかくこそ 7ウ

おもひまじきをこゆれとのたまふ (マ) 心はひめきみのかほうつくし
ければぶそのぜんあくはじそ

なんひめてたはるといふふる事あり あかしの けうたうあまきみのおこ
なひめてたければこそかゝるかたちはむまれたれとおほせらるゝ也

あま君二葉の松はたのもしき御おいさきといはるきこゆるを あかしのうへの事

あさぎねざしゆへいかにうなと申給ふ あま君のおうち中つか

さの宮のこゝにすみ給けん事なととひ給ふにつくろはれたる けんし

水のをとなひ事くしくきこゆれば けんし

あま君 住なれし人は帰てたどれともしみつぞやとのあるしか

ほなる けたかき事也 といひけつさまみやびかによしときゝ給」

はりせる けたかき事也 うちなかくてたち給ふをみてあかすおもふへし

一 けふはさかのみだうにおほしましてかきりなきほとけのとふ

らひなと見めぐらしておほせおこないて十四日ふけん講十五

日つこもりは阿弥陀尺迦の念仏などおこなふへきさためかき

あらはし給てたそかれ時に又大井へ帰り給へり あかしの事 ありし夜の

御ありきの事おほしいてたる折からかのかたみのきんをさし

いてたり 物あはれにてとりてしらへ給ふ あかしの ひわをあかしの

うへ」せめられたてまつりてしらへたるほとばんしきてうの

こゑにかきかへすはちをとけたかくすみたる所ありておもし

ろし あかしのうへ いかてかくよろつものゝねすくれたりけんとありか

たくおほさるへし あかしのうへ かつちもいみしくねひまさりてみすてか

たくひめ君はたつきせすまほられたまふ あかしのうへ いかにせましむら

さきの御かたへむかへとりて心のゆくかきりもてなさはゆくあかしにむまれたる事也
すゑのつみもかるみなんとおほす はゞ君のおもはん事のとをしければさものたまひいでずなみたくみてまほりたまふこの御さんのしらへもかはらねは

9
オ

源氏 契しにかはらぬことのしらへにてたえぬ心のほとはしり

きや との給へは

女君 かはらしとちきりしことをたのみにて松のひゞきにねをそへしかな ときこえかはしたるがにくからぬこそは身にあまるまでのさいわひなめれ この大井をは山さ人と又かくれ家なんと人にはけんしのたまひしなり このころは大井嵯峨かつら殿三所をかけてありき給 又の日は帰り給ければ日たかくおほ殿こもりおきたり かつらの院といふ所はけんしの

も
ヒ

9
ウ

しり給ふ所なればけふはそなたへおはし「ますへきにてかんたちめ殿上人もみなこゝにたつねまいり給へり おとゝいて給ていとかたき事かなかく見あらはさるへきかくれがにもあらぬをとのたまふ 殿上人 きのふをくらかし給しほいなさにけさ霧を

はらひてまいりたりと申給ふ 山のしきはまだしく侍りけ

たれともなし

り野への色こそさかりに侍れなにかしのあそんこの鷹にかゝ

つらみて野にとまり侍りぬるいかゝなりぬらんと申給ふ

かゝつらふとはかけしるふ心也 なにかしのあそんとは名をさゝず野にとまるとはきたのにてこ鷹かりしてこなたへまいるへき人く也

10
オ

一 大井より桂へ
心ことに引つくるひいで給ふにひめ君手をさしいでゝし

たひ給へはけんしつゐる給てあやしう物おもひたえぬ身かなししのほとにてもよそゝにてはいかゝせん里とをしやとのたまふ めのとくたりしほとはおとろへたりとみえしかたちねびまさりつゝいまからの御もてなしのうとくをはしまさんはくるしき御事にもなとなれきこゆるをあはれとみたまふけんし御車のもとへ
さしあゆみ給ふほとおとろゝしきまてをひのゝしりたり

あかしの事

10
ウ

よしきよ御はかしとりによりき「たりはま風おほえ侍りしあかつきの寢覚にもおとろかしきこゆへきよすかたになくてとけしきばむ うちより松もむかしのとたどられ侍るにうれし

ごたち

き御こゑかなといらへたり 引哥たれをかもしる人にせんたかさこの松もむかしの友ならなくにと云心

もてなしの事

一 かつらの院へおはしましたれにはかなる御あるじの事と

さはぎて聴かいたもめしたり かゝらの川づらおもしうくてあかしの事おほしよそへらる あまのさへづりも所につけては「おかしかりしをのたまひいでたり 御かはらけあまたゝひずながれてとよむへし 川のわたりあやうきまで人ゝゑいたり

11
オ

一 こよひは九月の十三夜成けり けんしはあかしにてめのまへにみたまひしあはちしまをおほしいてたり あはとはるかなんとのたまひて

源氏 めくりきて手にとるはかりさやけきやあはちの嶋のあはとみし月殿上人也

頭の

中将 うき雲にしはしまがひし月影の住はつる世ぞのとけか
るへき こゝにて右大弁」とあるは故院の御時の人なり け 11
んしの七歳の御時こうろくわんへくし申てこまのさうにんに
あはせきこえし人也

右大弁 雲のうへのすみかをすてゝ夜半の月いつれのかたに影
かくしけん此哥ともをかつらの和哥の会とはいへり

一 この比の御門は源氏の御かくし子藤壺の中宮の御はらのと
うくうぞかしけんしを 御あにと人めにはみえて御うしろみこの御代
の事はよろつけんしの御はからひなり 御門もたのもしき事
にはおほしたり こよひはかならず六日の御物いみあく日に
てまいり給へきをいか「なれはみえ給はぬとみかとたつね申
給ふにかくかつらにおはしますすよしをきこしめしてかつらへ
御文あり

御門冷泉 月のすむ川のおちなる里なればかつらのかけはのとけ

かるらん うらやましくとあり 夜るゆけて殿上人又五六人
参り給へれば又ゑいくはゝりぬとはの事也 御使藏人の弁也

引出物の事
大井へまうけの物をとりにつかはしたればとりあへたるまゝ
とてながびつ二かけにてまいりたり 御使の弁はとく帰「ま 12
いはれは女のしやうそくかつつけ給ふ

御返 久方の雲ぬにちかき名のみしてあさ夕霧もはれぬ山里
源氏 この哥の心はかつらへ
行幸を待きこえ給心也

中におひたるとうちしゆんし給心は 引哥ひさかたの中にお
ひたる里なればひかりをのみそたのむへらなると云哥の心也
一 此小鷹の事はきのふの暮也 和哥の会より以前の事也 小鷹
に。かつらひて野にとまりし殿上人たち小鷹しるしばかりお
きの枝などにとり付てつとにてまいれり このおき二説 書てお
きと也

一説は草の荻の枝に付たり ちかき世にくさに枝まことしからすた
小木なりとつる けんしよみありしとき摂政殿の御ひくわ（く
わ二字ミセケチ）はんに夕かは草也夕顔の巻にしろき扇のいたう
こがしたるを隨身にとらせてえだもなまき花なめるをこれにを
きてまいらせようへ童いひをしせう也草の荻もよしとさため給
しと也 其外あしなにもせう哥おほし
以上十六首

十四 薄 雲

一 冬になり行まゝに川つらのすまひいと心ほそくてあかし
くらす おとぶもわたり給ふ事のとやすからぬに二条のひん
かしの「院にうつろへとすゝめ給へともつらき所おほく見は
てんものこりなき心ちすへしと申す心は 13
引哥 宿かへて待つにもみえず成行。はつらき所のおほくもあ
るかなと云哥の心也

一 源氏のおとゝの御詞にさらはこの若君をかくてのみはい
とひんなき事もおもふ心あれはかたしけなしかのたいにきゝ
をきてとは この比たいのうへと申は紫也 二条の院の西のたいに住給 14
ゆかしがるを二条へ

むらさきを

わたしてしは見ならはせてはかまきなとも 紅のはかま着三歳也男女共に袴

きは三 人にめらはして也 人しれぬさまならすしなさんとおもふなりとあかし

の上に「まめやかにかたらひ給へはきそおほすらんとかねて

よりおもふ事なればとむねつふれぬ あかしの上 あらためててもな

れ給はん事は中々に人のもりきかんとつくるひがたからんと

て ち はなちがたげにおもひたり おとどもことほりとおほせは

さのみしめてもおほせられさりけり

一 種 なくさみぐさをさへ引はなれてはつれ／＼もいかてかすぐ

さんおとどたまさかの御たちよりもなによつてかあらん

とおもふに身のうきことかきりなし うばのあかしの尼ぎみ

ものに心へたり もの にてあちぎなしみたてまつら「ざらんはかな

しけれともつゝにひめ君のためよからん事をこそおもはめあ

しくはからひてのたまふへき事にもあらずたゝおとどにまか

せきこえてわたし給へ御門の御子もはゝかたからこそおとこ

おやの御もてなしもまさりおとるけちめある物なれこのけん

しのおとどのかはかりふたつなき御ありさまならたゞ人に 臣下

て大やけにつかへ給ふは故大納言のいまひときさみなりをく 一かい也

れたまひてかうるばらといはれ給しけ也いまにてもやんこと

なき御はらにけんしの御むすめいでものし給はゝこのひめ君

は我が「身にそへてはおしけたれ給へしおやにも一きはかし

15 才

づかれたる人こそすゑまでも人におとしめられぬはしめとは

なれなといひてさかしき人の心 ものしりたる人也 のうらにものとはせなとする

にもたゝわたり給てはよかるへしとのみいへはあかしの上も

おもひよはりたり 引哥かく恋ん物とはかねておもひにき心

のうらやまさしかるらんと云哥の心也

一 むかへとり給へとけんしに申たりあはれと一しほおほすへし

いつよりもこのひめ君をめはなたずなてつくるひて見居た

り 雪ふりつみたるあしたれいはいはしぢかなるいで居なとも

せぬを汀の「こほりなと見やりてはしちかふうちなかめてゐ

たり 衣也 しろきをあまたかさねてけたかうきなしたるうしろで

かみのさかりばなとかきりなき人ときこゆともかうこそはあ

らめと御まへなる人／＼はみる あかし かやうならん日ましてい

かにさひしう恋しからんとらうたけになきて

あかし 雪ふかきみ山の道ははれずとも猶ふみかよへあとたえ

の上 あかし 雪ふかきみ山の道ははれずとも猶ふみかよへあとたえ

ずして とあれはひめ君の

乳母 雪まなきよしのゝ山をたつねても心のかよふ跡たえめや

はといひなくさむ この雪すこしとけてぞおとどひめ君のむ

かへに「おはしましたる あかしのうへ れいはまちきこゆる御さきのごゑ けんしの

をさならんとおもふ事によりむねつぶれておほゆ あかし 我が心に

てこそあらめいなびきこえんをしめてやはあちきなとおもへ

どさやうにとかくおもひかへんもかろ／＼しければいとうつ

くしけにてまへにすへきこへたり おとどあはれとみたまふ

にもおろかにおもひなすましきあかしのうへのしゆくせかな ゑん也

16 才

とおほししらる。これをよその物におもひやらむ心のやみおほしやるも心くるしければよろづにの給あかす。なにかかひなき身のほとにたにもてなきせ給はずはときこゆるものからねんじあへすなくけしきをこはりとおほさる。めのともさるへき契にやみなれそめて恋しうおはせん事といふ。めの

16 ♪

とのほかに少将の君とてあてはかなるわかき女房御はかしなととりての同あまが(一字補)入つ御車に乗す。あまがつは人かた也。うつく

しくつくりてよきしやうそくきせてちこのゆくかたへさきだてゝやる也。ゆなとあぶるときもさきさま白米をうちまきてそのあとにこれをやりてのちにちごをはめのとのくろかみをうへに」うちかけてとをす也。大六天の魔王などをすかさん

17 ♪

ためとみゆとひめ君 乗たまふ御車の外に人だまひにわかき人〜う

いづれも女也

へ童などのせて御ともにまいらす。ひめ君なに心なく車に乗らんといそぎたまふ。この春よりおほす御くしのあまそぎのほとにて。イ本めさしのほとにてともあり。あまそぎとはかつ

においさがりたる也。めさしもまゆのうへまておいてめをさすをいへり。いづれも付合

一 御車よせたる所にはあかしのうへ君身つからいたきて出たり。かたこのこゑはいとうつくしうては〜うへの袖をとらへて乗給

17 ♪

へとひくをいといみしとおもへは。あかしの上。すゑとをき二葉の松に引わかれいつか木高きかけをみるへき。えもいひやられてなき給へはざりやあな心くるしとて

源氏 おいそめしねもふかければたけくまの松に小松の千代を

ならへん。つるにはをとなくさめたまふをさる事とはおもへどえたへざりけり。おはしつきて御門ひきいるよりけたかくいかめしうはかなき庭のすなごも玉をかさねたらんやうに

18 ♪

はれ〜しければ」いかでまじらはんといなび心にはみな思けり。ひめ君は道にてねたまひける。いだきおろされてなき

なともしたまはず。御くた物なとこなたにてまいらするにやう〜見めくらはしては〜君のおはせぬをもとめてうちひそみ

給へはめのとめしいて〜なくさめさせたまふ。大井のつれ〜ましていかにとおほしやるは心くるしけれど事うちあひ

たる心ちしてかくてみたまふはおほすさま也。とてへちにたいわた殿かけてめのとのつほねして又わかき女房のつほね〜までも

こま。かにしつらひてちいさき御てうととのへ」ひいなあそひのやうにめてたし。

18 ♪

一 むらさきのうへはいみしくうつくしき物えたりとおほして

ます事なくいたきうつくしき給へはほとなくつきまとはれて

大かたうつくしき御心さま也。めのともとくさふらひなれに

たり。〜へはあまがつなと手つからつくりそぶくりおはす

一 山さとのつれ〜をたえずおほしめせは御文なともしけく

つかはし給ふ。としのうちににおとゞも入わり給へり。

一 ひめ君は御はかま著し給ていとうつくし。御たすき引ゆいたまへる御むねつきそめてたかりける。

一 としかへりぬ。けんしのおとゝの御かたはよろつおほすさまなれば御いとまなけれど山さとのつれ〜おほしやりてせ

19 ♪

ちゑとも過てのとやかになりぬる事大井へおはせんとて心こ

とにつくろひけしやうじてまかり申し給ふさま夕日のけざや

すくれたり

紫

かにさしりたるにきよらにみえ給へはたいのうへたざなら

ずみたまふ

みすの外也

ひめ君いはけなく御さしめきのすそにまとはれ

てとにも出給ぬへければけんしこしらへをき給てあすかへり

こんと口すさみ給ふに中将の君といふ女」房してわたどのゝ

19ッ

戸口に待かけさせてきこえ給へり

あかしの上の事

おとこの事

紫の上 船とむるをちかた人のなくはこそあすかへりこんせな

とまちみめ おとゝいとにほひやかにほをゑみ給て

実

御返 ゆきて見てあすもさねこん中へをちかた人は心をく

とも ひめ君のうつくしきにつみゆるし給て大井へおとゝの

わたり給をもいまはたいのうへもさのみえんじきこえ給はざ

りけり

あかし

いかに恋しとおもひおこすらんわれにても恋しかるへきわざ

ひめ君を

をとうちまほり給ふ御ふところに入てかはらかなる御ちをく

ゝめてたはふれおはするさまみるかひあり 御前なる人へ

20ッ

紫

はおなしくはこの御はらにいでおはせでとさゝめきあへり

に

一 大井。は住なるゝまゝにいとあらまほしくゆへありてしや

うじみはたねびまさり心はつかしきけしきてなへてならす

みゆ 嵯峨のみたうにまいりなんど心のかにてひめ君の御

事物かたりし給て心しつかにおはしますにそなくさみける

一 この巻に世の中しつかならず あまつ空もれいにたがひた

る月日ほしの光みえ雲のたゝすまひたゞならずとのみ人お

どろく みちへのかうがへ文ともたてまつれるによのつね

かんかへとふみとよむへし

ならぬ事と申たり 源氏のおとゝのみなん御心の中わつらは

しうおほししる事ともありける 大きおとゝかくれ給へり

撰政太政大臣あふ 世のまつりことをあつけきこえ給て源氏心

ひの上のち也

やすくおほされけるにいとくちをしくてのちへ御わざな

とも御子どもに過てけうじ給ふ けんしの御ため御おはむこなり

の時あまになり給ふ その大みやの御はあふひのうへとこしう

との中納言はかり也 後にちじの大臣こはらへ御子どもあり

21ッ

冷泉

一 いまの御門の御母藤壺の中宮 かのやく日の さかきの巻に

故院にをくれ給てのちは源氏のしのひへ御心むけをもひ

たふるにおほしはなれてかきりをおとし給てのちはきさきの

みふの物とはんにあり

御とくふんの物なとをもくどくの事におもむけ給てあさ夕は

御おこないにてすくし給しに御身もくづおれけるにやこの春

よりなやみ給てよはりおはすれば大やけも御なけきふかくて

行幸あり 入道の宮よはき御心ちにもよろこひきこえ給ふけ

んしの御子にておはします事をもうへは夢のうちにも心へ

給はぬをはゝみやはいと心くるしくこれのみなんむすほれ

たる心ちし給ける かきりあれはくるゝほとにかへらせおは

しますもあはれなり

21ッ

一 源氏のおとゝはいにしへのあはれもとりかへしおほしなげ

かれて御木帳のもとちかくまいり給てねんころにきこえ給ほ

とにほともなくともし火のきえゆくやうにてかくれさせ給ぬ

三月つこ 国の母にておはしませはよの中なへてくろみわた
もり也

りて花の色もはへなき」春の暮也 けんしの大臣大かたの空
も物のみかなしくおほしめす 山きは雲のうすにびにたな
ひきたるをれいほさしも見たまはねどおりからあはれになか
められ給て

22オ

源氏 いら日さすみねにたなひくうす雲はものおもふ袖に色そ

まがへる 此哥ゆへ巻をうすぐもと名付 このまきにかくれ
給へはうす雲の女院と系図あり 御とし卅七にぞおはしまし
ける わかくさかりの御よはひをおしくあたらしくなん

22ウ

一 この巻に故院の御弟と式部卿の宮ときこえしもかくれ給へ
り 御門にもけんしにも御おちにてましませはおほきにおと
ろかせ給へりも、そのといふ所に御いへあれは桃その宮と
申す いまの山も、このこうちをも、そのとなん

此比

いまかもさいるんと申すはこの式部卿の宮の御むすめなり
系図にあさかほの ちみやかくれ給へは御ぶくにてさいるん
さいいるんとあり ちみやかくれ給へは御ぶくにてさいるん
をおり居給へり も、そのに御おぼの女五の宮と申とあひす
ませ給けり 源氏はうちつゝまきかゝる事をおほすによのつね
ならず世の中さはかしきに「事付て入道の宮の御かくれの、
ちはやかて御しやうしんにてみすおろしこめておこない給ふ
中宮の事

23オ

おさめたてまつるにもかなしとおもはぬ人なし くだくの事
をたてゝし給しかはさるまじき山ふしなときへ思なけきたり
うへもかきりなくおほしなかく この比は世のまつりことを
さるべき人もなければけんしの内大臣せさせ給御ねんじゆ
だうにこもりおはしまして人めをつゝみてなきくらし給ふ

も、その宮さへかくれ給へれば御門はいよ、心ほそくお
ほしたり」

一 かくれ給し入道の宮の御は、せんていのきさき宮の御か
たよりつたはりて御いのり申給ふ阿闍梨あり とし七十にな
りぬれはいまはおはりのおこなひせんとてふかき山にこもり

たりけるか入道の宮の御かくれによりてみやこに出たり、う
ちよりのおほせにこの比はかりは夜るにさふらへとせんしな
れはとしよりてよゐもたへかたきよし申ながら大内にさふら

ひけり よると云はよひはかりの事にあらず夜も
すからねずして御いのり申事也 夜居也

一 このそうは源氏と藤壺の中宮のいにしへのひ」給し事を
心へたる人也 そのゆへはいまの御門はらまれ給しとき中宮
けんしの御子と心へ給ふまゝにいみしくおほしきはきてこの
あしやりにひたそら御いのりをさせられたり このあやまり

24オ

人をのしらぬやうに又さういなく御位につき給ふやうにとく
はしく事のよしをのたまひしらせて御いのりをうけ給ぬ さ
るほどに御位につき天か下をしろしめすといへともこの事を
心へ給はねは御ちの源氏の大臣をしんかめにめしつかふその
ゆへにあまつそらも天べんしきりに「ほしの光もささかしき
事也 いとけなくおはするほどは御くみかくれぬ御としたり

24ウ

おはしませは天のゆるしなしとあしやりおりから殿上に人も
おさ、さふらはぬとき御門にこのよしをくわしくあしや
り申たり うへはきこしめすにゆめにやとそおほしめしける
おそろしくもあさましくもかなしくもおほさるゝにはかり

23ウ

物もおほせられさりけり あしやりあしうそうしたるにやと

おもひてやをらまかづるをめしとよめていまゝてしのひこめ
られたりけるを「なんつらくおほゆるさてもこの事をそこよ
りほかにしりたる人やあるとの給ふになにかしと王命婦より
外にけしきみる物は候はぬによりおそろしくおもひきこゆる
となく、夜もあけ、れはまかりいてぬ 御門そのうちにはけ
んしを見たてまつり給もおそろしくかたしけなくており、
位につき給へと申給へどけんしうけびき給はさりければちか
らおよばせ給はて源氏の四十の御質にことつけて藤のうら葉
の巻に太上天皇の御くらるをさ」つけ申給しはこの阿闍梨の
申たりしゆへ也

冷泉

25

一 齋宮の女御はこの御門の御心さしあさからねはけんしのお
とよをいとよおやさまにおもひきこえ給てつねは二条の院へ
御さと出ありけり 秋のころ又まかて給へり 秋の雨しめや
かにふりてものあはれなる夕くれにけんしはむかしふちつほの事かき
つらねおほしいて、御袖もいたくぬれぬ 御じゆず引かくし
さまよくなまめかして女御のおはしますかたのみすのうちへ
まいり給へり 前けんしさいの花ともこそこのりなくひもとき侍り
に「けれ物すきましく秋ともしらすかほになんときこえ給ふ
引哥も、草の花のひもとく夕暮におもひたはれん人などがめ
そと云哥の心也

けんし

一 もろこしには春をあひし我が国には秋をあはれぶと申侍れ
とも時々にめうつりてえこそ花鳥の色をも音をもわきまへ

侍らぬ

引哥 花鳥の色をも音をもいたつらに物うかる身は過す成けり

と云哥の心也 はかしくしきねがひをはさる物にてとしのう
ちにさきかはる花紅葉をもうへうつし秋の草をもつくりわた
していたつらなる野へのむしを」もすませて人にもきか
せたてまつらんとおもふを春と秋といつかたにか御心よせ給
へきと女御にとひ申給へはむめつほいといらへにくき事かな
とおほせどむげにきこえ給はさらんもわかしくしければはか
しくしからぬ心にはましていかにおもひわき侍らんいつとな
き中にもあやしときよし夕こそはかなふきえ給し露のよすが
もあはれに侍れとしとけなけにのたまひつけはひいとわか

(ママ)

みやす所の事

25

しくらうたけにみえたまふ 引哥いつつとても恋しからずは
なけれ」ともあやしかりけり秋の夕暮と云哥の心也 はかな
くきえ給し露とは御は、六条のみやす所八月にかくれ給し事
也 いとあはれと(一字補入)おほして
源氏 君も又あはれをかはせ人しれす我か身にしむる秋の夕風
女御御返なし たいにけんし帰給てむらさきの上にもむめつほ
の秋のあはれをしめたまへるもあはれに君の春のあけほのを
心にかけ給へるもとり、にすてかたしいかでおもふさまな
るすまゐりしてとおもふもよろつはた、御ためにこそとかなら
ひきこえ給ふ

紫

大弁

一 山さとへは月に二たひのさかのみてらの念仏に「事付てそ
わたり給ふ」としのわたりにはあらねとまちとをなれはいと

あちきなしと世の中を思しめりたり 引哥七夕のとしのわたり
にあらねとも君か舟ではまれにこそまで 又云天の川とを

きわたりにあらねとも君か舟ではとしにこそまでと 私云この
晋古今集

ノコトクナラハ たま／＼おはしましてほとなくたち帰給も
よろしく侍り

いと心つくしなれば夢のわたりうきはしかとのみうちなけ
れかれ給ふ (ママ)

引哥世の中はゆめのわたりのうきはしかうちわ
たりつゝものをこそおもへと云哥の心也 けんししやうの琴

を引よせてかきまさ」くり給ふ 女もさすかにたえぬ御契の 28ア

たまさかなるをおもふにものおもはし 木しけき中よりかゝ
り火の影やり水のほたるにみえまがひたればあかしにてき夜

ふけしことの音もおほしいづ さやうのすまゐにしほじまさ
らましかはとおほせらるゝに

あかし いさりせし影わすられぬ篝火は身にうき舟やしたひき
あの上

ぬらんおもひこそまがへ。れ侍れといふをうらみて

源氏 あさからぬしたの心をしらねばやなを」かゝり火のかけ 28イ

はさはげる

以上十首

十五 種

一 さいみんは御ぶくにておりみ給にしかは とはあさかほのひめ
君はさかきのまきよ

りかもいつきにる給し事也 御ち、桃ぞのゝしきふ脚の宮う
すくもにかくれ給にしかはその御ふくにさいみんおりの給事也

源氏のおとゝれいのおほしそめたる事はたえぬ御くせにて御

とふらひに事付てしげうきこえかよひ給ふをさいみんは心つ
きなき事におほしたり

一 すまへけんしくたり給ふ御とがのうちにかも あさかほ
29ア

へ御ふみたてまつり給も大やけへうしろめたき事のかずにい
りたりしかはいとゝあさかほのさいみんはうちとけかたく心

つよくおほしたり けんしはおりたちてこの比はせめきこえ
給へどいとつれなし

源氏 人しれす神のゆるしを待しまにこゝらつれなき世をすく
すかな こゝらはおほき事也巨々等也

齋院 なへて世のあはれはかりをとふからにちかひし事と神や
いさめん けんしの御こと葉に過にしかたのつみとかはみな

しなどの風にたぐえてし物をとのたまふ 風に吹うし」なひ
たるとおほせらるゝ心也 はらへのこと葉にしなどの風のあめの八
云雲をはらふがごとしと云心也 したと 29ウ

いへり大かた大風の事也 のたまひかなへたるふしもなくてか
へり給へればけんしはねざめがちにてあかし給 とくおき 給

てあき霧をなかめたまふにけれたる前さいの中よりあさかほ
のこれかれにはいまとはれて色もことなるを折給て夜へのさ
いみんへたてまつり給

源氏 みしおりの霧わすられぬ種の花のさかりは過やしぬらん
御返し

あさかほ この哥ゆへ巻をあさかほと也

秋はてゝきりのまがきにむすほゝれ」あるかなきか 30ア

にうつるあさかほ につかはしき御よそへに付ても露けくと
のみあるをれい御心とゝめてけんしはみたまふ

一 御せうそこなど申つたふるせんじの君を二条のひんかしの
たいへんしむかへとり給てまめやかにかたらひ給へとつれ
なさのみまさりたまふ おほしわひてある夕暮に又けんしま
いり給ふ 御おぼの女五の宮と申はけんしの御おぼの御おぼ
なり さいゐんともゝそのにあひすませ給へは御おぼの御か
たへまいり給ふとかこ」つけてぞあさかほのさいゐんへはち
かづき申給ふ 御車のいるへき門のじやうさびつきてあきか
ぬるよしみかどをりうれうるをけんしきこしめして

30ウ

源氏 いつのまによもきが門とむすほれ雪ふるさとゝあれし
かきねぞ

一 けんしまつ女五の宮へ御あまにてまします まいり給へれは
しはし御ものかたりのほとにやかてあくびをし給てよひまど
ひをし侍るほとにともたまひあへずいびぎとかきゝならば
ぬをとなひす」れはけんしうれしくおほしめしてさいゐんの
御かたへおはしまさんとするに又しはぶきうちしてふるめか
しき人まいりたり かのとしねびたりし源内侍のすけはあま
になりてこの女五の宮の御でしにておこなふよしきゝ給しか
どいまゝてあらん物とはおほさざりつるにあさましうなりぬ
なをもしたつきに口はずけみなからよしめきたり

31オ

源内侍の介 年ふれと子の契こそわすられねおやのおやとかいひし
一こと 故院の源氏の「うばなりとおほせられしをよめり

31ウ

御返 身をかへてのちもまぢみよこの世にておやをわするゝ
ためしありやと とてさいゐんの御かたへわたらせ給へり

こよひはまめやかにの給てにくしともたゝ一こと御あたりち
かくてきこえんとせめ給へともいとつれなければさまよきほ
とにうちなきて

源氏 つれなさをむかしにこりぬ心こそ人のつらきにそへてつ
られ かの御返事などはなきけなからぬほとにて」
齋院 あらためてなにかはみえん人のうへにかゝりとさゝし心
はかりを 御心もゆかぬけしきにてかへり給へり

32オ

一 この齋院をねんころにきこえ給ふ事をむらさきのうへにま
ねをきこゆる人ありけり うちつけに御めとどめ給ふによそ
にとまり給事しげくなり給てやくとは御文を。書給へは人の
いふ事むなしからじとむらさきのうへみしり給て源氏にうち
そむきがちにおはすれは心へぬ御けしかなしほやきごろもの
あまりめなれてあつ」かはしくおほしめす。やとのたまふ心
あつかはしきはあつかふ心也

は引歌伊勢のあまのしほやき衣なれゆけはうきめのみこそ
みえまさりけれと云心也
一 けんしはむらさきの御心なくさめんとていにしへみたまひ
し人のうへなとこまやかに物かたりし給ふに雪ふりつもり松
と竹とのけちめおかしうみゆる夕くれに人の御かたちもまさ
りてみゆ 春秋の花もみちのさかりなるよりも冬の夜のすめ
る月に雪のひかりあひたるこそ色なきものゝ身にしみてこの
世の外までおもひながさるれ すさまじきためしに」いひお

32ウ

31ウ

きけん人の心あさよとてみすまきあげてむらさきもろ友に
なかめたまふ 少女也 うへわらは也 わらはへおろして雪まろばしさせて御らんす

ちいさきわらははげてはしるに扇なとおとしてうちとけたるは
いとおかしうみゆ そのつゝみてにけんし一とせふちつほの中

宮の御前に雪の山つくられたりしがはかなき事なれどゆへ
くしかりしとなに事につけてもいふかひありし御心をおし
みきこえ給ふ むらさきのゆへもこよなからすみえ給ふとめ

いにておはします事をたまふ 御かんざし おもやうたふ 33ウ
ふちつほにたかふ所なくおはす 月いよくすみのほりしつ

かにおもしろし やり水もいたふむせひてしほれたる前さい
の影心くるし

紫 こほりとちいしまの水もゆきなやみ空すむ月の影ぞなかる
をしのうちなきたるに池のこほりえもいはすすこし

源氏 かきつめてむかし恋しき雪も夜にあはれをそふるをしの
けんし けんし

一声 よるのおましにいり給てもかくれ給しふちつほの御事
をおもひ出つ御とのこもるにゆめともなく中宮ほのかにみ

え給へり いみしくうらみ給ふけしき」にてくるしきめをみ 34オ
るにつけてもつらしとのたまふ 物におそはる心ちしてむ

らさきにおこされてゆめにも御なみたなかれていでにけり い
まもいみしうぬらしそへ給ふ

源氏 とけてねぬね覚さひしき冬の夜にむすほれつる夢のみ
しかき けんし とくおき給ておたぎにしゆきやうし給ふ 御身つか

鳥へ野にて人そとぶらふ事也
らもあみた仏を心にかけてねんしたまふ しらぬせかひにお
はしますらんとまじりて御つみにもかはりきこえはやとおほ
すひとつ」はちすにとこそは

源氏 なき人をしたふ心にまかせても影みぬ水のせきやまとは
んとおほすぞうかりける

以上十三首

十六 乙 女

一年かはりて宮の御はてもすぎ世の中色あらたまれる衣かへ
のほとなども大かたの空のけしきも心ちよげなるにせんさい 前 齋

院 あさかほ也 るんはつれくとなかめおはします かも まつりの比はましてお

まへなるかつらの木 の 下風なつかしきにつけてもさふらふ人
くはおもひいつる事とあるに」まつりの日大殿よりぞいか

にのとやかにつれくにおほさるらんととふらひきこえ給へ けんし
りこそこのけふまてはとて

源氏 かけきやは川瀬の波もたちかはり君がみそぎの藤のやつ
れを 紫のかみのたてぶみにて藤の花に付給へり おりのあ

はれなれば返し

あさかほ 藤衣きしは昨日とおもふまに今日はみそぎの瀬にか
はる世を はかなくとはかりあるはなにおかしきふしもみ

えぬをいかなるにかをさかたらふこらんす 七 かくおほしめせ

れがのみすのうちよりこらんしけり すぢことなるましらひ

にてかんだちめなと上官の人をもきらひてませぬ也 (マ) からう

して御おぢの大將くわんじやの君にさかつきさし給へはこ

のはかせともかめいてたり おしがいもとあるじははなは

だひじやうにはんべたうかくはかりのなにかしらをしらずし

てや大やけにつかふまつり給ふはなはだおこなりといふにみ

なわらひたり 又いふやうなりたかしなりやまんはなはだひ

じやうなり」ぎをひきてたちたうびはんべたうなどおどして

いふもおかし さるは物わらひすまじくすこししづまりたる

かきりをえりてへいじなどをとらせ給へるに夜にいらては

いとくけちゑんなるほかげにさるがうがましく物わひしかり

けり けんふくし給て大かくの君とも又くわじやの君とも

うちつゝきにうがくといふ物したまふ 大内記 いたらめてんな

にあづけてかくもんせさせたまつり給ふ 大内記 いたらめてんな

くかた〜にかよはしつゝよみたまふさま」つまじるしの心

ちし給ふ けんし

殿にもふみつくることしけし はかせのみちよりなりいて

給へる人〜はしたりかほにうちほをゑみてかゝるかたを心

さしたまへるがいみしき事と申たまふ あざなつくりし夜の

詩ともにはたかきいへの子としてせけんゑいぐわをほこり

心さしのすくれたる事をよろつ物の物によそへなぞらへてつくれ

るくともいとめてたくもろ」こしにももてわたりつたへつへ

きふみともになんそのころの世にはゆずりける こぞりてと

夜みじかき比にて明はてゝぞかうずる いふ心也 左中弁かうじ仕たり

かたちきよける人のたけだち物〜しくこはつかひかみさ

びてよみあげたるいとおもしろし けんしのおとどの御はの詩

也事 ましておやめきあはれなる事おほし

大かくの君 大かた心さまうるはしくおはする君にてつとこもりゐて師

も弟子もはげみてならひ給ほとにたゝ四月五月ぎにしきとい

ふ物はよみ」はて給へり いまは又れうしきうけたまはん事

をはげみ給 御門の御まへにてはかせともまいりつどひてか

へさぶべき所々をうちならしに源氏の御まへにて御師の大な

いきをめしてよませたまつり給ふ かへさぶべきとはなんじ

御門の御せん てことをみかくへき事也

にての事也 大うちに大かくといふかくもん

一 すでに大学にまいり給ふには 所あり 博士は是へ出仕申也

それへまいる門をもう門と 云也 れうしきの時あくる也 濱門にかんたちめの御車ともさ

しつどひ大かた二なくもてかしづかれていつかれいり給へる

くわしやの君の御」すかたうつくしうきひはににげにかゝる

まじらひにはたえすけたかし れいのはかせともぎにつきて

く／＼になんじてよしあしをみがくなり されとおくせずみか
との御前にてよみはて給へり 大やけの御ことはにさはかり
にてさふらへあはれ大やけのてうのたからやとおほせらるゝ
此御詞をうくる也

ときよすぎず也かくもんの
事是まで也

一 かくてこのまきにきさきみ給へきをさい宮の女御むめつほ
こそうす雲の女院も御門の「御うしろみとのたまひしかはと
源氏のおとゝもおもむけ給へり 又こしうとの大しやうのむ
すめこうきてんはせいの人もあは也 人よりさきにまいり給にし
かはなんとつき／＼しくそのかたの人は申させ給ふ 又むら
さきの御いもうとせんていのしきふ聊の宮の御むすめもま
り給へり これこそは又うすくもの女院の御めいなれは御お
ばささきのかはりにととり／＼におほしあらそひたれとなを
むめつほみ給ぬ 御さひはひのひきたかへすくれ給へるを世
人おとろきさきこゆる」 源氏の内大臣太政大臣に御やしないの父なるゆへ也あがり給ふ

41ウ

左大将ない大しんになり給ふ けんしより又せつしやうゆつ
り申給へはよの中こしうとのまつりことはうちのおとゞしたまふ さ
かきこしうとにありしぬんふたぎにはまけ給しかとがくもんをたてゝ
し給しかは大やけ事はかしこくおはしましけりむめつほあき
このむ后也

一 源氏には御子すくなくまします ことうとの大将にははら
／＼に御子おほくてひめきみはたごうきてんの女御といま
ひとりほかばらの御むすめもち給 其の御むすめのはゝ君

は「こじうとの大将にははなれていまはあんしちの大なこん
といふ人のかたに北のかたにてまゝちの事すみ給けりのちのおやにゆづらんはあいな
しとてとりはなちてうばの大みやにあづけきこえ給へり 此
大学の君とおなしやうにうはやしなひにておいたち給へり
をの／＼十にあまり給へは御かたことにして大かくの君をほ
したしなからおのこにはうちとくまじきものとちゝ大将おほ
せられてこのねをたに大学の君にはきかせじとひめ君をか
くし給けり おさなき心に「かたみにおもひかはしてよそ
／＼にがくもんのほとはおとこ君はこれをぞしつ心なくもの
おもひにおほしける かたよりたる御てとものおいさきしる
きにてかきかはしたまへるふみの心おさなくてちるおりもあ
れは女房の中にはこのふたりの御中をほの／＼しるもありけ
り 大みやもいかてしり給へき ちゝおとゝの御心はまして
わつらはしければみな見かくしたり

一 あるときうちの大臣御はゝ大宮の御かたへまいり給へり

時雨うちして萩の上風もたゝならぬ」夕暮なり 引歌 秋はな
を夕ま 43オ

くれこそたゝならねおきのう ひめ君うつくしくおいたち給へ
は風萩の下露と云歌の心也 大宮の御かたへわたしたてまつりて御琴ひかせたてまつ
り給ふ ちいさきほとにさしやりてひき給 御ぐしのかゝり
とりゆのてつきいとうつくしうつくりたらんものゝやうなり
御ちゝうちのおとゝいとらうたしとおほす おとゝもわこん
引よせてりつのしらへいとゝおもしろくさる上ずのみたれて
かひゝき給へるはたとへんかたなし」 大みやはよろづの物

43ウ

の上すにおほしませはひわをめてたく引給 御まゑのこすゑ
ほろくとのこらぬにおいごたちども御ひやうぶのうしろな
とにかしらをつどへたり おとど秋風楽しうふうらくかきあはせて

しやうがし給へるいとおもしろくさまく大みやはおとまを
もうつくしとおもひきこえ給へるにいと御心そへんとにや
くわしやの君まいり給へり こなたにをどて御木帳引へたて
(マ)

大かくに

いれたてまつり給 おとま御ふえをたてまつりて時くは
ことわざし給へ箇の音にもふる事はつたはるもの也とてふ

44オ

えたてまつり給へはいとつくくわかきねふきたてめて
たければこともの音はやめておとましくびやうしおどろ
くしからずうちならして萩が花ずりなとうたひたまふ け

んしの大臣もかやうの御あそひに御心いりてむつかしきまつ
りことをはのかれ給ふなりけり けにこそあちきなき世に心
のかきりゆくわざをしてすこさまほしけれなどの給 御ゆづ

44ウ

けくだ物なとたれもくまいりすさひてひめ君をはあなた
の御かたへわたし給 しめてけとをくもてなしきこえ給をい
とほしき事あるへき世かなと大みやの御かたのねび人ともを
のがどちさゝめきけり 子をしる事なんといふはひか事なめ

りとぞつきしろふや 人をさして心へ おとまやをらかいほそり
ていてさまにこの事をたちきし給へり 道すからおほしつ

ぐるにされはよおもひよらぬ事にはあらぬをうちたゆみて
ゆだんし世はうき物にもありけるかなとけしきを「つぶく
たる事也 世はうき物にもありけるかなとけしきを」つぶく
と心へ給ぬ このおとまの御心はすこしあさやぎ給へる人に

45オ

てしつめかたければ二日はかりありてまいり給へり 大みや
御心ゆきうれしくおほせはうるはしき御こうちきたてまつり

かへ御あまひだい引つくるひて子なからはつかしくおほする
御人ざまなれはまほならずみえたまふ うちのおとま御けし
きあしうてかやうにてさふらふも人くいかに見侍らんと心
をかれ侍りかうまでもきこえじとおもひ侍れどいとしつめか

(マ)

45ウ

たくてなんとて「なみたををしのかひ給ふ 大宮いとあまし
くて御かほの色もたがひ御めもおうきに成ぬ いかなる事に
てかひまさらのよはひのすゑに心をはをき給らんとしたまふ
もいとをしけれどしらせ給ぬ事を大かくはかなしうしたま
ふ御まこにていさめ給ぬぞとおほすにいとつらくてさまく

にうらみ申てたち給ぬ ひと夜のしりうことの人くほのき
ゝてなにしかかゝるむつ物かたりをしけんと心ちもまとひぬ
おとまひめ君の御かたをさしのそき給へればなに心なくて
おはするをいとくちをしとみ給 御あねのこうきてんは秋こ
のむ中宮におされてきさきにたち給はねはこの君の御かたち

46オ

もうつくしげなれば春宮へまいらせんとおもひたち給へるに
今上

(マ)

あしき事にはあらねとしたしむつひとかいとねちけたる事な
りと人きくをくちをしようおほして御めのとともをしのひてさ
いなみ給ふりむつひとたまふ ねちけたるはへたげ也 うちの
おとまへむかへとらんと給て帰給ぬ かゝる事もしらすく

わしやの君まいり給へり 大宮「れいはいせひしらすうちゑみ
てまぢよろこひ給をまめだち給て まめだつとはまことしき体也
まゆをひそむると替たり

45ウ

大宮

御ことによりうちのおとどゑんじていて給にしこそ心くるし
けれめつらしけなき事をしもおもひそめ給て人に物おもはせ
給へき事との給へは心にかゝる事のすぢにてふとおもひより
ぬ^(マ) おもてあかみてたち給 むねつふれてふみかきてもち給
へれど人にもえあはずかの御かたへもえゆかず夜ふくるほと
にしひてひめ君の御かたへおはしてたちき^(マ)給へとれいな
らすつと」さしかためて人をともせず 心ほそくてしやうじ

つらにより居給へるにひめ君もめをさましてかりのなきてわ
たるに雲井の雁も我がごとやとひとりこちたまふ引歌^(マ)雲井^{霧ふか}

のかりもわかごとやはらせすもの^(マ) 大学の君いと心もとなけれ
ゝかなしがるらんと云歌の心也 大学の君いと心もとなけれ

はこしうとの君やさふらひ給ふこゝあけ給へとの給ふ ひめ
君はひとりごとをき^(マ)給けんもはつかしくてあいなく御かほ
も引れ給へどあはれはしらぬにしもあらぬぞにくきや 御

めのとともちかく」ふしてうちみしろくもくるしければかた⁴⁷
みにをともせず

大学の

君 さ夜なかに友よびわたるかりかねにうたて吹そふ荻の
上風 身にもしみけるかなと思つゝけて大宮の御かたに帰り

ふし給へれどもし御めさめてやき^(マ)給らんとつゝまし つね
ふとふたがりて物よむ心もそらになかめられたまふ

一 ほとともなくおとどむかへに御車三しておはしたり 大宮い
とあへなしとつらくおほす ひとりものせられしおんな子の^{あふひの事}
なく成にしちさひしきにこの君をえてうれしくいけるかき

り」のかしつき人とおもひしをわたり給なはさうくしくも⁴⁸

あるへきかなとおほす^{大みや} ひめ君のかたへわたりてみえ給へお
とゝこそうらもし給はめ君はさりとも心さしのほともおもひ
しり給らんときこえ給へり いたうつくしけに引つろくひて
わたり給へり 十四になんおはしける大みやの御心のはつか
しければかほもたげ給はずたゞなきになき給ふ くわしや
の君ものうしろにかくれるてみたまふ 人のおもはん事も^(マ)

よのつねなる時こそありけれ心ほそくてなみたをしの」のご⁴⁸
ひつゝおはするを御めのとみたてまつりていと心くるしけれ

は夕くれの人のまよひに大宮にとかくたばかりきこえてひや
うぶのもとにしひてたいめんせさせ給へり たがひに物は

つかしうて物もきこえやらでなきたまふ ひめ君の御めのと
そのけしきをみてこの御びやうふのうしろにしもひめ君をも
とめきてあな心つきなやげに大みやしらせ給はぬ事にはあら

ざりけりいみしくともものゝはじめの六位しゆくせよとつお
やくをおとこ君われをは位なし」とてかくはしたなむるなり^{夕きり}

けりとおほすに世の中もなへてうらめしくあはれもすこしは
さむる心ちしてかれき^(マ)給へとて

大学 くれなるの涙にふかき袖の色をあさみどりとやいひしほ
るへきとの給へは

ひめ君 色く身にうきほととのしらるゝはいかにそめける中
の衣ぞ といひもあへすおとゝのをとすればわりなくてわた
り給ぬ^{大かく} たちとまりたる心もいと人わろくてあけぬれどなき

はれたるまみを人に見えんもはつかしくてかく」もんの所へ
あかつきにいて給ふ まだくらかりけり

大学 霜こほりうたてむすべるあけぐれの空かきくらしふるな
みたかなにくもるの雁といへり 系図には三条のうへとあり

一 ことは五節いつよりもとくいてきたるとしなり 大返し

よりもまい姫たてまつり給 そのまい姫はこれみつのあそん
のむすめ也 舞ならはしなとはさにてしたてよその日のく
れにけんしの御方へまいりたり つまどのまにひやうぶたて
よかしつきおろしたり くわしやの君は心もやなぐさむとま
きれありき給ふ まい姫をさしのそぎ」給へればおうきさの
ほとなとたよかの雲みのかりのおなしほとなればなつかしく
心うつるとはなけれともきぬのすそを引て

大学 あめにますとよをか姫のまい人も我心ざすしめをわす
るな とよみ給へれと物むつかしとおもひて返事も申さすこ
の舞姫を人のほめのよしるにつけても心にかゝりて五節すぎ
てさにていてたるときおとうとのわらはてん上するをかたら
ひて御文つかはす

大学 日影にもしるかりけめやおとめこか「あまの羽そてにか
けし心は このときのまい姫はみな大内にとよめられ申てみ
やつかへ申たり このこれみつの朝臣のむすめもやかてみや
つかへにてのちにないしの介になる つみに夕きりの御おも
ひ人にてきんたちあまたうみたりけり

一 けんしの大殿は五節の舞姫ともとりよなるを御らんする

にもいにしへ御めとまりし日影のおりおほしいでられてたつ
の日の暮つかたつかはす御文の内おもひやるへし

源氏 乙女子もかみさびぬらんあまつ袖」ふるき世の友よはひ
へぬれば かやうに御文つかはす 御おもひ人の五節はすま
にてちよの大式にぐしてつくしよりのほりし女也 此御返事
をあをずりのかみをよくもとりあへてこそみうすよみにかき
まさらはしたるふてつかひも人のほどにあはすれはくちをし
からすとけんし御心にほめておほしけり 御返

五節の君 かけていへはけふの事とそおもほゆる日かけのしも
の袖にとけしも 五節の舞姫にいてめる女をはいづくにもあ
れ五せちの君と」云也 とよのあかりあまの羽袖あをずり日
影をみ衣 すぐれも五節の付合也 かけていへとは
影をみ衣 そのおりの事をいひいづればと云也

一 大学の君はこの五節のときしやうそくの色ゆるされてしゆ
つしし給ふとはあさきをぬきてよのつねの殿上人のしやうそ
くなるへし

十日也 冷泉御あに
一 としかへりぬ きさらきに御門朱雀院へ行幸あり 花さか
りはまだしき比のおほえなれととくひらきたるさくらふた木
はかりありていとおもしろくみゆ 文のみちの人もとれいの
やうにはめされすたごそのころの世に名たかきがくしやう十
人」めしたり しきぶのつかさの心みの題をなぞらへて御た
出給 けんし 大かくの事也
いたまふ 大とのよ太郎君の心見たまはり給へきゆへなり
御門より
れいの楽の舟ともこぎまひててうしともそうするほど山風

ひゝきあひてそうでうふきてあなたうとあそひたまふ さい
はら也 楽にも舞にもあり なたうとかれたる木にも花さ
くととけるちかひはいまそしらるゝといふ事をうたふなるへ
し つきに桜人あそひたまふさくら人も楽あり 大学の君もこ

のうたづかきにましりてかくくるしからでもまじらひあそふ
へき身かと世の「中うらめしかりけり きうだいの人をえら
せ給しかとわつかに十人のかくしやうの中より三人はかり
そありける この大学のつくりたまへる詩ともすぐれたり

進士
ければしんじといふつかき給りぬ くれかゝるほとにうへに
御琴ともまいれり うちのおとゝ和ごん給て心ことなるしら

へをかきたて給へり 帥 そつのみやときこえしこの比兵部卿に
なり給へりしやうの御琴つかふまつりたまふ きんはれいの
けんし
大きおとゝ いつれもすぐれ給へるねのかきりとゝのへてめ

て「たうきこゆ御みきまいり御ゑいになりてしゆしやく院は
いにしへの花のえんのためひ出て又さはかりの事あらんやと
おほせらる てん上のわらはへまひつかうまつる みなくきや
うの御こと
ちなるへし
ちこ也

一 御かはらけまいるに

源氏 鶯のさへつるこゑはむかしにてむつれし花のかけそかは
れる あはれとおほさる

朱雀院 九重にかすみへたつるかきねにも春とつけくるうくひ

すの声ひやうふ卿の宮いまのうへに御かはらけまいりたまふ

兵部卿 いにしへをふきつたへたる笛竹に「さへつる鳥の音さ

53

へかはらぬ あさやかにそうしなし給ふ 御かはらけとはら
せ給て

御門 うくひすのむかしをこふるさへつりは木つたふ花の色や
あせたる

一 かゝるつるてにこうきてんの大きききは御ひと所におはし

ませはうちすき給はん事はなすけなしとて御門かへ殿にわた
らせたまふ 桓殿也 そこを(をミセケチ)に御すまゐりける也
イ本にかへさどのにわたらせ給へりとあり たほんた
つぬ

し きさきまぢよろこひ給て御たいめんあり いといたふさ
だすぎ給へる御けはひにも御門「はこみやをおもひ出きこえ
給とは 御はゝふちつは
の中宮の御事也 かやうにながくおはしますたぐひも

ありけるをとくちをしうあはれにおほしいづ けんし
御とも
に さふらへ給へは又ことさらにと心しつかならずたちかへり給

ひゝきにもこうきてんは御心うちさはきていかおほしいつ
らん 冷泉 かう世をたもち給へき御ひかりはけたれぬものなりけ

りといにしへをくひおほしけり 大后 おいもておはするまゝにさ

がなさもまさり給て朱雀院はいとくらべくるしうたえかたく
そおもひきこえさせ給ける「きさききの御ふんのつかさかうぶ
なにかや也
りなにくれの御心かなはぬときぞいのちなかくてかゝる世
のすゑをみるがいみしき事とおほしいかりける

一 先帝のしきふ卿の宮うすくもの御あにむらさ
きのうへには御ちゝ也 明年也
あけんとしるそ

54

ちにてり給はん御賀の事むらさきたいのうへおほしまうく 大殿けんしもけ

にこれはみすぐしかたき事なりとのたまひてなへてならはぬ
(マ)も 御よをとと也 れの五十寺の御いのり経ほとけの御いとな

みはかりをぞたいのうへはせさせ給ふ おほきなる世のひま
き御賀也 しきふ卿の宮二つたへきま給てとしころなべての世
にはあまねきけんしの御心なれともあやにくにこのしきふ卿

の宮をはなけんしさけなくみや人にも御よういなきをいにしへつら
しとおほしをく事もこそありけめといとをししくもからくもお

もひしをむらさきのうへのけんしの北のかたあまたものし給
ふ中にすくれたる御心さしにて世にも心にくまめてたきさい
わひ人のためしにいはれ給をわがいへまではにほひこねどこ

よなくめいほくとおもふを又かくこの御としみ事を世をひま
かしていと」なみ給はおほえぬ世のすゑのひかりにもあるへ
きかなとの給をむらさきの御まゝはまの大きたのかたはいと

心もゆかずものしとおほしたり
一 源氏の大殿は六条京極わたりに秋このむ中宮の御ふるみや

のあとやまをこめてつくらせたまふ 春夏秋冬をは心く
八町にねかひにしたかひてすませきこえたまふ 又そのあはひ

くにもさるへきかたくは住給けり

一 春はたつみの町春の御かたとも又みなみのおとともいへ
り たいをへたてゝけんしと」むらさきとすみ給

をしめ給へはそのまちにすみ給へし 御すまは池のさまゆ
けんしも

ろき也
をひかにゆをびかの事わかむら 山には色くの花の木ともを

うへつくし御まへちかき前さいには五ようこうはい藤やまふ
き岩つゝしやうの春の物をたてうへつゝ夏秋の草花はむら

くほのかにませたり

一 夏はうしとらの町北ひんかしなればひんかしのおととも
いへり 二条のひんかしのるんにおはします花ちるさとの御

かた住給御すま」るはずしげなるいづみありて夏かげによ
れり 山にはかしは木若かやでむかしおほゆる花橘なんとう
へしげらせて卯花のさくへきかきねことさらにしわたしまへち

かき前さいにくれ竹うへて下風すししかるへくしやうひほた
んなてしこやうのくさ花をとりたてうへて春秋のせんさい
は所くにしたり池のしりにしやうぶうへしげらせ五月さの御

あそひ所にしてみまやともには世になき上めともとのへた
てさせ給へり ちちゆわれたり」

一 秋はひつしさるの町にしのおととも云やりて六条の御息
所の住給しあと也これは故先坊のつたへにやとみゆ 時く

ささきのうちよりさといてし給ふ時の御すまみなり さはい
へどけたかくよそをしきみかきしつらひ給へり もとありけ

るいけ山をもひんなき所をはくづしうめていつみゆたかにす
ましやりたきをして岩ともたてくわへて水こゑまさるべ

くしなし給へり 山には紅葉の色こかるべきをうへつくし御
まへの前さいは秋の野」をはるかにつくりたるさかりにみた
れつゝそのころにあひておもしろく嵯峨の大井のわたりの野

も山もともなうつされたる秋也 むしともはなちてなきみた

れたる夕くれなとは心もあくがるゝやうにすこくあはれなり

一 冬はいぬの町大井にすみたまふ あかしのうへをうつろ

はしたてまつり給ふ にしのきたなれば北のおとゝともいへ

り 御すまる松の木こふかく山さよめきてへたてのかきにか

ら竹うへつゝ雪をもてあそばんたよりによせたり」 冬のは

じめあさ霜えんにむすふへき菊のまがきわれはがほなるはゝ

そ原なとゝおさゝ名をもしらぬみ山木どもの木ふかくおも

しろきをうへ給へり このあはひにはへいどもらうわたどの

をつづけてけちかくおもしろくしなし給へり みくらまちは

はわけてつくられたり なか月になればもみちむらゝ色付

てにしのおまへえもいはすおもしろし 中宮この比さとお

はします むらさきは御やしない母なれば御中らいたのもし

けなり」

一 風すこし吹たる夕暮にもみちつたなどのちりしきてにしき

とみゆるをはこのふたにひろい入てあき好中宮よりむらさき

の御かたへ春をおとしめて御せうそこあり 大きらかなるう

女 大内也 へ童のさる所にさふらひなれたるはもてなしけはひもさはい

へどことなり 紅葉がさねのからきぬおみなへしのかざみし

をん色のあさめなんとみだれきてそりはしわた殿をさまよき也

わたりつゝもてまいれり もみちかさねはこくうすく紅にてもん

さき也すわち色といふ うす紫をいへりをみなへしはたて

もよきよこはまなり」もんはなにこも色をもちるたり 御文

59オ

には秋をほめて

秋好中宮 心から春まつそのは我やとの紅葉を風のつてにたに

みよ わかき人女也御使もてはやすけしきおかし 御返はこ

のはこのふたにこけしき岩の心はえして五よの枝に付給へ

り秋をおとしめて

紫の上 風にちるもみちはかけじ春の色をいつ葉の松につけて

こそみめ この岩ねの松もこまかにみればえならぬ御つくり

事」ともなるへし よくもとりあへ給ふ心ばやさかななど秋

のまちの女房ともめであへり 御使のかづけ物ほもみちがさ

ねほそながそへたる女のしやうそくなり 女のしやうそくといふ

衣なり キ又 ひとへとはうちき(旁注「打着ハ」)などよりちいさくて

はだにめす物也 ほそなからはから物なり 天人のあまの羽衣(濁点

アリ)をままびて(ママ)(旁注「しやうそくの上に」)左右の袖へ

うちかけてちやくしたまふ 女はかりの物なるを男のろくにもしせ

んけつこうのときは

そへ給ふとみえたり

源氏のおとゝ御らんしてこの御せうそこいとねたげなめりこ

の比もみちをいひくたさんは「たつた姫うしとおもひぬへし

たちしぞきて花のかけにたちかくれてこそつよきこと葉はい

てこめとのたまふ 人のおやげなき御あらそひ心なんめりと

ほんにあり

一 大学の君この巻に侍従になり給ぬ ひめ君の事わするくもぬのかり

なければちちおとゞのせちにまほり給がつけられは御文はか

一 六条の院の御殿うつりは八月のひかんどもむらさきのうへ
御車十五四る五位の殿上人仕 その夜夏の御かたそひてわた
り給ふ 以上十六首」

60ウ

光源氏一部詩 第六 (外題) (表紙)

(目次)

十七 玉鬘

并 初音

胡蝶

螢

常夏

篝火

野分

御幸

藤袴

楨柱

(本文)

十七 玉鬘

鬘

十七年になる事をこの巻のはしめにはかきたり

「(扉裏)

1ウ

一 とし月へたよりぬれどあかざりし夕かほの事露わすれたま
はず 心々なる人のありさまを見給ひかさぬるに付てもあ
らましかはとのみ哀にくちおしうおほしいつ 引哥世の中
あらましかはとおもふ人なきはおほくも成にけるかなと云哥
の心也 源氏の御心の中にあかし夕かほをのうへはかりのおほえには
なとかとおほすにもいとくちおしうこの御殿うつりのかずに

もあらましかはとおほしけり」

2オ

一 うこんをはなをそのかたみとみたまひてらうたき物におほしたり いまはむらさきの御かたにそさふらひける いとおしき也

一 かのにしの京のめのもとなりけるひめ君は、君はゆくゑもしらずなり給にしかはゆふかほは 夕かほのうへのめのと也 玉かつら 夕かほの事

源氏にいぎなはれてなにかしの院にてうせにし事をにしの京又夕かほの五条の宿などの人へはゆめにもしらざりけり行えなしといふはそのゆへ也 玉

にしの京の夕かほのめのとのおとこつくしの少武になりてくたる事このひめきみの四つのとしなり は夕かほは三歳のとき行えなく」なり給しなり はしめ とうの中將の北のかたなりし

事をけんしきゝ給へはその事あらはさじとてうこんをはふる里へけんしやり給はねはにしの京には行えをしらぬ也 ちゝ

こしうと 玉かつら おとゝにしらせたてまつらん事いとけなくおはするほどはうしろめたければつくしへぐそくし申けり おさなき心にはゝの御事をわすれずしておりゝははゝの御もとへゆくかとと

ひ給につけてもなみたたゆる時なく思こがるゝを船道ゆゝしと也 いまく とかつはいさめけり 少武の」

あね女 ふな人もたれをこふとかおほしまのうらかなしけにこゑのきこゆる かこの事也 ふなこともあらゝしきこゑにてうらかなし

くもとをく来にけるかなとうたふを聞てよめり

3オ

いもう と女 こし方も行えもしらぬおきに出て哀いつちと君をこふらし つくし也 ヒ かしこにいたりつきてはましてはるかなるほどにて恋

しのひけり 少武にんはてゝのほりなんとするほどにおもきやまひしてかしこにてしなんとする心にも姫君の十はかりにもなり給ふかたのうつくしくあたらしきをわれさへうちす

てたてまつらん」がかなしきを子ともにいひをさけり かま へて京にあげたてまつりてちゝおとゝにしらせたてまつれ我

か身のけうをはなとなみそとなんいひをさける 少武うせてのちかくの給ひし物をといへど京の事はいやとをさがる 年三 かゝるほとにこのひめ君廿はかりになり給へは身をうき物に

おほしてねんさうなとおこなひ給ふ そのあたりにもすこし も心あるいなか人はまづこの少武のむまこを まこ也 男なり たかき人のむす

はでむまこのかしつくへき めとはわきとい ゆへあるとひろうしたり 心かけてをとつれくるもむつかしき ほと也」

一 このすむ所をはひせんのかにとなんいひける ならひにひ 後の国といふにたいふのしやうげんとていきをひいかめしき おイ

つわ物あり は むくつけき心の中にいさゝかすきたる心まじ。 り てかたちあらん女をつどへてみんとおもひたり このひめ君

にはかたはありとむつかしきにひろうしたる事也 しやうげんが かつたよりはいかやうのかたはありともわれはみかくしてまた

らんといひかゝるをいとむつかしとおもへり この少武に男 子三人あり 太郎 ぶんこの介也 太郎 次郎と三郎と也 又むすめ三人

4オ

あり あねおもととは「つくしにるひひろくなりてありつきに 4 ッ

たり 中むすめは五条の夕かほのやとのあるしやうめいの介か妻也 いもうとはもとはあてきといひしをいまは兵部の君といひてひめ君にそひきこえたり かゝるほとにこのしやう

げんこのいへの次郎と三郎とをかたらひとりてをおきへて也してこの國にこゑぎぬ 心をやぶらじとておばおとゞいであひたり とは

うば也 夕かほの上のめのとなれば玉かつらのためはうばめとなり さるほとにおばおとゞとほんにあり

一 しやうげんいふやういかなるかたはにて天下にあしをれめつふれ給へりともなにかしはみかくして「もたらん國のうち

の神ほとけはみなをのれになんひき給ふなんとほこりゐたり いてゝ行きはにひさしくあんして 5 ヲ

しやう 君にもし心たがはゝ松浦なるかゝみの神もかけてちかはん この和哥はつかふまつりたりとなんおもふとうちゑみ

たるもにつかざうゑしげ也 返事をむすめともによます

れはまろらはまして物もおほえずとてゐたればうち思けるまゝにおばおとゞよみたり

返し としをへていのる心のかかひなはかゝみの「神をつらし 5 ヲ

とやみん とわなゝかしいでたるをしやうげんこはいかにおほせらるゝ事そとてよりきたるけはいにおびへてうばめのことろもなく

なりぬ むすめともさはいへど心つよくわらひてこのひめ君のかたはにおはする事を神かけてほれゝしくよみたるぞと

ときてきかすればしやうげんはをいさりゝとうなつきて

時^イ いまはとあうさる事ありとりやうじやうしたる心也 このつわ物は

はひこに帰て四月十日ころにむかへとらんとといへばせんかたなくてひめ君いのちもいきたらじとなげき給へはうはめのもめのとこのひやうぶ」の君もいとをしきてぶんごの介をせ

めければめこそすてゝはや舟といふ物をかまへてよるにげいてゝひめ君とおばおとゞとぶんごのすけいもうと一人と四人

舟のりてにげのほる 二郎ががたらひとられたるもおそろしければかくにけぬるよしきゝてまげじだましゐるをひきな

ん事をおちをおイそれたり かいぞくの舟にやあらんちいさき舟のとぶやうにてくるといふ人あり ぬす人のひたふる心なら

んよりもかのおにしき人のをひくるにやとおもふにかなし」ひめ君 行ききもみえぬなみちにふなでして風にまかする身こ

そうきたれとてうつぶしゝ給へり ひゞきのなだちかしめのと うき事にむねのみさはぐひゞきにはひゞきのなだち

はらざりけり ひやう うき鳴をこぎはなれてもゆくかたやいつことまりとし

らずもあるかな 川しりといふ所ちかつきぬといふにぞすこしいきいづる心ちする つくしに心のとまる事はあねおもと

むすめの事也 姉許 あねのひとりとまりたるとまつらの宮のまへのなぎさ」行すぐる

なん心とまりてかへりみせられける れいのふなことものからとまりより川しりをす程ほとうたふ声さへあはれなりけり

ふんこの介なつかしうたひすさみてこのちのせいしをはむ (ママ) 7 ヲ

なしくすてつとうたふにけにとしころしたがりひきぬる人にも

ひやうふの君

にはかにわかぬる事よと心しつまりてぞおもひ出けるいふ
はひやうふの君かおとこ
をすてゝまいりたる事也
こちのせいし胡のちのせいし也 つ

くしの妻子の事をいへり 又いにしへせいしといふみめよき
女ありし心もあり

一 かくていそき京に入ぬれどちゝおとゝにもしられ「たてま
つるへきたよりもなし 九条にやとりたれば所からもいちめ
あき人の中にいふせくかなしくて秋にもなりぬ たのもし人
のふんごの介もたゝ水とりのくがにまとへる心ちしてさひし
くつれくゝなり 神ほとけこそよきかたにもみちひき給はめ
とて八わたへまうでさせたてまつる ほとけの中にははつせ
こそもろこしまてきこえありてしるし。ませとてわざとかち
あゆみにてまうでさせたてまつるにいとたへかたけれど人の
いふまゝにものおほえずしてあゆみ給ふ わかおや世にお
はし」まさば御かほみせ給へ又なくなり給へらばわれをもむ
かへとり給へとかなしさのまゝにねんしつゝ四日といふみの
時はかりにはつせのふもとなるつばいちといふ所につきぬ
あしもうごかねはやとりと。てやすみ給ふ所に又京よりとて
まいりたる人あり これもかちあゆみの女なり されどきよ
けなる男とおほくむま四つ五つひかせたり 家あるじのほ
うしはこゝにやどさまほしくおもひてかしらをかきありく

こしうとちじの内大臣

7ウ

このつくし人のやとをとり給へははらだつなりけり いとを
しけれどやとり」かへんもさまあしければへだてにひやうふ
たてせしやうなとまんまく也ひきへたてゝかたへはおくにも
かくしたり いまくる人もはつかしげもなくかひひそめたり
さるはよととも恋なくうこんなりけり

つくしのほりの初瀬まうであひやとりつくるは是也 是は中宿
つくへからず うこんは夕かほのうへになにかし
の院へそひたりしめのとこなり つばいち 付合

一 うこんこのはつせにたひゝまうづる心は年月にそへてい
かめしきけんしのおもとのみやつかへもふさはしからずおも
ふ 又ひめ君の御行えもきかまほしければ願なともたてゝま
うづるなりけり」 うこんこの中へだての屏風よりとなりを
のぞきてみるにかのぶんごのすけがかほみし心ちす 又三て
うとめしいづるしもづかへの女も夕かほの上の御かたにあり

心にあはぬ事也

し物也 むねつぶれて三てうをよばすれはおほえずこそあれ
つくしにはたとせへたるげすの身をたつね給へきみやこ人よ
人たがへにぞあるらんとてよりきたり うこん我かとしのほ
ともはつかしけれといますこしさしのぞけわれをのみしりた
りやとてかほをさしいでたり この三てう手をうちてあが
もとこそおはしけれ」うれしともうれしいつこよりまいり給
へるぞうへはおはしますかとてまづなく うこんは又うばめ
のとの事あてきといひし御めのとごの事をとふ 姫君の御事
はさためなき世にあやなくうせ給へるなとゝやいはんとおも
へはあやうくてとはさりけり この三条ひめ君もおとなにな

9ウ

あゆみにてまうでさせたてまつるにいとたへかたけれど人の
いふまゝにものおほえずしてあゆみ給ふ わかおや世にお
はし」まさば御かほみせ給へ又なくなり給へらばわれをもむ
かへとり給へとかなしさのまゝにねんしつゝ四日といふみの
時はかりにはつせのふもとなるつばいちといふ所につきぬ
あしもうごかねはやとりと。てやすみ給ふ所に又京よりとて
まいりたる人あり これもかちあゆみの女なり されどきよ
けなる男とおほくむま四つ五つひかせたり 家あるじのほ
うしはこゝにやどさまほしくおもひてかしらをかきありく

ひめ君

8ウ

夕かほ

9ウ

りてこれにおはしますといふにそうれしかりける このよし
うちへ入てつげたり つくしの人々夢の心ちもするかなとて
此中へたてのもとによりきてはつかしくへたてたりし屏風も
なこりなくとり」やりていひやりたる事はなくてなきかはす

10オ

にうこんいでやきこえてもかひなし御かたははやううせ給に
ぎといふまゝにいとむつかしく三人なからせきかねたり ひ
くれぬれはみあかしの事こゝにてとりしたゝめてみたうにま
いる みあかしの事とはいまのおはつをいふ事なり みあかしふみ

にてはなしわれも人もはつかしくもあらておりたちぬ いちめ

かさつほしやうそくはつくしの人の御ともの人くも也 いま中ゆい
といふをつほしやうそくと也 いやしきいちめあき人などの女のき
るかきのそうみやう也 夏より秋までさい京なればやつれたる躰也

一

御たうへまいる道にてうこんは人しれずめをとゝめて姫

10ウ

君をみるの中にうつくしきうしろでののしひとへめぐ物にき
いまのねり也
こめ給へるかみのすき影いとあたらしうつくしけなり こ

の君をもてわつらひてしよやおこなふほとにみたうにまうで
つきぬ 国くよりいなか人ともおほくまうでこみたり こ

の御つほねはにしのはしにとをきさうこんがつほねよりたつ
ねきこえてひとつにこもりたり いまそふんごのすけにかう

くゝの事といひあはせてをのこともをはとゝめてひめ君はか
りよひ申たり うこんはれいかたらひなれたる大とこよび

てみあかしふみしたためたり いつものりせさするふちは

口伝也

らのるり」君の御ため願をははし申へしよくかへり申給へ

11オ

その人なんこの比みつけたてまつりたるとうこんかたればほ
うしよろこひてたえすいのり申すしるしなりといふを姫君は
あはれときゝ給けり おとろくしきおこなひにひかされて
ほとけおかみたてまつる うこんはひめ君ちゝおとゝにしら

れ給やうにといのり申たり 明ぬれはしれる大とこの坊にお

りて物かたり心やすくとなるへし 秋風谷より吹のほりては

たさむくものあはれなる心の中ともかなし 此まへよりな
かるゝ水を「初瀬川とはいひけり ひめ君の御かたちをうこんめて

たしとみる

11ウ

右近 二もとの杉の木たちをたつねすはふる川のべに君をみま

しや うれしきせにもときこゆ 姫君はやつれ給へるかたち

をも御よそひもはつかしとおほす

姫君 はつせ川はやくの事はしらねともけふのあふせに身さへ

なかれぬ とうちなきておはするさまいとめやすし うこん

おもひのほかにたかきまじらひをしてけんしの御あたりちか

くつかへ又むらさきのうへあかしの姫君のおさなき御かたち

をもみたてまつるにさやうのうつくしきにもこのやつれ」た

る御かたちのおとらずみえ給はありかたき御事なり よしと

てもいたゝきをはなれたるきよらややおはするたゞこれをかた

ちよきとは申べきなりとほめたてまつるをつくしのうはめの

とはうれしとおもひてかやうなる御ありさまをあやしきせか
ひにおちふれ給ふべかりしかはおやこにもいへかまどにもわ
かれて京へあげたてまつりたるよししかたる そのかみよりけ

12オ

んしのこのひめ君をわれにゑさせよ夕かほの御かたみにみんよそなりし我が御むすめをたつねいてたると人にはしらせんとおほせらるゝ」なりとたのもしくかたりていづるとてかたみにやとりとひかはしてうこんが家は五条なれはひひ。たつきいてきぬる心ちしけり 大学の君此巻に中将也 かはすも

一 うこんはいそきて源氏のおとくにこのよし申さんとてまいりたり よへ里よりまうのほりたる上らうおほき中にとりわきてうこんとめしいつれはおもたしくおほゆ めんほくしき也 などか里おおい馬のわかやく事也

はひさしかりつるやもめ人のこまかへるやうもありかすとわらはせ給て御あしまいりにもうこんをめす わかき女はうまいれはたはふれ事けんしの給ひ」かくるをむつかしかりて御あしにもわが人たちはまいらねはとしへたるどちこそ心かはしてむつひよかりけれとのたまへはむらさきのうへとしへたるどちうちとけてもあやうくさるましき心とみねはなんとうこんにかたらひてわらひたまふ そのつゐてに姫君の事申いでたれはいとあはれなる事かなとなみたくみ給てさらはその人このわたりへわたさんまつふみたてまつりて御返事のけしきゆかしくおほさるゝなるへし 御しやうそくいろくたてまつれ給へり あるべかしく書給て」

源氏 しらすともたつねてしらんみしまよにおふるみぐりのすちはたえしを 君はかごとばかりにてもまこ。のおやの御あたりならばこそあらめしらぬ人にはいかと心くるしけにお

ほしたれどうこんきこえしらせてからのかみのかうはしきにかゝせ申す

一 姫君 かすならぬみぐりやなにのすちなれはうきにしもかくねをとゝめけん 御返しをけんし御らんしてすくれてはあらぬ御手なれどめやすきほとなれば御心おちぬてむらさきのうへにもいませむかしの夕かほの事なるとこまかにかたらひきこえ給

一 ひめ君のすみ給はんかたを御らんしめくらすに夏の御かた」のにしたいぶどのにてありけるをほかにうつつしてそれへむかへんとおほしてしつらひ給けり

一 文殿也ぶどのとあり ぶんとのとよむへし人くは又御むすめとはしらてなにの人を又むかへ給らんむつかしきふる物あつかひかなといひあへり けんしは中将の君にもわか御むすめなりむつひよとのたまひてけり

一 この中将の君を夏は夏の御かたに御やしなひ子にきこえ付給へり はもなき物なれば大宮の御世ものこりすくなきにいまよりむつひ給へとのたまひあづけたり たゞけんしの御まゝなる御」心にて心うつくしう御しやうそくなともうしろみ給けり 御殿うつりの事なともこの中将とりもちてむらさきの御いきをひにおとらざりけり

一 けんし又このひめ君をも夏のにしのたいへむかへ給へは花ちるさとはあひずみにもいと心よくおはすればこれははゝなきむすめ也中将をきこえ付たりしにあしくやはあるこれをも

花ちる里

子にし給へとのたまへはうれしき事かなと申給けり

一 わらはしもづかへなともめあつめてしも月にそわたり給ける あやうす物なとはみなけんしよりぞ「まいりける うこんあれは人のいでたちなともいなかびすして御くるまみつしてわたり給へり おとゝやかてその夜に御たいめんありはしのかたなるおましにけんしつゝ給ておやのかほはゆかしき物ときくをさはおほさぬかとおほとなあふらすこしちかくなして木帳をしやり給へはいとはつかしくくるしくてう

ちうつぶぎておはするやうだいいとめやすし けんし としころ御行えをしらておほつかなかりし事なとこまやかにのたまひてお

やこのちぎりのかくへたゝる事はあらじ物を契つらくもあり「けるかなとのたまへは姫君あしたゝずしづみ侍りしのかなに事もあるかなきかになんといらへ給へる御こゑぞいにしへの夕かほにてわかびたりける心ばえいふかひなくはあらぬ御いらへとおほす

一 たいへわたり給てけんしはめやすくおはする心やすきをむらさきのうへにのたまはせていかでこのよし人にしらせてす

き物どもに心つくさせんかゝるむすめなどのくさわひなきゆ

けんしの御もとの事

へにこのわたりを人のすさましくおもふもほいなきにいといたふもてなして人のふみなどもあつめてみんと給けり

一 むかしの夕かほの事あはれにおほしいてゝ

源氏 恋わたる身はそれながら玉かつらいかなるすぢをたつね

16

15

きぬらん この哥ゆへ巻をも玉かつらひめ君をも玉鬘と糸図あり

一 この巻のすゑにきぬくばりといふ事あり としのくれになりてかなたこなたのうち殿なんとよりあやうす物おりいだしそめつくしてもまいりたる色／＼をけんしの御まへにておとなしき上らうともとりちらしてこれはかれはときこゆ紫の御かたにせさせたまへるをもみなとうでさせ給」 けんし 御かたのみくしげとのゝでうしたるもみなこらんしあはす 御櫛匣 したてたる也

むらさきはかやうの事さへらう／＼しくりやう／＼しよのつ

ねならぬ色あひをそめつけ給へり けんしありかたしとみ給けり かつ／＼へうらやみなくたてまつるへきよしけんしの給へはむらさきのうへも見給ていづれもおとらぬ物ともなるをき給はん人のかたちにおもひよせてたてまつれ給へかしきたるものゝぬしにぬはひが／＼しとの給へはけんしうちわらひ給てつれなくて人のかたちをしはからんの御心なめりなさていづれ」をとかおほすとむらさきのをとひ申給へはむらさきそれもかゝみしてはいかゝはらはんとはぢしらひてのたまふ

一 こうはいのいともんうきたるにゑびぞめの御こうちぎいま

やう色のすくれたるをとは此御れうむらさきの御ため也 紫也

一 さくらほそながにつやゝかななるかいねりぐしてはあかしのひめ君の御れう 御むすめ也

一 あさはなだの かいをうきもんに おり おる ざまなまめかしけれどにほ

16

17

ひやかにはあらぬに紅也こぎ御ぞくして「花ちるさとの御れう 17ウ

くもりなくあかきやまふきのこうちきかさねてはいまの
ひめ君の御かたへたてまつり給ふ 玉かつらの御事也 むら
さきの上みぬやうにておほしあはするにうちのおとこの御か
たちのこしうとのちじ あなきよらとはみえなからけたかき所
のおとこの事也

のましらぬにたるなめりとげにぞをしはかられ給ふ いろ
にはいだし給はねととのみやりたまへるにしりめたゞなら
ず けんしこのかたちのよそへは人のはらたちぬべき事也よ
しとても物の色はかきりあり人のかたちのよきはそこひなき
物なりと」の給ふそこひなきはかきりなくふ
かき也一説そこるとも 18オ

やまふきのおり物をのおりやうなまめかしきからくさををみた
18オ

れをりたるも人しれすほをゑまれ給てすへつむ花の御かたへ
たてまつれ給へり みなその日にき給へきよしあり
いまのしめ

梅の折えたてう鳥ちがひからめいたるしろき御ぞにこぎつ
のこうはい也
やゝかなるかいねりぐしてあかしの御かたへたてまつれたま
ふ おもひやりけたかきをぞむらさきのうへはめさましよう御
らんしける 口伝

うつせみのあま君にくちなしの我か御れうなるに」をりさ
まなへてならぬふたあひのをり物ぐしてつかはし給へり 18ウ

みな御つかひのろくとも心く御返事もとりくなるに
すゑつむ花の御かたは二条のひんかしの院なればひきへたて

心ことなるへきをよのつねある事をはちかへたまはぬ中
くなる御心にてやまふきのこうちぎの袖ぐちすけたるを
うつをにてかけ給へり けんし御けしきあしければすべり
てまかでゝをのくはいみしくさゝめきわらひけり かたは
らいたくおはするさかしらにもちわつらひぬへくおほさる
御文に」

すゑ きてみればうらみられけりから衣かへしやりてん袖を
つむ ぬらして けんしいといたふほをゑみてとみにもうちをき給
はねはむらさき何事のあるにかとてみおこせ給へり 見給て
紫この御返しはきこえ給へかへしやりてんとあるを又こなた
よりをしかへし給はさらんはひがみたらんとむらさきの給へ
は

源氏 かへさんといふにつけてもかたしきの夜の衣をおもひこ
そやれ いと心やすげにすてかい給へり

以上十四首」

初音の巻にあやひこんきともとあり 非金錦は蜀江のに
しき也

十七 井 初 音

一 としたちかへるあしたの空なごりなくもらぬうらゝげさ
にはかすならぬかきねのうちたに雪まの草わかやかにいろづ
きわたりいつしかとけしきたつかすみこのめもうちけふり
をのつから人の心のひらかにそみゆるかし ましてたまを
しける御前けんしの庭よりはしめみがさまし給へる御かたの有

様まねびたてんもことの葉たる」まじうなん とりわき春の

20オ

御まへはむめのかほりもみすの内のほひにふきまがひてい

けるほとけの御国みかとおほゆ あしたのほとは人くまいる
こみて物さほかりけるをひるつかた御かたくめくり給

はんとて心ことにひきつくるひけしやうじ給へる御かたちこ

そけにみるかひあめれ わかき女房はみなひめ君の御かたへ

とかたちすぐれたるをえらせ給て春のうへの御かたはずこし

おとなびたるかきりかたちしやうそくよりはしめよしし

うもて付てこまかしこにむれるてはがためゆはひしても

ちひかみきをさへとりよせてちとせのかけにすむへきとしの

内のゆはひ事してそばれあへり おとよさしのそぎ給へれば

ふところて引なをしつゝはしたなきわざかなとわひあへり

けんしいとしたゝかなる身つからのゆはひ事ともかなすこし

きかせよやわれことぶきせんとのたまふ 祝言と書てことぶ

きなりくてんあり われはとおもひあがれる中將の君かねてそみ

ゆるなとこそかゞみの影にもかたらひ侍れわたくしのいのり

はなにはかりかはときこゆ」

けんし
一 けさこの人くのたはぶれかはしつるうらやましかりつる

にうへにはわれみせてまつらんとてゆはひ事きこえ給ふ

源氏 うすこほりとけぬるいけのかゝみには世にくもりなき影

ぞならへる 御返

紫 くもりなき池のかゝみに万代をすむへきかけそしるくみえ

ける なに事につけてもするとをかるへき御契をきこえかは

し給ふ

一 まつ御むすめのあかしのひめ君の御かたへわたらせ給へり

わかき女房とも御前の山の小松引」あそふ けふはねの日な

りけり けにちとせの春をかけてゆはゝんにことほりなる日

也 わかき人くの心はをき所なくおもしろげ也 ひめ君十

あまりになり給へともいまた三歳におはせしとき大井よりわ

たし給し時のまゝ御はゝあかしのの上には御たいめんもなけれ

はかやうにおなし六条の院のうちにおはしませとも心もとな

さはつきせぬ御事也 けんしもそれのみ心くるしくおほせと

人めにはむらさきの御子のやうにもてなし給ほとにかやうに

なん けさは」北のおとよよりいぬのまぢ北のおと

きひわりこひげごにかんしたちはなやうの物又五よりの松に

うつる鶯もおもふ心あらんかし 御文には

明石の上

とし月をまつにひかれてふる人に今日鶯のはつねきか

せよ この哥ゆへ巻を名付たり この鶯五よりの枝にすくいたる

に(二字ミセケテ)と云ほんもあり こといみといふは物ゆわひの事也

けんしのおとよ御覽してこといみもえし給はぬけしきなり

なき給ふ事也 おとよこの御返りはひめ君身つからきこえ給

へ初音おし給へきかたにもあらずと御すゝりなととりま

か)なひ給のまかなふとはそ ひめ君はいとうつくしけにてあさ

夕みたてまつる人たにあかぬ御ありさまいまてへたである

はつみへがましくおほしけり 御返

姫君 引わかれ年はふれとも鶯のすたちし松のねをわすれめや

とそあめる

21オ

20ウ

22ウ

22オ

一 けんしそれより夏の町花ちるさとのかたへおはしたれば時

ならぬけにやいめかしき事はなくて大かたあてにけたかしのどやか

にすみなし給へり きぬくはりの衣也 はなたはけににほひおほからぬあはひに

て御ぐしなともいたふさかり過にけり やさしきかたに「あ

らねとゑびかづらしてぞつくるひ給べき かつらかけたまへる

よせ詞也 わらはへのもつすゑびといふ物にかつらある也 けんし

の御心にわれならざらん人はみさめしぬへき御ありさまをか

くてみるこそうれしけれ心みじかくてわれにそむき給はまし

かはと御たいめんのおりくはまづ我か御心のながさも人の

御心のおもきをもあはれにおもふやうなりとみたてまつり給

ふ ふるとしの御物かたりなとこまやかにきこえ給ふ いま

はあなかちにちかやかにもみえたてまつり給はぬを御木帳へ

たてゝおはするをけんしをし」やり給へは又さておはず花ち

るさとの御心の事也

一 それよりにしのたいへわたり給へりとは玉かつらのひめ君

の事也 またすみつかぬほとよりはにぎやかにけはいおかし

く人かげあまたして花やかにすみなし給へり 五 しやうじみも

あなおかしげとふとみえてやまぶきにきぬくはりのもてはや

されてはなくとこまかしものきよけにみえたまふをいと

めてたくかくてみざらましかばとおほすにつけてもよその物

24 オ

なをおもふにへだよりおほくうつゝの心ちもし給はねはまさしむか

はぬ也 ならずもてなし給へる御かたちいとおかしけなり けんしか

くてみたてまつるこそほいかなふ心ちすれいまはつゝみなく

して むらさき 。あなたなどへもわたり給へうしろめたき心もたる人なき所

なりときこえ給へはひめ君たゞのたまはせんまゝにこそとの

たまふ さもある事そかし

一 暮かゝるほどにあかしの御かたへわたり給へり ちかきわ

たとのゝ戸をしあくるよりけはいけたかくみすの中のにほひ

くろはうにしみていとえん」なり あかし しやうしみはみえず けん

しいづらとみめぐらし給ふにすゝりのあたりにはぎはゝしくさ

うしともとりちらしてならひきよしある火おけに たきものゝ名也

らかして物ごとにしめたるにゑひかうのかのまがひたるいと

めてたしひおけはひとりくゝの御 うしの事也

まきゑらてん絵かき色くにしなしたり ほそくたかくしてそ

の中に火を物にうづみてすこしをかるゝ也かくもん所なとも

大とこ一人につゝまいるといへり

からのとう京錦ぎのはしきしたるしとねにおかしけなるきんを

きたり もろこしのひんかしの京の すゝりのあたりなるさう

しにあかしのうへ手習」したり事くしくさうがちにもかゝ

25 オ

にみなさんおはくちをしかるへくやかてへたてなくよのつねの

おやこのことくなる御もてなし」をおんな君はいとあやしく

24 オ

冬の方御 ぬつらしや花のねくらに木つたひて谷のふるすをとへ

みけるまゝにゆへあるふることなとかきませ

ずめやすきほどに書すましたり ひめ君 こ松の御返りをめつらしと

めつらしや花のねくらに木つたひて谷のふるすをとへ

る驚とあり 又さけるをかべに家しあれはなと引かへしなく
さめたるすちもあり 引哥梅の花さけるをかべにいへしあれ
はともしくもなし驚の声と云哥の心也

けんしふてさしぬらして書そへたまふ時あかしのうへはるぎ

りいてゝみつからのもてなしはさすかにかしこまりをきてい

とめやすきよういなり しろきにきぬくはりのかみのすこし

さはらかなるほどにおちたるはうすらかにかゝりてけたかく

なつかしければあたらしきとしのねたまるゝ事もやとつゝまし

けれとこよひはこなたにとまり給ぬ なをおほへえいことなりと

かたくに心をさ給ふへし 春のかたみなみのおとゝにはましてめさ

ましかる人くおほし 夜ふかくわたり給をかあかしくしもあるま

しき夜ふかさぞかしとなこりもたむらさきならすまちつけ給へるは

たなまけやけしとおほさるへきに心をかれてうたゝねをして

わかくしかりつるをなとかさしもおとろかし給はでと御 26オ

けしきとり給ふもおかしうみゆ むらさきことなる御いらへもなけれ

はわつらはしくてそらねをし給 けふはりんじやくの事に

まきはしてぞおもがくし給けるとあるはりんじの客人也

一 七日はうちのきしきをうつしてあを馬引かる よしふさの

おとゝなときこえしいにしへのれいなそらへていつかしき

心もてなしなり 御あそひありてひやうふのちにほたる卿の宮あをやし折

かへしうたひたまふ 御こゑいとおもしろし おとゝも御こ

ゑうちそへたまへり なに事にもさしくはへしたまふ御ひか
りにはやされてぞ色をもかますけぢめことにわかれけ
るなに事もきゝわかぬしづのをも御門のわたりひまなき馬車
のたちどにまじりてゑみさかへてきゝけり 26ウ

一 かくのゝしりたまふ事とも物をへたてきたまふ御かた

くははちすの中のせかひにいまたひらけさらん心もかくや

と心やまし 下品生也 ましてひんかしの院にはなれおは

します御かたくはとし月にそへてつれくのかすのみまさ

れと世のうきめえぬ山路におもひなそらへてつれなき人の

御心をはなにとかは思とがめ給へき その外の心もとなき

事はたなければかんなのがくもん心にいるゝ人はそのかたの

いとなみまんよう古今なと 又おこなひの人はまきれなくつとめ

てならひなといふ事もたゝその人の心のをきてにしたかひて

又まめくしきかたのねかひもそれにしたかひてをきて給へ

は心をやりてなん御かげにかくるゝ人おほかりける これは二

院の 事也 すこししつかになりぬるころこのみんのかたく御ら

んしわたさんとてけんしわたり給へり ひたちの宮の御かた

はすえつむ花也 これ人の御ほどあれはかろくししくはもて

なしきこえ給はす おんな君はいにしへさかりとみえ給し

御わがかみおとろへゆきたきのよどみはましてはつかしけな

り 御はなの色はかりそかすみにもまぎるまじうさしいでた

けんしたへかたのわざやおほさる くらぎ御あはせの

さびくしくはりたる一かさねにやなきのをりものゝ きはりの

しやう
そく也 御ぞをき給へればいとさむけに御こゑもうちわな
きつゝかたらしきこえ給をけんしみわつらひ給て御ぞものな
との事うしろみきこゆる人は侍りやかやうの心やすき御すま
るはうちふくみたるこそよけれうはへ」はかりのかざりはあ
ひなくなんと給へはさすかにこち／＼しくわらひ給てだい
御せうとのせんしの君也
ごの阿闍梨の君のあつかひし侍るとときぬどもゝえぬい侍ら
でなんかわきぬをさへこのあしやりにとられにしのちさむく
侍ときこえ給へはけんしあまりうちとけ過たりとおほせどこ
ゝにてはいとまめやかにてかわきぬはいとよし山ふしのみの
代ころもにゆつり給てあへなんとたまひてむかひの院の二
院おはすればあきところ也 みるあけさせてきぬあやな
とおほくたてまつれ給へり あれたる」所もなければとすみ給
はぬ御家は物さひしくて御庭の花はかりいとおもしろくこ
はいのさきいでたれば

源氏 古里の春の木すゑにたつねきて世のつねならぬ花をみる
かな

一 かくてうつせみのあま衣にもさしのぞき給へり つほねす
みにかごやかにしなしつゝ仏はかりに所えさせたまつりて
つとめたるさまあはれにみゆ あをにびの木帳にいたう居か
くれてほのみえたる袖ぐち心にくゝゆるし色ぐちなしのおり
物なときぬくはりの
しやうそく 尼なる事
さまかはれるしもなまめかしうき な 29
したり けんしの御ことはに松がうら嶋をはるかにおもひや

りてぞすぐすへかりけるとのたまふ

一 その外かた／＼にすみ給ふ人／＼にもみなさしのそきわた
し給ておほつかなき日数つものおり／＼あれど心にはさもお
もはずなん たゝながき世のわかれののみこそたれものがれぬ
わさなめれいのちそしらぬなんとなつかしうのたまひわたす
かやうの御なさけにかゝりておほくの人／＼年月ををくりけ
り

一 ことしはおとこたうかあり 正月十四日 うちより朱雀院に
まいりて後の宮の御かたなとめくるほどにあけ」かたになり
てそ此六条の院へはまいりたる 御かた／＼みな物見にわた
り給へり あかしの姫君の御かたへ紫の上ひとつにこらんし
ければそのしんでんへにしのたいの姫君もわたり給へれば御
たいめんありけり こなたは水むまやなれば事そがせ給へき
をれいのある事に事そへてもてはやさせ給ふ 影すさましき
あかつき月夜に雪はやゝふりつみてそゝろさむく竹川うたひ
てかよれるすかたともゑにもかきとゝめがたからんこそくち
おしけれ にほひもなくしろきわたかづき」わたししてまかつ
る人／＼をみれば殿の中將の君うちのおとゝのきんたちなり
かきしのわた付合なり いづくにてもわたをかつけらるゝ也
もてなしなき所を水むまやにてと云也

一 紫なにおもしろきふしもなし ことぶきのおこめいたるあ
りさまなとをかきやくこそにくけれ おとゝ日たかくおき給
て万歳楽御くちすさみにし給て御かた／＼の物見にわたり給
て夜あけはてにければえかへり給はでみなとゝまり給へるを
けんし 後宴
かゝるつゝてにわたくしのこゑあるへしとのたまはせて御

琴ともこんぢふくろに入てひめをかせたまへるをとりいて

をし」のこはせおどもとゝのへことぢたてなをしなとし給ふ

をきゝ給て御かたゝ心つかひし給ふとぞ

心のようい也

以上六首

同 井 小 蝶

一 やよひ廿日あまりの春の御前のありさまいつよりことにつくしてほふ花のいろ鳥の声も外のさにはまだふりぬにやとみえきこえていとおもしろし 山の木たち中嶋のわたり色

まさるこけのけしきなとわかき女房ははつかに心もとなくおもへるためからめいたる船つくらせたまへるをいそぎしやう

そかせ給て「おろしはじめ給日はうたづかきの人ゝめして船の乗せらる かちとりさほさすわらはへみなびんづらゆい

てもろこしめきたるしやうそくせさせて大きな池の中にさしいでたれはしらぬ国にきたらん心ちして心ほそくあはれなり

わかき女房の物めですへきをあまたこの舟にはのせ給へり

夏中宮の御かたひんかしのつり殿に秋の御かたのわかき人ゝをあつめさせ給へれば

秋このむ舟中宮の御かたの女房也 しやうそくかたちをとゝのへた

り 舟にのりたる人ゝは行かたも「かへらん空もおほえすして各々一首

名は 不知 風吹は波の花さへ色みゆるこや名にたてるやまふきの

さき

又 春の池やいての川瀬にかよふらんきしのやまふきそこもにほへり

又 春の日のうらまにさしてゆく舟はさほのしつくも花そちりける

又 かめのうへの山もたつねじふねのうちのおいせぬ名を

はこゝにのこさん かやうにはかなき事をいふに水鳥とものつがひをばなれすあそひつゝほそぎえたをくひてとびちが

ふさまをしのなみのあやにもんをましへたるなと物のゑやうにもかきとゝめかたからんこそくちをしけれ

皇 鹿章

にわうしやうと云楽いとおもしろくきこゆるに心にもあらずさしよせられてつり殿におりぬ こゝのしつらひめなれすな

まめかしきにかたゝの女房たちのつくしたるかたちしやうそくともは春のにしきこきませたるかすみのうちかとみえたり

秋好中宮の御かたのねうほうへはむらさきのうへよりさるへき」をくり物ともありけり 夜にいりぬればけんしの御前にて御あそひあり おりにあひたる物の音ふきたてゝいのちのふる御あそひなり

一 にしのたいのひめ君をけんしのおとゞもてかしつき給ふ御むすめときゝておもひもしるく心かけきこえ給ふ人ゝ

おほし 源氏の御おとゝと兵部卿の宮と申は年比の北のかたにをくれてこの三とせひとりすみにてわび給へはおりたちて

けしきばみきこえ給ふ おとゞしたにはおかしとおほせとも

わさとしらぬかほにもてなし給へりこよひ」も藤の花をかざ兵部卿の宮

していみしくなよびさうときまひたまふなよひはたをやか也 さうときはたはふれたり

けんしの御むすめはめいにてましますへければ

兵部卿 むらさきのゆへに心をしめたればふちに身なけん名や

はおしけき おなしかさしをて藤の花をけんしにたてまつ

られ給へはいといたふほをそみ給て

源氏 ふちに身をなげつべしやと此春は花のあたりをたちさら

でみゆよ

一 さるへき人は四きにあてゝいかめしきくどくの「事をせさ季

せ給ふ事なれば秋このむ中宮この六条の院の秋の町にてき季

御統 せ給ふ事なれば秋このむ中宮この六条の院の秋の町にてき季

みど経せさせ給けり 宮はこよひはこれにとまり給へり 又

わが方へまかでゝあすしゆつししたまふかんだちめなともお

はしけり 明日むまのときにはじまるべきにてけんしの大

臣をはしめたてまつりてみな中宮の御町の御座につき給 楽に

んのひらばりなとはうつされずたゝぞなたのらうわた殿をか

く所のきまにかりにあらともめしたり ひらばり 殿上

人たちはすのこにさふらひたまふ」

一 日もいとらゝかにあさほらけの鳥のさへつりもおもしろ

し 過しとしの秋はこのふたにもみちを秋の町よりたてまつ

れ給しねたさをいまた春のうへはおほさるへし いかてつみ

でもがなこの御返しを春の内にねたましきこえんとおほすに

御詠経はいとめてたきおりなれば仏に花たてまつりたまふと

34 オ

かこ付てうへ童を八人てうと鳥とにしやうそくしわけてれい

の舟に乗てたてまつり給へきなり

一 鳥のわらはにはしろかねの花がめにさくらさして鶯を付給

へり」

一 蝶のわらははともにはこかねの花かめにやまふきをさしてて

ふを付給へり れいの舟に乗て春の池より秋の御前のいけへ

出 風すこしふけはかめの桜うちちりてうくひすうらゝかな

るねにうちなく 御きやうのかたの楽所に鳥のかくをそうし

てきうなるほど池の水鳥もそこはかとなくさへつりてまこと

の極楽思やらる 舟さしよせて御使のわらはへみはしのもと

によりて花ともたてまつる ぎやうがうの人とてあかにくは

へたまふ

あかにくはへ(一字ミセケチ)うなとはもとよ ぎやうがうの人

り仏の御まへのたてまつれる花にそへられたり 行香と書也」

とは殿上人のうちに仏の御事につかふまつる人也 紫

花そのゝこてふをさへや下草に秋まつむしはうとくみるら

ん 秋このむ中宮御らんしてすぎしとしのもみち御せうそこ

の御返りなるへしとほをそみ給 けに春の色をはえおとしめ

給ふましきものなりけりと昨日つり殿へいでたりし女房とも

ゝ花におれつゝきこえあへり 宮のすけをはしめてわかき殿

上人たちろくの物とりつゝきてわらはへにたまふ

宮のすけとは中宮のすけ也 后にたち給へはすけ」大夫などの官

をも御門又春宮などのこくとくにめしつかふ也 わらへとは花の

使うへ童の少女也

35 ッ

34 ッ

蝶のわらはにはやまふきかさねのしやうそくをかつけ給へり
鶯のわらはにはさくらかさねなりけり わさとかねてしもま
うけたらんやうにとりあへ給へり 御返りは

秋好 小蝶にもさそはれなまし心ありて八重やまふきをへた
中宮 できりせは とあり かきりなき御口つきとも。かゝるおり

の哥はあはざめりとれいの作者ひはんあり
こてふの春のあそび又こてふの舟な遊付合心へ給へし以上

玉 たはふれ

一 にしのたいの姫君に人々御文しけうなるをおとゞおもひ

し事かなふとおほしてともすれば「わたり給て御らんしつゝ

さるへきには御返りすゝめておかしきほとにもてなし給 我

身さるへきほととおほさるゝ人こそ一ふてもほのめき給へい

ひよらんよすかなきわかきんたちなどのしたのおもひにもえ

ぬへきもおほかりけり のちにほたる 兵部卿の宮おとゞ也

右大将とこの比きこゆるはむらさきの御あねむこ也 おとゞ也

ろ これほこなたの御そんにてはなし 又むらさきの上の

御あによりも御ふみかよふ藤はかまにうひやうへのかみと

あり玉かつらへ御文かよふ人々まつ三人也 又この外に

花たのからのかみをちいさくむすひなしたるふみ一つあ

り「けんしこれはいかなればかくむすほをれたらんとて

み給 わかき手のかきさまなへてならすそほれたり

玉かつら 玉かつら

ひめ君はともかくもいらへたまはねほうこんをめしいてゝか

やうにをとつれきこえん人には人のほとをきてあまりなきけ

なからず返事なともせさせたてまつれとのたまふいまのはな
たのからのかみに

のちにか おもふとも君はしらしなわきかへり岩もる水に色し

えねは いといたふ書たるふみかなとととみにをかすほめた

まふ うこんそれはうちのおとゞの中将の君とか是にさふら

ふみるこを「もとより御らんしなれたる人にてそれにとりつ

がせてたてまつり給ふ 返して侍れともしうねくとゝめてま

かりけりと申す うちのおとゞの中将とはこの比こしうとを内大

臣と申也 その御ちやくし也 のちにかしわ木のまもんかみとい

ひし人也又とりつぎのみるこは玉かつらのしもづかへ也

このふみをけんしほめ給しゆへかしわ木をは岩もる中將とも

名付し也 玉かつら これはにしのたいのひめ君にはまことは御せうと

也 中將はゆめにもしらすけんしの御むすめとおもひてかや

うに心をつくす也 姫君はふみのすちにてはあらで大かたに

心くるしくおほすと「あるはおとゞひとしり給へるゆへ也 (ママ)

一 けんしかやうにおやめきいひてたち給ふにわか竹のいとう

つくしくおいたちてうちなひきたるをたちとまりて

源氏 ませのうちにねふかくうへし竹の子のをのかよゝにやお

いわかるへき おもへはうらめしかべい事そかしとみすをひ

きあけての給へはすこしいざり出て

玉かつら 玉かつら いまさらにかならん世か若竹のおいはしめけんを

は たつねん 中へにこそ侍れとのたまふさまいとわかやかに

うつくしたいにわたり」給てもむらさきの上に君にはまさり 夕かほこのひめ

36 ヲ

36 オ

37 ヲ

38 オ

君の御ありさまをいにしへのは、

てものゝ心もえつへくにほひある人なりとほめ給へはむらさき心へてけんしの御心にとゞにはおもひ給ふましきよとみしり給へは御いらへにあまりおやさまとうちとけきこえ給らんこそ心くるしけれとのたまふ けんしなとてかおやのかひなくはあるへきとのたまふ 紫いてやわれにてもおもひしりにきうしろめたき御心をやとの給へはけんしあな心ばやとおほしてわつらはしければこと事にのたまひなしつ かく人のをしはかるに心きよくもてなしてんとおほす物から御かたちをみたまふときはよそ人にみなさんはくちをしかりけり 玉かつらの御すりのふたにたちはなのあるをまさぐりて人ははゝにはにぬ物とのみおもふをあやしきまていにしへ人にか

夕かほ

けんし

38

よひたまへるこそあはれなれときこえたまふ
源氏 たち花のかほりし袖にくらふれはかはれる身ともおもほえぬかな よその物とおほすなよときこえ給へはいとむつかしうおもひのほかなれどさりけなくもてなして

玉かつら 袖のかをよそふるからにたちはなのみさへはかなくな

39

りもこそすれ むつかしとおほして「うつふし給へるにこほれかゝりたるかみのつやゝかにうつくしけに手つきなとつぶノ」とこゑてはだつきこまかにきよらなり ましてかやうのけちかきさまはたゝむかしの夕かほの心ちしてあはれなりけんし中へ物おもひまさるやうにおほさる おんな君は御玉かつら廿にあまり給ふ事也
としこそすくしたるほとなれどゆめにもけちかき人のけしきなどみ給ならはぬまゝにいとおそろしくあさましとおほさる

これよりのちはおり／＼けしやうこと葉にとりより給ふを女君は物おもひくはゞりたる心ちしていとくるし

まことの御おやのわたりならばおろかにはみすて「給ふともかうやうにつゝましき事はあらしかしとおほすにもはゝ君ぞ恋しかりける

39

一 けんしはいとゝ御心にかゝりてあしたに御文あり つらかりし御けしきなとあり

源氏 うちとけてねもみぬ物をわか草のことありかほにむすほをるらん さすかにおやめきたる御こと葉を玉かつらにはくしとおほしけり

以上十四首

同 井 螢 三

一 いまはかくのとやかにまきるゝ事なきけんしの御ありさまなればたのみきこえ給人／＼ほと／＼につけてみな心さだ

40

まりたる御事なり 玉かつらのひめ君のみそ御身のありかもさたたらぬやうにおほしける おとゞの御心をきてのこまかにありがたきをまことの御おやときこゆともかうはえおほしまさしとさふらふ人／＼もいふにつけてもけんしのうち／＼の御心をしらぬ人はかやうにおもふもことほりなり ひめ君はとりはづしてもかゝる心むけを人のもりきゝたらん時とおほすにいみしくつゝましくていさゝかの御たはふれ事もむねつふれてありしより心つきなくおほしなりぬ おとゝもれいの御くせなればたれをも／＼いひなやまし給へともあまりゆかしけなき事をはもてなざしとおほす いかにおもふ事あり

40

ともむらさきの上ほとはあるまじければ女の御ためは心くる
しからん中／＼ふた心なくおもはん人のまめやかならんにゆ
るしてんとおほさるへし けんしのさしつきの御おとゝひや
うふ卿の宮はまめやかにおとゝにもかこちきこえ給てせめて
ものごしにておもふ心のほとをもきこえはやとうらみ給へは
けんしわらひ給てさいしやうの君と手てなどもよろしくか
く女房をめしいてゝけんしこと葉をはのたまはせてひやうふ
卿の宮への御返事かゝせさせ給へり いかやうにかの給けん
五月四日のよひすすくるほどに宮おはしたり 御いらへ申へき
人もかたはらいなき事といふをけんしかくれておはしまして
ひきつみ給へはいとほりなくて玉かつらと宮との御あひたを
るさりありきて御心のとをりをこの女房ぞさゝめきける
一 けんしの御心に我かむすめとおほすにそ人は心をつくし給
ふかたちのすくれたるをほのかに「みせていとゝ心まどはさ
んとおほして夕くれほとよりほたるをおほくとりあつめて光
をつゝみかくしてをき給へり とかくのたまふまきれにけん
しさしより給て玉かつらの御かたのみゆへき木帳をひとへう
ちあげて。ほたるを姫君のまへにうちうつし給へり ひやう
卿の宮はみやりなる所にはかにしそくをさしいてたるやう
にひかりたれば木帳のうちをみいれ給ふに玉かつらのそびふ
しておはするさまうつくしけにみえたり とりあへすおんな
はあふきをさしかさし給へるほどにくは」しくはなけれとえ
42オ

んある事つまにすへきけしきなり とかくしてとりかくし
たれば
宮 なくこゑもきこえぬむしのおもひたに人のけつにはきゆ
る物かは おほししるらんとあり
玉かつら こそはせて身をのみこかすほたるこそいふよりまざる
おもひなるらめ 此巻をほたると名付る事はゆへ也 宮をは
このゝちはほたるの兵部卿の宮となん 五月四日の夜也 五
月雨の軒のしづくにぬれ／＼いひかなへたるふしもなくて宮
は帰給にけり 又の日五日なればためしにも引いでつへき」
ねに御文付て玉かつらの御かたへたてまつり給ふ
ほたるの宮 けふさへや引人もなきみがくれにおふるあやめのねの
みなかれん けんしのおとゝむまばのおとゞへ出給とて玉か
つらの御かたへおはしましたり つねは色かへぬあやめの御
しやうそくなれともきなし給へる人がらなるへしいづこにく
はゝれるきよらにかあらんつやも色もこぼるはかりなり 玉
かつらはむつかしき御心のなかりせはおかしくみたてまつら
ましとおほす けんし
えし人の心や」 ぶらずあやまちせぬ人はまれなる事よなん
といけみころしみ人のさすかにあはれにみえ給ふ御返りなん
とのたまひをきていて給ぬ 宮へ御返
玉かつら あらはれていとゝあさくもみゆるかなあやめもしらす
なかけれるねの
一 けふの御あそひは夏の御かたにみまやもあれはまつ花ちる

さとの御かたへけんしおはしたり けふは九重も五月の御あそひくらべ馬なんとあるへし 左右の御馬の藏人御前にいて御馬を引そろへてゑいらんにそなふ こんゑの人は「御前ちかくある也 さてくらへ馬は乗せらるゝ也 そのせちゑえわかき殿上人又馬によく乗人も大内よりすぐに六条の院の夏の御かたへまいるべし」とねりともまじる日なり 夏の御かたは中将の君の御いへのことしなに事をもとりもち給ふのちに夕きり花ちるさとのやしない也

一 御かた／＼のうへわらはしもづかへともわれもおとらじとつくしたるしやうそくともなり一まちより四人つゝおなし色のあこめかざみを四人はさる也 今日ヒのきぬの

一 付合あやめかさねあをかるへしなてしこの若葉の色

一 なてしこのきぬ 紅也 あこめ かさみこうちぎほそなかいつれもなてしこはあるへし

一 わかなへ色 (ママ) あをかるへし 是もこの比はなにゝもあるへし

一 くすだま一説薬の玉と申せともたゝくす玉よし 玉のをたもと 袖にかゝるいとなくいとうれしく あやめのかきね かけそえて

袖にしらす花の色といふはくすだまに夏の花をむすひて付るゆへ也 同ちまき 作て付へし 五月五日 男子はひ

一 くらべ馬の付合 くみてお 手づかひ 手まどはし 身をなけたる躰 かやうの事をみんとてわた殿の戸くちにみすあを

やかにかけわたしてすその木帳なをくしき木帳也たてようへわらはともみたり ごとちのふんはさやうには「いてぬとみゆ すゝしのすそを水色にすそをくるくしたり したすたれをだいにかけたる物也 引物とも云

一 こよひは花ちるさとの御かたにけんしとまり給へり ゆかをはけんしにゆつりきこえておましもこと／＼にて夏の御かたは御とのこもりたり こなたかなたのまち／＼に御あそひしけくあれど夏はさひしくのみあるをけふそこのまぢのおほえきらくしとおほされける

花ちる そのこまもすさめ草と名にたてるみきはのあやめけふや引つるしのひやかにのたまへるいとらうたし」

源氏 にほ鳥に影をならふるわかこまはいつかあやめに引わかるへき にをとりとも

一 五月雨の比は御かた／＼絵物かたりにて御つれ／＼をくらし給ふ 玉かつらの御かたはましてかきよみ給へはあなむつかしうちたれかみのみたるゝもしらすとのたまふ

源氏 おもひあまりむかしの跡をたつぬれとおやにそむける子ぞたくひなき

玉かつ なる ふるきあとをたつぬれとけになかりけりこのよにかゝるおやの心は 心はつかしけにあひしらひ給ふほとにけんしさのみみたれかはしくはおはします 以上八首」

一 いとあつき日源氏ひんかしのつり殿にいて給てすゝみたま

同 并 常 夏

ふにしの川よりたてまつれるあゆちかき川のいしぶしやうかしか也
の物おまへにてうじて大みきまいるうちのおとゝのきん
たち弁少侍待従の君なども中將夕きりの君のあたりをたつねておほ
したりすゝしきかうらんにせなかをしつゝさふらひ給ふ
ひ水めしてすいはんなどとりくゞにさうときつゝくう風は
いとよくふけどのとかにてりてやうく西日になるほどに輝
のこゑなどもくるしげにきこゆけんし水のうゑむとくなる
今日のあつかはしさかなむらいのつみはゆるされなんやとて
よりふし給へり無礼也 けんしみやつかへする人いかにたへかたからんを
ひひもとかぬほとにこゝにてたに心やすくうちとけてすこし
ねふたささめぬへからん事かたりてきかされたまへなにとなく
おきなびたる心ちしてせけんこしうとの事もおほつかなくやとの給へ
どとりいて申さん事もなき心ちしてさふらひたまふけん
しいかできし事そやうちのおとゞはほかばらのむすむむか
へてかしつき給ふときくはまことにやと弁少將にとひ給へ
は少將さまで申へき事にも侍らず春の比ゆめをみ給てあは
する物めしてたつね給しかはよそにありける御むすめをたつ
ねいで給へき夢なりとあはせたりおとと女子の人の物になりたる
事なしとかのしなされためのおりのなでしこの事をそれならて
は心もとなき事なしもしさやうの名のりする人あらはむか
へとればやうより心にかけてたつめるむすめなり中將かしはきにち
おとゝいひあつけ給しをきゝつたえたる女のわれなんうち46

おとゝのむすめなるとなのりいでたりくはしくもあひた
つねすしてむかへよせ給へればことのほかにひなびしたどな
れはとのうちの人わらひあつかふにおとゝももてわつらひ
給へるよしをかり申給ふけんしつらをはなれずおほかる
中にをくるゝ鴈をしるてたつねとり給ふがふくつけき事ふく
きとはよくけんし
ふかき心也こゝにはさやうならん人もかなとおもへどなのり
も物うきはとやおもふらんさらにこそきこえねとのたまひて
夕きり
中將の君にけんしあそんやさやうの落葉をたにひろへ人わろ
き名ののちの世にとまらんよりはおなしかさしにてなくさ
めんなんてう事かあらんとううじ給ふやうなりこれはくもあ
もこうしうし給しかどいまたゆるし給はねはいまのひめ君にてもひ
ろへおなしおとゝいなればとはらたち給ふことば世弁少侍待従は
からしとおもへり47

一 けんし御心の中にいつにても玉かつらをちゝおとゞにたい
めんさせたらんときいかにかひくしからんいたふもてなさ
んかしておほす玉かつらのかたへけんしおはしませはきん
たちも御ともまいり給へり前さいにみたりかはしき花も
うへ給はすたゝなでしこの色をとゝのへてからのもやまとの
もませいとなつかしうゆいわたしてさきみたれたる夕はへい
と「おもしろしけんし玉かつらの君にこの花ぞのいかでう
ちのおとゝにみせてまつらんとおほせらるゝ心はちゝお
とゝに玉かつらをたいめんせさせはやとの給心也ありしあ
まよのしなされたにたてしことかたりいて給し事をも玉かつ
らにかたりきこえたまふをきゝ給ふもいとあはれなり48

源氏 なてしこのとこなつかしき色をみはもとのまかきを人や

たつねん この歌の心は玉かつらをみては夕かほの事たつね

給はんはいかならんとおほせらるゝ心也」けんし

はしぎにこそまゆごもりも心くるしけれ。は 引哥たらちめ

おやのかうこのまゆこもりいぶせくもあるかないもはあはすてとい

ふ哥の心也 玉かつらのおやにあひたまはぬはまゆこもりなるへし

玉鬘 山かつのかきをおいしなしてしこのものとねざしをたれ

かたつねん 此哥ゆへとこ夏と云 記して云ろうじたまふとはてうろうする心也 したと

ははやこと也 致仕 こしうと

一 ちじのおとゝこのいまのむすめのかたへ手かきおはすると

て御ともの人の御さきをうをも手かきせいし給てかいま見給

へはすたれたかくをしはりて五節の君と云されたるわかき」てまき也

女房とすぐ六をうち給ふ かたちなとかたほならずひたひこ

そちかけれどさるかたにあいきやうつきつみゆるされたるさ

ま也 たゝもてなしものいひたるけしきのしたどきさによつ

そこなはれたるなるへしとみ給ふ さるへき人にもたちまじ

りはつかしき事をもしらすめのとのふところに我かまゝにほ

りりならひたれはかくみくるしきなるへし すぐ六うつとて

手をいとせちにをしもみて少さいく」ところこゑのしたどき

かり也 をちゝおとゝあなうたてとわらひ給し也」おとゝ

かくておはするはつれくによおほえ給ふ事しけさにとぶら

49 ヲ

ひまうづる事もなくてとの給へはとしころゆかしくおもひき

こえし御かほつねにみたてまつらぬこそ手うたぬ心ちし侍れ

たる事也 おとゝ たまさかにあひたるおやにけうぜんの心あら

はこの物のたまふこゑをすこしのどめてきかせ給へさらはい

のちものびなんかしとおこめきたまへるおとゝにてわらひて

の給へはこゝのつねにをしへ侍りし妙法寺の別当といひし

大とこのうふやに來りしあへ物に」かくしたははやきなりと

申侍りし いかてこのしたどきやめ侍らんとおもひきはきた

るもけうやうの心ふかくあはれ也 おとゝそのちかくいりき

けんのりの師こそくちをしかりけたゝそのつみのむくひな

めりをしことどもりとこそ大せうそしりたるつみにもかそへ

たれとの給てかくておはせんよりも御あねのこうきてんの女

御のかたへ時くまいてりて人のありさまをも見ならひ給へと

の給へはいますこししたどにてさやうに侍らんこそうれしく

侍らめいかに御かたく」かすまへられたてまつらんとと

し比ねてもさめてもなに事をねかひ侍らんとて水をくみいた

ゝきてもまいるなどの給へはおとゝさやうにたき木ひろい

給はずともまいるあひ給へたゝそののりのしたにとをくはと

おことこのたまひなすをもしらす おとゝのたち給ふ御う

しろを見をくりてよき四位五位の殿上人おほくそひていみし

きをひめ君けにあなめてたの我かおやゝとしころかうめてた

きたねなからあやしきこいへにおい出けんよとのたまへはか

すく六うちし人 50 ヲ

つねいてられたまはんあまり事／＼しくてといへははらたち
てれいの君の人のいふ事やふりたまふいまはおなしくちにこ
と葉なませ給ぞあるやうあるへき身なめりとはらだつまいと
けちかふおかしきかたち也

一 女御とのへまいれとの給しにしぶ／＼にやおほさんまつ御
文たてまつらんとてかきぎますちかいてはしさまによるほい
たうれぬへくみゆ あしかきのまちかきほとにさふらひなか
らいまゝて影ふむはかりも侍らぬはなこそその関をやすきせ
給らんでや／＼「あやしきをみなせ川とて

いま姫

君 草わかみひたちの海のいかゞさきいかてあひみんたこ

のうら波 ほそくちいさくむすひてなてしこの花に付給

引哥 人しれぬおもひやなにのあしかきのまちかきほとにあふ

よしもなき

引哥 たちよらぬかけふむはかりちかきまにあひみぬ関をたれ

かすゑけん

引哥 あひみてはおもてふせにやおもふらんこそその関におい

よはゝ木ゝ

引哥 わろき手を猶よきさまにみなせ川そこのみくつのかすな
らすとも

一 女御ほをゑみてみ給てもとすゑなくもみゆるかなと大納言
の君といふ女房のかたへさしやり給へはやかて御返事かくお
もしろくかゝすはあしくやとてちかき」しるしなきはうらめ
しうなん 此姫君系図にあふみの君とあり
女御の御かたにての名也

御返 ひたちなるするかの海の須磨の浦に波たちいてよはこさ

51
ウ

きの松 ひめ君この御返しをみておかしの御くちつきやまつ
とのたまへるをとかみけつりつくるひてあまゑたるたき物
をたきしめべにといふ物あからかにかひつけてまいりたまふ
よしほんにあり

此二首の哥やうありげに候へともことなる事もなし
た
ゝふうりう也以上四首」

同 并 篝 火 五

一 この比世の人のことくさにくうちのおとゝのいま姫君と事に
ふれていふをけんしのおとゝきこしめして」ともあれかうも

あれ人みるまじうてこもりゐたらんおんな子をなをさりのす
さびにても物めかしいでゝかく人にあつかはるゝ事ともとき

玉かつら

たまふをにしたいのひめ君はもりきゝ給ふにもげにおやと

きこゆとももとよりみなれぬ身はくるしかるへき事かなとお

ほさるゝにもいとゝおやにいられたてまつらん事のかたきは

なけかしかりけり けんしのおとゝも時／＼にくき御心こそ

あれどそれも人めにたてゝうしろめたき御心はなけれはめな

れきこえてやう／＼なつかしうもてなし給へり 玉かつら

に」この比は御琴ならはしきこえ給とてちかやかにおはしま
すもうちとくべき御おや心にはあらざるへし はつ風すゝし
う吹いでゝせこが衣もうらさひしきに荻のをともやう／＼お
かしきほどになりけり 玉かつらの御かたおはしまし五
六日の夕月夜はとくいりぬるに御琴をまくらにてもる友にそ
びふし給へり 御まへのかゝり火のきえかたなるを御とも

52
ウ

うこんの丞をめしてともし付させたまふ やり水のほとりけ
しきことにひろこりふしたるまゆみの木のもとにうち松たえ
ずさししぞきて」ともしたり 夏の夜の月なきほと庭の光な 53ウ

源氏 かゝり火にたちそふ恋のけふりこそ世にはたえせぬほの
をなりけれ いつまでとかやふすぶるならてもくるしきした
もえなりとあるは

引哥 夏くれはやとにふすふるかやり火のいつまでわか身した
もえにせんと云哥の心也御返し

玉から ゆくゑなき空にけちてよ篝火のたよりにたくふけふり

とならば

以上二首」

同 井 野 分 六

一 れいのとしよりものわきおとろくしく空の色かはりて吹
いづ もとあらの小萩まちえたる風のけしき也 おれかへり
露もとまるましようみゆ むらさきのうへはしちかくて前さい
ともみたるゝをおしみつゝえいり給はぬほとにびやうふなど
も風のみたれにたゝみよせたるに中将の君わた殿のこしやう
しのかみよりおまへのかたをみやり給へはれいならすとり
はらはれたる心ちするも。おそろしけれとしはしたちとまり

て見たまふにはしのおま」しに居たまへる人物にもまざるま
しうぎとうちにほふ心ちして又なくめつらしき御かたちなり

54ウ

54オ

あちきなくみたてまつる我かかほにもうつりくるやうにはほ
ひやかなり ふとおもひよそへらるゝたとへに春の明ほのか
すみのまよりかはさくらのさきこぼれたるをみる心ちすかや
うのかたちにおはするほとにわれくをのみすのまへまでも
ちかつけ給はさりけりとおもひしるにけおそろしくてたちさ
るほとにそおとゝひめ君の。かたより中かのみしやうし引あ

けておはしたる おやともみえず」わかうきよらにて物のたま
ひてほをゑみてみたまふ 人くまいていみしく吹ぬき風

に侍りうしとらのかたよりふけはこなた。のとけき也ひんか

しのつり殿などはあやうけに侍るとてとかく事おこなふ中将

はいつくより物したるそととひ給ふ 三条の宮に侍りつるを

いかめしうふきぬへき風と申しつればなんやかて又帰りまか

るへき大宮おち給事かへりてわかき子のやうにおはすると母

たまふ源氏おいても行てわかくなる。なりいまいくま(一字ミ

なる事
セケチ)ばくもおはします」ましきをよくつかふまつれとの

給て三条のみやへやりきこえたまふ せつしやうの北のかた

三条の大宮の御かたへおはする也 中将はうばやしない人也

一 これまては野はきの夕也 むらさきの上のおも影をのちま

て中将はわすれ給はざりけり こよひも三条の宮へまいる給

ふ道すからも夜ひとよいらもみする風のをとにもめのみさめ
つゝ思あかし給へり あかつきに風すこししめりてむら雨の
やうにふりいつ 中将なに事そや我か心に又おもひくはれ

55ウ

55オ

にあぬ事也(ママ)

るはおもひいつれはにけなき事なりけり けさ又六条の院へまいり給へればけんしも風のとふらひに御かたへめく

六条院

なればこの比はさとおはしまして人へも春に心をよせし女房とも引かへしうつろふさま世のありさまにたり ゆへあるくろ木あか木のませともゆいてむしともはなち給へりかゝるおりふしもこの野分吹いでたれば大かたなる人たにあ

秋好

なわりなとおもふを中宮はまして草むらの露の玉のをみたるまゝに御心まとひもしてけさは一人へむしのこともに露をかかせ給ふ 色へなるしやうそくともわらはのあこめすがたおかしくて色へなるしやうそくともわらはのあこめよりみたるは秋のたむけのぬさぶくろにやとおほゆ

56ッ

一 けんしまづ秋好中宮の御かたへまいり給てそれより夏の御かた花ちるさとへおはしたり けさのあさむなるうちつけわさにや物たちぬいなんとするおいごたちあり この比つみいたしたる花の色してはかなふそめいたしなんと物のいろあ

露くさ也

むらさき

夕きり

ひはあなたにもおとり給はず けんし中將にこそかやうにてはきせたまはめなんどの給 ほそびつめく物にわた引かけてまさぐるわかき人へもありそれより玉かつらの御かたへおはしたれば夜るの風にねすごし給ていまそ鏡などみたまひける あさ日のけざやかにさしいらるに玉かつらの君いときよらにはなくとみるかひありてる給へり

けんし けいの風に

56オ

付けてもむつかしくたはふれ事のためておはするを中將ゆかしくてみずを引きてのそき給へはこの御かたはききのふのおも影ほとはなけれど花やかなるさまはたちもならひつへし

いとわかふくらかにほうづきとかいふらんやうにほひたる御かほにかみのかよりたるひまへうつくしうみゆにあはぬたとへなれともおもひよそへらるゝ事よ八重山ふきの

57ッ

さかりに露かよりたる夕はえそおもひよそへらるゝな事に

はらちて也

玉かつ ふうきみたる風のけしきに女郎花しほれしぬへき心ちこそすれ 御返

源氏

した露になひかましかは女郎花あらし風にはしほれざらましよくもぎこえねどたちのき給ぬ

58オ

一 これよりあかしの御かたへわたり給てはしのかたに「ついでけんし風のとふらひはかりにてうち過給へは心やましくとて 大方に荻の葉過くる風のをともうき身ひとつにしむ心

明石の上

ちしてとひとりこちてはしちかくなかめてしやうの琴引きまくりてゐたまへるさまけたかし

一 あかしの姫君のかたへわたり給へればいまそおき給てこなたへおはします 女房の中にて中將は物かたりしてひいな殿はいかゝこよひの風にと申給へはごたちその事のわびにて侍るあふきの風たにまいはしみしき事におほしたるにほとふきちらしてとわらふ これにてかみと御つほねのす

58ッ

ゝりをこひてふみかき給ふ つかはすへき文共日たけて心く
るし

中将 風さはきむら雲まよふ夕にもわするゝまなくわすられぬ
君と書て吹きみだりたるかるかやに付給へり かの雲井の鷹への御文なるへし

あかしの姫君

木

この御いもうとをかいまみ給へは。たかき松にさきかゝりたる
藤の花の夏によりてかたはらにならふ花なくめつらしくよ
しありてなまめかしくみえ給ふ この中将は源氏よりも心ま
ことしくおはしませは世の人まめ人の中将とぞ申けるきの
ふ」のむらさきのうへの御かたちをほのかにみたてまつりし
心のわすれかたければ又さる人やあるくくとゆかしくて御い
もうとのひめ君などをものそぎありきたまひし也 かやうな
らん人をあき夕見ばかりあらんいのちもすこしはのびなん
かとおほしけり さもありぬへき身なからいつかたもまこ
との御はらからならぬはよろつうとくしくくなん 以上四首

同 井 御 幸 七

一 十二月に大原野の御幸とてのゝしるこの御門は源氏の御か

冷泉

くし子にておはしませは御かたちたゝおなしひかりにうつ
くしうまします これをみたてまつらんとておとこ女きほひ
いてたり物見車れいのみゆきなどよりもおほしよしある女
よをそむけるあまなともひまなき馬くるまのたちどにまじり
てたうれまろひたり うきはしのもとまでよきおんな車はさ
まよふなり ましてあしよはくるまはなかなををしみじかれ
いとをしげ也 玉かつら にしのたいの姫君も物見にいて給へり 我か

59 ッ

御ちゝうちのおとゝをめにとゝめ給へればいときよらにさか
りにしうとくの大員とはみえ給へとも」けんしのおとゝなん

夕きり

けんし

とのやうにあらはれたるうつくしきはみえたまはず おとゝ

も中将もかきりなき御かたちなりけり かやうにおほき御中
になすらひなる人もおはせすけに御門のあか色の御しやうそ

くにてうごきなき御こしのうちよりほかはめもとまらずはか

やうにうつくしきたくひは世にありかたき事なりけりとおも

ひあはせられたまふ たれもくちをしきいでぎえともの人

うて

ヒ

いふ事也 おなしめはなともみえさりけり この中に玉かつら

の御けしやう人もあたままします ほたるの兵部卿」の宮も

いとなまめかしき人とみえ給へり 又右大将の ひけくろ也

よしめき給ふもけふはやなくいをひて御ともなり御いろくろ

くひげがちにみえ給へは玉かつらは御心の中に心づきなしと

見おとし給へり ほんにかうやうにあるゆへ系図にひけくろのおと

ひけくろの北のかた成給ふ

一 源氏はかねて御ともなるへきやうにきこえしをにわかにか

たき御物いみとてまいりたまはねは御門いとほいなしとおほ

大原

本意

さる 野におはしましつきて御こしとゞめてひらばりにかん

だちめ殿上人など物まいりわたす ひらばりとほきじきとも云

鷹にかゝつらひたまふ人くはこれにてかりころもいいてた

ちになりたまふ おもひくしのしやうそくともめつらしきす

り衣みだれきてわかき人くはいみしくおもしろし 御門よ

61 オ

60 ッ

り大^{けんし}おとゝの御かたへきじ一えた奉給ふ 雑にかきりて一つ
かるを一えたと也

冷泉院 イ本大原や 雪ふかきをしほの山にたつきじのふるきふるき跡をも

けふはたつねよ 六条院よりも御使あり ヒヒ まいりちがいた

り さけ 大みき御^ベ物也 みかとのぐごしたつへきうつわ
いまつちなへといふ物也 すみ くわろ

火呂用いまのひば これはけんしよりまいりたり おとゝ御使 61ウ
ちふるなとなり

をかこまり申し給て御返

源氏 をしほ山みゆきつもれる松原にけふはかりなる跡やなか

らん みかとのよりの御哥にふるきあとをもとおほせられたる

はいにしへ太政大臣のかやうに御かりにぐぶし給しれいなと ヒ

やありけんとはんにあり かくてこの御門より玉かつらの君

をないしのかみになし申給へさるへきないしのかみなくてそ

の所のまつりことしどろ也としきりにせんしあり ヒ されと

も玉かつらの御心におやとおもひきこゆる源氏の御心たにう

ちとけかたき御心むけなり」ましてかすならぬさまのなるみ ヒ

やづかへにいてたちてけんしの御かたにては秋このむ中くう

の御心にかないきこえん事かたし又ちゝおとゝにならぬさま

のなるしられ申ては御あねのこうきてんの心わつらはしから ヒ

ん かやうにおほすはいつれに
ももうはならん事也 かなたをこなたをおもふにいと
すみやかにはなき事也

心るしくてすがくしくも御いらへなし すみやかにはなき事也
すかくとあり

おとゝはないしのかみにてうちにさふらひ給はく折ふしのさ

と出なにも入めにたてすともうちしのひてあひみん事心や

すかるへければ玉かつらの御心たに宮つかへになひき給はく
よき事とおほし」たり いとけしからぬ御あやにく心かな
さるほとにきのふのみゆきに御門の御かたちのうつくしきを
みたてまつり給て玉かつらなしいのかみの事おほしなひくら
んとてにしのたいへけんしより御文あり 玉かつらわらひ給
てつきなき事かなとの給へとも心の中にはよくもをしはか
り給かなわか心もなれくしきすちにはあらてちかくなれつ
かふまつらんはおかしからん御ありさまなりと御門の御事を
おほしけり そのいろをはかけずして御返事に

玉鬘 うちぎらしあさくもりせしみゆきにはさやかに空の光や
はみし おほつかなき」御事にもとあり 又たちかへり

源氏 あかねさす光は空にくもらしをなぞてみゆきにめをきら
しけん これはきりをきらしと也
これもきりて御門をよくもみたてまつらぬと也

一 うちよりはなしいのかみにとしきりにせめ給ふ ヒヒ 御けしや
う人はかなたこなたよりせめ給へはけんしもちわつらひ給て
ないしのかみになり給はんにはそのいへの氏をたつね給へし
けんしの御むすめとひろうはあれともまことはちじのおとゝ
の御むすめなれば藤原氏の女也さるまへにはひきかくしても
かすかの神の御心たにぬへしいかさまに」おや子の御ちぎ
りたゆへきやうな ヒ 彼はまことの御ちゝおとゝにしらせたて
まつらんとおほして玉かつらに御もぎをせさせたてまつり給
へき御やういなり その蒙着の御こしゆいにちゝおとゝをし

かすかの神の御心たにぬへしいかさまに」おや子の御ちぎ

りたゆへきやうな ヒ 彼はまことの御ちゝおとゝにしらせたて

まつらんとおほして玉かつらに御もぎをせさせたてまつり給

へき御やういなり ヒ その蒙着の御こしゆいにちゝおとゝをし

その蒙着の御こしゆいにちゝおとゝをし

その蒙着の御こしゆいにちゝおとゝをし

その蒙着の御こしゆいにちゝおとゝをし

その蒙着の御こしゆいにちゝおとゝをし

その蒙着の御こしゆいにちゝおとゝをし

その蒙着の御こしゆいにちゝおとゝをし

その蒙着の御こしゆいにちゝおとゝをし

その蒙着の御こしゆいにちゝおとゝをし

その蒙着の御こしゆいにちゝおとゝをし

その蒙着の御こしゆいにちゝおとゝをし

その蒙着の御こしゆいにちゝおとゝをし

その蒙着の御こしゆいにちゝおとゝをし

やうし申給へり

一 三条の大みやちかころなやみ給へはさやうの事によりてま
いるまじきとじたひ申給へはけんし三条の大宮へ御とふらひ
かてらまうて給て御心ちよろしくおはしましければはしめよ
りの事を大かた大宮にもかたり申給ふ うちの大臣をよみ申
給てむかしの夕かほの事よりはしめてわれも人もうちとけつ
ゝ」なきみわらひみかたり給へり うちのおとゝまついとめ
つらかなる事かなとうちなき給てありしあまよのしなきため
にかたり給し事までのたまひいてゝうれしくおほしたり 二
月十六日ひかんのほてによき日なりければ御もぎありけり
その日になりてうはの三条の大みやよりえならぬ御しやうそ

く御くしのはこまいたりたり

夕きりにもうは玉かつらく
ものかりなともうは也

大宮 二かたにいひもてゆけは玉くしげ我が身はなれぬかけこ

なりけり なかきためしはかりをいはひてなんとあり」

一 けんしのなのめならずとりはやし給ふ御もぎなれは御かた

ノノより心ノにしゐでたまふ事あり

一 秋このむ中宮よりしろきからもれいのくのゑかうひやくぶ

の外まてにほふたきものともくさくまいれり

一 ひたちの宮の御かたこのよしき給て世にある事をはかた

のことくもまなひ給ふ御心にておちぐり色のむかしはめてた

き物なりけるあはせのはかまひと具

つり給へり けんしれいのおほすに御おもてあかみ

んす 御こうちきのためにもとすゑあはぬ哥あり」

よも

きふ

我が身こそうらみられけりからころも君かたもとにな
れすとおもへは けんし見つけ給てにくきものゝおかしきを
えねんし給はず この返りはいそかはしくもせんとの給てか
きたまふ いにしへはわたましにはおちくり色をちやくしけり

源氏 から衣又から衣かころも返々もから衣かなと書給て

ぬしのたてゝこのむことはなれはよみて侍とてみせてまつ

り給へは玉かつらにほひやかにわらひ給てあないとをしろう

したるやうにも侍るかなとのたまふ

このすゑつむよりけんし
の御かたへから衣といふ
度まいたりたり」

一 その日になりてうちのおとゝゆかしくていそまいたり給へ

り いぬの時にてうちへ入たてまつり給ふ 御とのあふられ

いのかゝる所より。すこしひかりみせておかしきほとにてもて

なし給へり 中将の君にもこの時そ事のいはれいひしらせ給

ける中将は野わきのあしたのおもかけをおもひいづるにいま

ゝてははらからとおもひてすきし事をおこましくおほしけり

おとゝはいとあはれにこといみもえし給はす御ものこし

引ゆい給ふほとしのひあへすしほたれ給けり

内大臣 うらめしやおきつ玉もをかづくまでいそかくけれんあ

まの心よ 玉かつらははつかしう」事ノしき御ありさまの

さしつどひ給へるにはつかしうて申給はねは

源氏 よるべなみかゝるなききにうちよする海士もたつねぬも

くづとそみし のたまひわきたるかたもなくて帰り給ぬ お
とどはほのかなりつる玉かつらのかたちをいつしか恋しくお

65オ

64ウ

64オ

65ウ

66オ

ほせど事くしく人のいひなさん事をおほしめせは御せうそ
こなともしのひたるさまにてぞかよひける されと世の人は
もりきゝてありかたき世かたりにさゝめきけり うちのおと
ゝのきんたちは大きおとゝの御むすめとて心をつくしゝ事は
おもひたえてめつらしく「うれしくそみなおほしける」

一 かのさがなものゝ君かやうの事をきゝ付て いまの姫君した
どなりしあふみの事也 玉かつらにはいもうと也

中将弁なんとゝいふあに君たちこうき殿の御まへにおはしま
すとささしいてゝいふ事は玉かつらを二かたにかしづき給
事うらやまし又ないしのかみにわれを申なして給れとてこう
きてんをもうらみけり 中将はむかへよせたる我かあやまち
とおほせはあまの岩戸さしこもり給はんとてめやすからめと
てたち給へはほろくゝとなきてたゝ女御の御心こそたのもし
けれとてかやすく也いそかはしく也
つゝわれを内侍の督に申なしてたひ給へとせめきこえけり
以上九首

同 井 藤 袴 八

一 ないしの督の御みやづがへの事たれもゝもよほしきこえ
給へとおほしたちがたし 御けしやう人たちはいとくちをし
くうちへまいり給はぬさきにと御ふみとりつぎ申すよすか
くゝをせめわたり給へどよしのゝたきをせかんよりもかたき
事になん

引哥 てをさへてよしのゝ滝はせきつとも人の心はいかゝとそ

おもふと云哥の心也

一 まめ人の中将はのちに夕きりうちのおとゝの御むすめ「な
る。をきゝあきらめ給ふになをもあらぬ心そいていかならん
事 おりにかかゝるおもひありとたにしらせてまつらんとおも
ふにけんし御使にて玉かつらの御かたへまいり給ふ

はけんし
より物まめやかにこの中将はきこえなれ給へはいまあらざ
りの御むすめならぬ事
りけりとかはらんもくるしければいままもたゝおなしさまにみ
すにき帳そへたる御たいめんはありけり うちより御みやづ
かへの事せちにおほせらるゝよしやかてこの中将のうけ給り
たまへるなり かやうにの給は九月なり かの三条の大宮三
月かくれ給しかは玉かつらも「まめ人もいまたうば君の御ふ
くにて藤の御たもととなり この十三日ころにみそぎせんとて
かはらへみないてたまふへき御あらまし也へ出給ふなるへし

一 らんの花を一えた折てもたまへりけるをみすのつまよりさ
しいれてこれも御らんすへきゆへありとてとみにはなたでも
ち給へるをうつたへにおもひよらで玉かつらと給ふ御手を
すこしひきうごかして この哥ゆへ巻を藤はかまと也
中将 おなしのゝ露にやつるゝ藤はかまあはれはかけよかごと
はかりも 道のはてなるとあり 引哥「あつまちのみちのは
てなるひたちをひのかことはかりもあひみてしがなといふ哥
の心也 かの君うちへはまいらねどないしのかみになりぬればか
んの君といふ也 ないしのかん(旁記「督」)の君也 男君もひや
うへの督もんの督をはかんの君と也

物むつかしく心つきなしとおほせどざりけなくやをらひきい
りて

玉か
つら たつめるにはるけき野への露ならはうすむらさきやか
ことならまし やう／＼ひきいり給へは心うくもうとませぬ
るかなとてたち給ぬ 中／＼にもうちいてつるかなと心にか
り給へり

一 こしうと
うちのおとごの御ちやくしとうの中将は源氏の「御むすめ
とて心をつくし給しかといまは御いもうととまきくにそのかた
のおもひはうせさすかにかにやおほえたまふ ち／＼おと
の御つかひにおはしたり ひるなどは事／＼して月夜にか
つらの影にかくれておはしたり かん君おろかにおほさねど
いまさらにないめんせんもうちつけなれば女房していひつが
せてあひしらひ給をいとうらめしくいつかたにつけてもかく
さはなち給事とうらみて

頭の
中将 いもせ山ふかき道をはたつねすてをたえのはしにふみ
まよひける ぬい 御返」

玉鬘 まよひける道をはしらていもせ山たど／＼しくそわれも
ふみみし

一 うちへまいり給はん事は神無月とあり ほたるの宮も ひけ
将もいみしく心ほそくおほしたり まことのち／＼おと／＼のか
たへ大將は御せうとの中將していひいれ給 うちのおと／＼の
御返事にもとより身のしんだいならぬ人の事なれはいまとな
りてはからひかたしといらへたまふ うち／＼のち／＼大臣の
御心にもけんしの御心をしるにかたほならぬさかりの人をた

ゞにて見給はん事なし ざるによりてはおんなは「三つにし、70オ

たかふ物なれはそのつゐてをたかへてをのか物にをきてん事
はあるましきとおほしけり 引事に女はおさなくてはおやにした
かふわかくてはおとこにしたかふ老ては子にしたふか也 いま玉か
つらはわかればけんし男にてはからひ給へきかといふ心也

一 あさ霜えんにむすひたるあした玉かつらの御かたへ御心さ
しのかた／＼より御文あり

ひけ
大將 数ならはいとひもせまし長月にいのちをかくるほとそ
はかなき 神無月にうちへまいり給へしとあるさためをよく
きゝたるなるへし

一 ほたるの宮よりは、いとおほく／＼らみ給て」

兵部卿 あさひさす光をみても玉さ／＼の葉分のしもをけたすも
あらなん かしけたるしたおれの霜もおとさでもてまいりた
る御つかひさへそうちあひたるやとあり さ／＼に付る文是也

一 むらさきの御あにせんていの式部卿の宮の御ちやくし右兵
丞のかみは

右兵衛 わすれなんとおもふ。物のかなしきをいかさまにして
いかさまにせん とり／＼なれともいつれも御返しなくてほ
たるの宮へはかりいさ／＼かにて御返

玉か
つら 心もて光にむかふあふひたにあさをくしもはをのれや
はけつ とほのかなるを宮は「かきりなくめつらしと見たま
ふ いさ／＼かなれと身つからはなさけをかけ給へるをたのも
しううれしとおほしけり

以上八首

71オ

70ウ

69ウ

一 冷泉
うちにきこしめさん事もかしこし かたしけなし 此事しはし人にもらさ

じとしのひ給ふ とほんにあるは玉かつらの御かたへひけくろの大
將御ふみとりつく弁のおもとと云女房をかたらひてをしておはした
り 玉かつらもてはなれてはしたなくもてなし給しほとによりつか
んかたなくおはしけるをけんしのおとゞきこしめし付てこの大將は
今上

とうくろの御おちにてつるに世をしるへき人なればきやうにはおちか
ましくはいかゝあらんとこしらへ」 給てゆるしてむことり給へり

71ウ

しゆくせとよむ

一 かんの君はおもはずなりける身のすくせのほどをくちをし
くはるゝ世なき御心なり 神無月也 大將は玉かつらの御か
たちのおもふさまなるをみるまゝにこれをよその物にみなし
てはおもふさへむねつふれて石山のほとけをも弁のおもと
をもならへていたゞかまほしうおもへど玉かつらのふかくも
のしとへんのおもとをはおほしうとみ給へはえ御せんのみし
らひもせてつほねにこもりみたりけり とはひけくろをひきあ
はせたるぬうはうをたまかつらにくみ給し事也」 ひけくろはいし
山へも玉かつらの御事に願をたてられけりとみえたり

72オ

一 けんしのおとゞも人めにこそむことり給へ御心の中には大
將をおもふやうにもなき事とおほしたり うちにもきこしめ
しておもはずに心つきなしとおほすへし かやうなれともさ
となからないしのかみやくをはつとめ給ふなりけり うちの
女官

うけとりてかんわさつとめけり けんしは人しれす思ひ給し

神

事もたがひぬればくちをしくて大將のおはせぬむつかつた玉
かつらの御かたへおはしたり 女いとほつかしくおもはずな
る身のありさまを」なみたにまつはれておはするも心くるし
くてあるへきさまの事をしへきこえ給

72ウ

源氏 おりたちてくみはみねともわたり川人の瀬とはたちきら
さりしを おもひのほかなりやとてはなうちかみたまへるけ
んしの御さまつきせすめてたし

玉かつら みつせ川わたらぬさきにかてなを涙のみおのあはと

見えん けんしと玉かつらはうとかりし御中なれともちかやかに
見なれ給し御かたちをかひにわすれかたき事におほしたり

一 ひけくろのもの北のかたは先帝の式部卿の宮の大きい君む
らさきのうへよりはあね也」としころ北のかた」にてひめ君
一人おとこ君二ところうみ給へり この七八年はしうねきも
のゝけにわつらひ給て大將の御中もへたゝりて御おもひ人の

73オ

かたちよき事也

みにてすくし給ふに玉かつらのよのつねならぬに心うつり給
へはなにのなこりかあらん されと年比の心さし引かへぬ物
なればおさなき人ともをもかくてもろ友にはくゝみ給へとお
りゝは契かたらひ給ふ 北のかたははにくけもおはせぬをし
きふ卿の宮の北のかたむらさきの御まゝ母そわつらははしくの
たまひける 冬になりて雪のいたくふる夕ぐれに大將六条の
玉かつらへ
院へおはせん」とて雪を見わつらひてみ給へり さふらひに
は御ともの人ゝこはづくりてもよをしきこゆ 北のかたそ
のけしきを見たまひてあやにくなる雪をいかてわけ給はんと
すらん夜もふけぬめりやとすゝめ給 いまはかぎりとうむと

73ウ

もとおもひ給へるけしきあはれにて大将もかゝる雪にはいか
てかとのたまひなかなを心けしやうはすゝみてちいさきひ
とりめしよせて袖に引入てしめぬ給へり 大将もあはれにお
もひきこえ給てなつかしうゆくすゑの事までかたらひたまふ
北のかた御めはなきはれ「たれとも物かたりのとやかにし給
てよそにてもおもひたにおこせ給はゝ袖のこほりもとけなん
かしのたまふ心は 引哥おもひつゝねなくにあくる冬の夜は袖
のこほりのとけすもあるかなと云哥の心也

北のかた

74オ

一 いとなつかしういひてよりふし給ぬと見給にはかにおき
あがりてふせごのしたなる大なるひとりりをとりよせて大将の
うしろによりてぎとうちかけ給へり やく人の見あふほとも

(ママ)

なくあさまし こまかなるはいのめはなにもおほゝれてはら
ひすつれとこゝかしこたちみちたれは御ぞぬぎかへさはぎた

(ママ)

74ウ

まふ」御びんのわたりもうとましく御しやうそくにもはやげ
とをりてこがれたり 必ずべられるほともあらはに人のを
しはかるへければかゝる御ありさまをさなからまうて給ふへ
きにもあらねは御くしすまし御ゆるめしなとしまふ 心

ほんしやう

たがひとはいひなからうとましようつまはじきせられてうつし
の事也

心にてかやうにしたまふとおもはは又かへりみすへくもなけ
れどれいの物のけの人にうとませんとする事よとおほせは夜
中になりぬれとうちの僧めしていりのりさばく 夜ひとよ大将
はうたれひかれなきまとひあかし給つ よばひ」のゝしり給
ふこゑ人のうとみ給はんもことほりとこたちなとはいとおし

(ママ)

75イ

くおもひきこゆ あしたとくの事也
つとめてすこしうちやすみ給へるほとに玉

かつらへ御文たてまつり給ふ しろきししにいとときよらに

大将才

大

かき給へり さへなともかしこく心もちいおほしくよき人の

御文

したかた也 夜へにはかにたえいる人の侍りしに見あつかひ
侍りて身さへひえてたへかたくとあり

大将 心さへ空にみたれし雪も夜にひとりさへつるかたしきの

(ママ)

袖 とあれとかん君は夜かをなにともおほされねは御返し
なし 大将むね」つふれておほえ給ふ くるゝまゝに心も空

にて御ぞなともうちあはすむつかり給へといそきいて給ふ

御おもひ人の女房御たきものするとて申たり

木工 ひとりあてこかるゝむねのくるしきにおもひあまれ

るほのをとぞみし

いさましくに

大将 うき事をおもひきはけはいとしくゆるけふりそいと

ゝたちそふ 六条へおはしたれは玉かつら一夜のほとゝおも

へとめつらしくにほひそひたる心ちして心をわくべうもあら

ねはそまゝしはし我が殿へは帰り給はす このものゝけの

おこり」たらんほとはいかなるかたはもつきなんとおほせは

おそろしくてよりつき給はさりけり まれゝおほしてもこ

とかたにはなれあてきんたちをはよひはなちてそみたまひけ

る 北のかたの御ちゝしきふ卿の宮このよしきこしめしてい

まはしかいまめき人をわたしてもてあかめんかたすみに人に

もうけられぬさまにてももし給はんはいと心つきなかるへき

事也をのがあらんこなたはさのみしたがひくづおれでもおほ

76オ

しなんとのたまひてにはかに御むかへしたまふ 北のかた御心すこしれいになりておほしめ「ぐらすにいとあさまし お

やの御あたりといひなから又たちかへりみえたてまつらん事をおほしめたるれともさて又心ごはくたちとまりても人の心のうきをみはてん事も心うけれはいまはおもひたち給ふ

ひめ君十二三はかりになり給をとなるともかうなるともひめ君はをのれにしたかひ給へとてひきくしきこえ給 大将この

君をはいみしくかなしうし給ふ君にていまなんだにきこえずしてわかれたてまつらん事又あひみたてまつらぬやうもこそあれとなきしづみておはするをはうへいと心「うき御さ

まかなとのたまふほとにかみしななきさはささふらふ人

もあからさまにもきとにまかでんとすればをのれがじしはかな

きふくろこはこからひつやうの物まではこびやればほろくとわかれてちるほどいと物すさまじき夕のけしきなり ひめ

君は大将のいまにてもおほしませかしとまちきこえ給へともかく暮めるにはまきに玉かつらの御もたちはなれ給へきに

あらず ひめきみおきあがりてひはだ色のかみのかさねたゝ

いさゝかにこの歌をかきてはしらのひわれたる所へかうがい

の「さきしてをしいれ給ふ これをかうかいの哥と也

姫君 いまはとてやとかれぬともなれきつるまきのはしらはわ

れをわするな 御返

北の なれきとは思いつともなにゝよりたちとまるへきまきのはしらせ

一 大将の御おもひ人二人あり木くの君といふはとのゝ御かた

の人にてこれにとゝまる 又中將のおもとゝいふは北のかたの女房にてそひたてまつりていづるとて

中將 あさけれど岩まの水はすみはてゝやともの君やかげはなるへきといへは

木工の君 ともかくも岩まの水のむすほゝれ影とむべくもおも

ほえぬ世を 御むかへにはきたのかたの御はらからひやうへ

のかみはかんだちめにおはすれば事しとして中將侍従民部

の大輔以上三人御むかへにおはしたり なきさはくありさま

をつくゝときゝてうちなみたくみてなかめ給へり まき

のはしらの哥ともゆへこの巻をまきはしらと名付 ひめ君を

も系図にま木柱の君とあり

一 大将このよしきゝ給ていとおこかましき事かないたつら人

とみゆる人なれはおいらかにかたつ「かたにもゐ給てきんだ

ちもあれはとてもかくてもみはなつへき事にもあらずとてし

きふ卿の宮にわたり給へれともたいめんもなし ひめ君をも

いたし給はねはおとときんたち二ところをは我が殿へくそく

し給へり こゝにあればみんにも心やすくとてめのとにそ

へてをき給てわれは又六条へおはすればふたりならなみた

くみて見をくりたるを心くるしく物おもひそひたる心ちし給

そのゝちは大将より北のかたへよろつの事あつかひきこえ給

もおなしさまにてそありける

一 としもかへりぬ 玉かつらその春のおとこたうかのをりあ

へまいり給ふ いかめしき御かしつきなり さふらひなれた
まへる御かたののみつほねよりもこの御つほねはゆへく
しくたうかの人々をもてはやし給事もひけくろそひみてえ
ならずもてなし給けり

一 ほたるの兵部卿の宮はさしも御心をつくし給し玉かつらの
御事よその事になし給てくちおしく人わろくおほえ給へとも
ちからをよはず御事なり こよひも御せん^{みかと}の御あそひにさ
ふらひ給てしづ心なく玉かつらの御つほねのみゆかしくてし
のひて御文あり

螢の宮 みやま木。はねうちかはし居る鳥の又なくねたき春に

もあるかなさへつるこゑもこゝにとまりてとあるは

引哥 もうちとりさへつる春は物ことにあらたまれともわれぞ

ゆく
ひじ
ふりぬる と云哥の心也 かん^{ひじ}の君はおもてあかみていか

きこえんとおほすにうへわたらせ給ふとき給ていとほつか
しくかたはらいたく算給へともけんしの御けしきにたがふ所
なければこと人かはおもひなぐさめてさふらひ給ふ 十四
日の一月あかくさしいりてくまなきにいみしうきよらになま
めかしくて大將にひきとられぬる事とらみ給ふにかほのを
き所なくはつかし きこしめしつるかたちよりもこよなきち
かまさりをねたくちおしくおほして

冷御門 などでかくはいあひかたきむらさきを心にふかくおも
ひそめけん こくなりはずまじきにやとおほせらる 御返

かん
の君 いかならむ色としらぬむらさきを心してこそ人はそ

めけれ ひけくろは^{御門}かやうにいりおはしますをきくに心もま
とひてわれながら「あやまちもしつへく心うければにはかに
そらやみをし給てうちのおとへもつきしく申給ふ 又
けんしもかく申給て大内の御いとまたまはり給へり 御手
くるまをゆるされ給へり 御車よするまでうへはおはしまし
はなれずして

御門 九のゑにかすみへたてはむめの花たゝかはかりもにほひ
こじとや かたしけなくて

玉鬘 かはかりは風にもつてよ花のえにたちならふへきにほひ
なくとも さすかかけはなれなげなくはあらぬけしきをか
きりなくあはれとおほしけり あかもたれひきいにしすか
たをとにき御くちずさみなどれも御ことくさになりて。な^{みかと}
かめさせ給ふとは

引哥 たちておもひみつゝぞおもふ紅の衣裳たれひきいにしす
かたをと云哥の心也

一 大將は又さらためてむかへとらん事人のゆるしもありかた
ければにはかにみちのほとより心ちなやましければよそく
にておほつかなからんとて我が殿へくそくし申給へり 六条
のおとへはいとあさましくたゆめられぬる事とねたくおほさ
るだしぬく也 女もしほやくけふりのながけるかたをおもひ
のほかに心つきなしとは 引哥伊勢の海士のしほやくけふり風
をいたみおもはぬかたにたな引けりと云哥の心也

一 大将はおもふ事かなひぬる心ちしてうれしくかしつきもて
なしきこえ給事かきりなし 年比うつもれたりし御すまゐを
もにはかにみがきあらため人のとかくおもふらん所をもは
かり給はずかなしうしたまふきんたちをもめにもとめすか
たむきに玉かつらの御もてなしはかり也

一 やよひになれば空のけしきの心ちよけなるをにもけんしのお

と玉かつらのはみるかひありてゐたまへり」しかたち心はへ恋しくて

かのすみ給しにしたいおはしてなかも給 (ママ) 春ののとやか
にふる日恋しくおほして玉かつらへ

源氏 かぎたれてのとけき比の春さめに古郷人をいかにしのふ
や 玉かつらもうちなぎてほどふるまゝにおもひいてらるゝ
御ありさまを恋しやなんといふへき御ことならねはをしこめ
てすくし給ふにかく御文あればはつかしけれと御返

かんの君 なかめする軒のしづくに袖ぬれてうたかた人をしのば

さらめや 玉かつらの御かたのやまふき」を見給て

源氏 おもはずにいでの中道へたつともいはずでぞこうる山ふき
の花 玉かつらよりの御返しをこらんするにもけんしは玉水
のこぼるゝやうになき給ふとほんにあり 人もけんしをほう
たかはしく思 ひけくろも心もとなくかねてはうたかひ

りかたしといと玉かつらをおもひましたまひける

一 けんしより玉かつらの御かたへかりの子のいとおほかるを
かんし橋にまきはしてれいのけんしより玉かつらへ御文あ

り」

源氏 おなしすにかへりしかいのみえぬかななる人か手に
にぎるらん とあるを大将も見たまひておんなはまことの御
おやにたにみゆる事まれにこそあれましてなぞこのおとどの
つねにうらみ事はとつぶやくも玉かつらはにくしときと給ふ
この御返しはまるせんとかはるもかたはらいいたしや

大将 すがくれてかすにもあらぬかりの子をいつかたにかはと
りかへすへき よろしからぬ御けしきにおとろきてあなかし
ことあり けんしみたまひてこの大将のまだかゝるたはふれ
事」いひたるをこそみねとわらひ給ふ物から御心の中にかく
りやうじたるをからしとおほしけり

夕きり
一 とのゝ中将の君はかの雲井のかりの事わするゝおりなけれ
とも人のわろくかゝつらはん事もいとゝくるしければうらめ
しくて過し給ふ あるとききこう殿の御かたへさるへき殿上
人あまたまいりてあそひたまふ この中将もよりおはしたる
にかのしたどなるあふみの君人ゝの中をほりいでゝこのま
め人をしもさしわけてこれはそなゝ(ママ)とさゝめくこゑかしか
まし」これは御あねのくもるのかりのけしやう人 かといふ心也

あふみの君 奥津舟よるべなみちになゝよはどさほさしよらんとま
りをしへよ 人ゝこはいかにとひきいるれともさがなけに
にらみてよみたり 御返

中将 よるへなみ風のさはかずふな人もおもほぬかたにいそづ
たひせず 中将はきゝし人なりけりとおかしうおほしけると
ぞ
以上二十一首